
星に祈りを

安部由理野

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星に祈りを

【Nコード】

N3199I

【作者名】

安部由理野

【あらすじ】

宮本梨沙は母と二人暮らしの大学四年で、春には中高一貫女子高の英語の教師になる予定だった。毎年クリスマスには奇跡が起る、と信じていたこの数年。けれども、今年は違うようだ……。梨沙には愛する人がいるが、それは牧師の橋爪牧人。そしてそれは今はまだ片思い……。

愛と信仰、善と偽善、生と死……この不安定な世の中で、梨沙は真の愛を見つけることが出来るのだろうか。

〃1〃 (前書き)

非常にシリアスな純文学風物語です。一話が長いですが、ご辛抱下さい。

愛と信仰、生と死、善と悪など、形而上学的な意味合いが多いですが・・・やはり恋愛小説だと思います。

（1）

星に祈りを

（1）

梨沙が、S教会に通い出してから、もうすぐ一年になる。

一年前のクリスマス・イブの夜、キャロルの歌声に誘われるようにこの教会のチャペルに入ってから、何かが確実に変わり、そして何かが起きようとしていた。それは梨沙の心と境遇の変化かも知れなかった。

けれども、それは嘘……。

― それは嘘よ！ 本当はあの時誘ってくれた若い副牧師、橋爪^{はしづめ}牧人^と先生のせいなのだよ……。彼が居るから、わたしはあの教会に通っている。それは、罪深い事なのかも知れない。偽りの信仰なのかも知れない。

でも、どうしても、橋爪先生からは離れる事ができない……。

梨沙は大学四年で、来年中学の英語教師の就職が決まっている。

何倍もの難関を突破して、ある私学の女子中高一貫の教師に合格したのだ。母香里は喜んでくれた。

けれども、いい事ばかりではなかった。特に母にとっては、そして梨沙にとっても……。

去年、クリスマスの25日に手術をした母の恋人、豊岡は、結局帰らぬ人となったのだ。それは暑い夏の嵐の日だった。気丈な母は、恐らく最期の恋を全うし尽くして、呆然と病院の廊下で佇んでいた。

「香里さん、香里さん」と呼んでいたあの温厚な豊岡が、そこまで病魔に蝕まれていたとは……。

最初は再婚に反対していた梨沙が、やっと賛成した矢先だったが、それは遅かったのだ。人生は無情でそして決してやり直しが効かないのだ、ということをお教えたくれたのも豊岡なら、聖書の言葉にある『主は与え 主は奪う』と言う言葉を与えてくれたのも豊岡だった。

そして今、梨沙は再び恋をしている。偶然通り掛かった教会の、その副牧師、橋爪牧人を。多田という元カレとは、すっかり縁を切っていて、今梨沙は一人なのだった。

牧人はその中規模の教会の副担任牧師で、28歳。主任牧師は50代の田中と言う牧師だ。牧人はその助手のような仕事をしている。けれども、もう一人前の牧師には違いない。

「あと一年ぐらいで、僕はどこか別の地域に赴任致しますよ」と、牧人は最近よく信者達に言っていた。

信者と言っても、80%は老人か初老の人達だ。ご他聞にもれず、どの教会も若者は少ない。その少ない若者のグループ、つまり青年会『ユースの会』のメンバーは、7人しか居なかった。そして牧人は、その青年会を指導しているのだ。

梨沙は魅入られたように、その青年会に入っていた。けれども、洗礼を受けたわけではないし、実際の所、本当に信仰を持っているかどうかも分からなかった。いや、持っていない、と言った方が正しいかも知れない。

自分の心は汚い、と梨沙は思っている。けれども、元々青年が少ないS教会では、梨沙のような“お姉さん”はとても重宝がられ、大事にされた。それが梨沙の喪失感を、少しは埋めてくれていた。心地良かった。誰かが自分を必要だと認めてくれているという事は。

そして梨沙は、少なくともCS（Church School
教会学校）では、数人の小中の子供達にあれこれ世話を焼いたり、
指導したりしていた。それは自らの仕事にも通じる。例えそれが一
文にもならなくても。

そして牧人の微笑みさえあれば……。

けれども梨沙は知っていた。牧人の微笑みは、誰にでも向けられ
ていたのだ。その爽やかで穏やかな言い方やソフトな物腰も、誰に
対しても平等だった。

もちろん、梨沙にも彼の眼差しは向けられていたが、けれどもそ
れは梨沙一人のモノではなかった。そして永遠に手に届かないもの
のような気がしていた。牧人は梨沙の憧れであり、けれどもいつま
でも誰の者でもない……そう信じていたのだ。今までは……。

「ねっ、宮本さんっ」と、4人居る「ユースの会」の女性メンバ
ーの内、最も梨沙と仲の良い荒川さやかと言うOLの仲間が、ある日
曜日の礼拝の帰りに、梨沙に耳打ちした。

「え、なあに？」

「ほらほら、橋爪先生さあ〜」

「ん？」

「どうやら、独身生活も終わり、かもしれないってよ」

もしも心に爆弾が落ちたとしたら、きつとこんな感じかもしれな
い、と梨沙はその時感じた。足が止る。

「何のこと？ もしかして……結婚するかもって？」

「うん。今更だけどさ。あの歳で、そしてあのルックスで、今まで
結婚しなかった方がおかしいよね〜。でも赴任前に、とうとう年貢
の納め時かも、って噂だよ」

「『ユースの会』の人？ それとも……」

「確かさ〜、誰かのお孫さんの写真、先生に見せてたって言ってた

よ。こっそりだけどさ」

「そうなの……」

「でね、それだけじゃないの。田中牧師のお嬢さん、居るでしょ？」

「ああ、あのツンデレでT大出身の人？ 結構綺麗な人だよ」

「そう。今まで、男嫌いで通してたけど、そのハナシを聞いて泣き出したんだったよ」

「へえ」

「多分、ツンツンしてても、心の中じゃあ、橋爪先生のことと思ってたんだね。やっぱ、あのお嬢さんも、結局“オンナ”だったってわけかあ」

さやかのお噂話に、梨沙の目の前が暗くなった。

「はー、残念っ。わたしはどうでもいいけどさ、カレシが居るから。でも、いつかは橋爪先生も結婚しなくちゃーね。いつまでも一人で居るのって、牧師としては良くないらしいよ。出世しないって」

「カトリックの逆よね」と梨沙はわざと茶化して言った。

「ほんとだねー、カトリックは例え誰かを好きになっても、結婚できないんだって。ちよっと理不尽だけどさ」

「橋爪先生なら、お嫁さんになりたいって人は、一杯居たでしょうにね、なぜかしら？ 今まで独身通してたのは」

「あのイケメンで、あの笑顔で、今まで何人の女の信者を泣かしてきたのかしらーね」

ふふふっ、とさやかは屈託なく笑った。梨沙もつられて笑おうとしたが、上手く行かなかった。引きつった奇妙な、不自然な笑いになってしまったのだ。

「でもさあー、牧師の奥さんって大変そうじゃない？ この仕事、休みらしい休みも無いし、そのくせ、給料は低そうだし。それに相手は洗礼受けたクリスチャンでなきゃならないし。今時、若い子で洗礼まで受けてるのって、少ないからあ。だから、好きだったとし

ても、みんな二の足踏むんだよね、きつと」とさやかは一人頷きながら呟いた。

さやかの言う事は当たっていた。結局、梨沙も二の足を踏んでいたのだ。あらゆる面で、ただ愛だけでは乗り越えられそうも無い塀を、牧人は持っていたからかもしれない。自分とは縁の無い人間、職業、未知なる不安……そういったものが、梨沙の心に蓋をしていた。

けれども、反面誰かが牧人に寄り添っている姿を想像するのも、絶望に身震いする。誰かが牧人を独占してしまうのを見るのは、許せない。そういう良からぬ思いを抱いていたのも事実だ。

梨沙の心は揺れていた。

（2）

（2）

今度のクリスマス礼拝は21日だ。その一週間前の日曜日に、教会学校のページェント（＝小劇）がある。梨沙は、そのページェントを英語劇にしたいと、脚本を書いていた。

その事で、梨沙のパソコンにメールが入っていた。牧人からだ。

『宮本梨沙様

ページェントの英語劇、大変よく出来ています。ですがあと少しありませんが、果たして中学生達にそれが出来るでしょうか？
今から、日本語に直してもいいのではないのでしょうか？

橋爪牧人』

メールは単純で無機的なものだった。最初メールの名前を見た時の梨沙の歓喜は、たちまちの内に消え果ていた。

― 先生って、結局わたしを単に、CSの都合のいい教師としか見ていないんだわ……。

哀しみと怒りが少し湧き起こったが、梨沙は直ぐに頭を振った。

― ばかばかっ！ 梨沙ったら、利己的なことしか考えていないんだ。これは単なる奉仕活動。自分のエゴは捨てなくちゃならないくせに……。一体、何のために教会なんかに通っているんだろ？

梨沙は自分の身勝手さに、自分自身が許せなくなった。いつまで

経っても、自分は“本物の”クリスチャンになんかなれそうもない……。

梨沙はパソコンに向かった。

『橋爪先生へ』

英語が難しかったのなら、済みません。少し考えさせて下さい……』

梨沙の手が止る。

『ところで、先生がご結婚なさるって、本当ですか？』『ユースの会』のみんな、噂してますよ^^

宮本梨沙』

なんて意地が悪いんだろ、と梨沙は自己嫌悪に陥った。けれども、しばらくそのデジタルな字を眺めていたが、削除せずそのまんま、さーっと送信をクリックする。あっという間に、そのメールは電子と共に牧人のパソコンに入って行ったのだ。

瞬間、梨沙は後悔した。けれどももう遅い。明後日の日曜日に牧人に会うのが怖い。いやその前に、牧人から返信メールが来るかもしれない。いや、来ないかも……。

梨沙は両手で自分の長い髪をかきむしった。そして額を覆う。深い溜息……。疲れがどっと押し寄せて来る。梨沙は暗い夜空を窓越しに見上げると、サーッとカーテンを引いた。

多田と別れてからの一人寝はどこか淋しいが、それももう過去の話だ。梨沙はそのまま、眠りについた。

結局、メールは来なかった……。そして日曜日がやって来た。

いつもの日曜日のように、梨沙は早起きして教会学校へと向かった。まだ11月だというのに、どことなく肌寒い雨の日だ。

日本のプロテスタントの教会の建物は、どれも素っ気無い。人々が考えているような、古いヨーロッパの建築物ではないので、見た目は余りロマンを感じないのだ。梨沙が通っているS教会もそんな雰囲気教会だった。

けれども一步中に入れば、それはやはり神聖な場所の佇まいが、そこかしこにある。カトリックのような仰々しいステンドグラスの窓や、マリア像やキリスト像は皆無だが、今日の担当のオルガニストがオルガンを練習しているのか、会堂からは微かにその響きが聞こえ、教会学校のある部屋は子供たちで賑やかだ。

長老（＊教会の役員）の一人である、恰幅のいい林と言う60過ぎの信者のオジサンが、いつものようににこやかに梨沙を出迎えた。

「ああ、お早う、宮本さん。ご苦労さんです」

「いいえ……」

梨沙は何とか挨拶して、その場をすり抜けた。どうも、この林と言うオジサンは苦手だ。

ふと目を上げると、目の前に牧人が立っていた。牧人は余り背が高い方ではないが、けれども圧倒的な存在感があるのだ。それは“オーラ”と言い換えてもいいかも知れないが、けれどもかえってどことなくとっつきにくい。

いつものように、何の躊躇いも無い微笑を浮かべてはいるが、けれどもそれがどこまで本当の微笑で、どこまでが営業用なのか、今の梨沙には皆目分からない。

「おっ、宮本さん、お早う」

「あ、先生」と梨沙の足が止る。

「この間はメールをどうも。色々忙しかったので、お返事が出来ずごめんなさい」

「あ、いいんです。それよりも、はいっ、先生」

梨沙はカバンから、何かを探し出して突き出した。

「なに、これは？」

「先生の言った通り、日本語に直したページェントです」

「あ」と牧人は、一瞬だが本音を見せた。「ああ、ごめんごめん。あんなこと書くんじゃないかった。あのままでも良かったのに」

「いいえ。よく読んだら、確かに難しかったし」

それは嘘だった。ただ何となく、むしろくしゃし、見返してやりたくて書き直したただけだ。

「それは……」と牧人は黙って受け取った。「どうも、ご苦労さん」

――あの林さんと同じように言わないでよ、先生！

思わず梨沙の口から、次に又しても出てきた言葉。

「先生……あのハナシ、ほんとなんですか？」

「え？　ああ、あれね」

微かに牧人の心が揺らいだようだった。がしかし、直ぐに笑顔を取り戻すその素早さは、さすが牧師だ。

「色々噂はあるみたいだけれど、今は僕はその気は無いから。勘弁して欲しいな」

「でも、先生もうそろそろ、でしょ？」

と梨沙は心にもない作り笑いを浮かべながら、尚も問いかけたのだった。

「だって、お一人じゃ、牧会（＊教会での仕事のこと）も大変だし。牧師先生は、早く結婚しなくちゃだめなんですよ、この世界では」

「う、うん、まあそれはそうだけれど、立場は色々だから」

数秒の沈黙。けれどもちょうどいいことに、鐘が鳴った。

「さ、始めなくては」

そう言うと、牧人は教会学校の部屋に急いで入った。小さな電子オルガンが鳴り出し、前奏が始まったのだ。

牧人の背中を見つめながら、梨沙は深い吐息をついていた。

― だからわたしって、嫌われるんだわ。元カレの穢^{みのる}とも……そのあと出会った男の人達とも……。結局、友達止まりか知人としてしか……。

3

3

クリスマス・ページェントでは、梨沙は解説の役だった。

マリア役の子とヨセフ役の子はどちらも女の子で、極めて不自然なのだが、男の子が圧倒的に少ないのだから仕方が無い。それも、親が信者だから嫌々来ている子も居るので、本当に面倒だ。

けれども梨沙は来年は本物の教師になる。だから、中学生達の扱いには、場慣れていた。いや、慣れなければならぬ立場なのだ。必死に教えている時は、少なくとも牧人の存在を忘れることが出来る。

けれども今朝は違った。

『ユースの会』のメンバーではないが、一人孤高を通して若い女性で、吉田リカコと言う、年齢すらも分からない求道者（＊信者になる前の段階の出席者）が、ツカツカと牧人に近寄って、誰にも聞こえるようにキツパリと述べたのだった。

「先生、あたし、今度のクリスマスに洗礼受けますから、宜しく！」
その言葉には、梨沙だけではなく、もう一人の『ユースの会』のメンバーでもある、女子大の学生の山口葉麗はれいも、口をあんぐりと開けた。

「え!？」と驚いたような、牧人の声があった。「そうですか……それはそれは」

「なんなんでしょうね、あの人。まだここに出席して、三ヶ月ぐらいですよ」

「急に信仰に目覚めたんじゃない？」と梨沙は皮肉っぽく答えた。

「三ヶ月ぐらいで目覚めますかあ？ わたしの大学はミッションだけど、まだ洗礼受ける気持ちはないけどなあ」

「ひとそれぞれよ、多分」と梨沙も、チラッと牧人とその求道者の若い女性を見つめながら、素っ気無く言った。

牧人と吉田は、尚も長々と端のほうで何か喋っていた。吉田の瞳は真剣そのもので、単に気まぐれで言っていないのだけは確かだ。見まいとするが梨沙の視線は、自然にそっちに行ってしまうって、ページェントの方はいい加減になってしまっていた。

ふと梨沙は自分が何のために教会に通っているのか、振り返っていた。

洗礼と言う行為は、「私はクリスチャンです」と、皆の前ではつきりと公言する行為だ。それを誰かにカミングアウトするかしんないかは関係ない。自分自身の問題である。

だから梨沙は洗礼など受ける気はさらさら無かった。

この1年、教会に通って、祈り勉強し、様々なイベントを経験した。教会の中の有様も、次第に分かり、周囲とも打ち解けてきた。けれども肝心なことが分からない。何を信じているのか、信仰とは何なのか……と言う事が。理屈では分かる。けれども自分の身体の一部にはなっていない。まだまだだと思うのは、そのせいだ。

けれども、なぜかその世界にどっぷり漬かっていると、いつの間にか自分の心の何かが、確実に変わって行っているのも感じるのだ。

それは人間は生きているのではなく、なにものかに生かされている……という感覚だ。そして生や死が、運命と言う名の元に、実は「神の支配」に置かれている、と言うことも感じてくる。

理不尽な生や死は、人間の意志ではどうにもならない、という意識だ。それが、信仰なのだろうか……？ 今の梨沙には、まだ分からないことだらけ。それを吉田は、既に知ってしまったのだろうか

？
それとも？

教会学校のあとの、本礼拝でも心は虚ろで、まるで説教は耳に入らなかった。吉田のことばかりが気になって仕方ないのだった。そして、真剣に耳を傾けている牧人の姿を見るのが、耐えられないほどだ。自分の邪な気持ちに、梨沙はつくづく嫌気が差していた。

― 何度、やめようと思ったことか……。けれども、橋爪先生に会いたいと言う熱望だけは、どうしても押さえることが出来ない。

梨沙は、今日は早く教会を出た。自分が惨めだ。何となく、疎外感すら感じる。

駅に近くなって来た頃、ケータイが鳴った。見ると、親友の明日香だった。自然に顔がほころぶ。

「もしもし、わたし。あれ、明日香、なに？」

「へへへっ、別に。ただ、いつか梨沙と会えないかな〜と思ってさ。最近、なかなか会えないよね」

「な〜んだ。クリスマスには、カレシと会うから、その前にわたしに会うつての？」

「じゃないよお。お互い、進路が別々になってから、なかなか会えないじゃん。同じ大学に通っているのに」

梨沙と明日香は、東京にあるT教育大の同学年だったが、明日香は教師になるのを辞めたのだった。卒業すると、郷里に帰ると言う。「じゃ、明日でもいいよ、いや、明後日でも。わたし、最近おヒマでさあ。ていうか……実は明日香に聞いて欲しいことがあったんだ」「へえ？ 何か悩み事？ ……って、つまりは誰かい人が現れたとか？」

「かもしれない」
「えっ!？」

「でも、到底無理なの」

「またまた、どこかのお坊ちゃんかあ」

「そうじゃない。もっと深刻」

「うん、その口調じゃ相当重症みたいだから、明日の夕方にも」

「ありがとう」

時間と場所を決めて、梨沙はパタンとケータイを閉じた。梨沙のケータイは、昔のタイプだ。新しいのを買いたいが、そのお金も持ち合わせていない。

けれども、梨沙の心は少しだけ軽くなり、口元から自然にクリスマスマスの賛美歌が出た。

―　へー？　こんな時にも、出るのは賛美歌かあ？

梨沙は不思議な気持ちに襲われた。そして、再び想うのは牧人のことだった。

４

４

梨沙は明日香よりも少し前に、待ち合わせの喫茶店に着いた。今年には景気が悪いせいとか、街のイルミネーションも控えめだし、このサテンですら申し訳程度のミニのクリスマス・ツリーが入口に置いてあるだけで、電飾などは無かった。

どこも不景気なんだな」と梨沙は思う。

若者達が夢を持てなくなった現代。特に今年はそれがひどい。ひど過ぎる。

梨沙は少なくとも、来年からの就職先はあるが、それすら持つことができない若者が多い。そしてそれは、若者だけではなく、中年や老人達もそうだ。

明日香を待ちながら、梨沙は虚ろな眼差しを眼下の夕刻迫る街の景色の上に彷徨わせていた。

目の前の席に、明らかに愛し合っているとされるカップルが座って、何事か話し始めた。若い女性のほうは、絶えず笑い転げている。そしてじつと頬杖を付いたまま、愛しい相手を見つめている。決してイケメンではないそのカレシもまた、幸福そうだ。

一体何を喋っているのだろうか？　こんなご時勢でも、幸福なカップルは掃いて捨てるほどいるのか……。

「梨・沙、お待ちせー！」

ぼんやりしていた梨沙の背後から、明日香の明るい声がした。梨沙は振り返った。親友の明日香が、少し小首を傾げてこちらにやって来た。

「あ、明日香」

「何だよ、しけた顔して」

「ああ、ごめん。今色々考えてたところ」

明日香は梨沙の真正面に座ると、やって来たウエイトレスに「ソーダ」とだけ言った。

「なんか食べる？」

「いや、いいの。おなかすいてないから」と梨沙は答えた。ふいに悲しみが襲う。

「どしたの、梨沙。あゝあ、よっぽどの恋の病なのかな？」

「かもしれない」

「妙に正直だね、今日の梨沙」

明日香は大きなトートバッグを、脇に置いた。

「で？」

「まじ、やばいの。片思いみたい」

「それで、誰さ？」

「相手は……教会の牧師」

「牧師!？」

明日香は思わずすっ頓狂な声を上げ、慌てて掌で口に蓋をした。

「うん。正確には、副牧師かな」

「どーでもいいじゃん。つまりは、聖職者、てことね」

「その聖職者、っていう言葉、嫌だな」

「だって、そうじゃん」

「そうかも……」

梨沙をうつむいた。

「おかしい？」

「ううん」と明日香は生真面目に否定した。「愛は何でも超えちゃうんだ」

「なによお、その言い方は」

「別に变じゃないってこと。だって、聖職者だって、恋するし、エッチするし……結婚だってするわけだし」

「そっかー、そうよね。变じゃないよね」

梨沙は明日香の肯定的な意見で、ほっとしたように微笑んだ。

「でも、相手は？」

「気付いてない……って言うか、わたし、反抗してばかりだから」「ステキな人？」

「うん」と素直に梨沙はうなずく。「わたしにとっては。でも、他人から見ても、ステキな人も。ああ、いつそ彼がデブとか不細工なら良かったのに！」

「イケメンかぁ。イケメンの聖職者……そそるよねえ」

「ふざけないでよ」

「ふざけてなんかいない。実はさ、わたし、梨沙と同じような立場のそういう友達が居るの」

「へえ」と梨沙は思いがけない言葉に、身を乗り出した。

「相手は牧師ではなくて、僧侶だけどさ、仏教の」

「ひええ!？」

「うっふふふ。変な話なんだ、これが」

「聞かせてよ、明日香」

「それじゃ」

明日香は、少しずつ話し始めた。

5

「あたしの友達に、美帆という子がいたの。高校の時の同級生で、彼女はあたしよりも金持ちで、ま、どちらかと言うと“お嬢さん”ってかんじ。少し派手で、いつもブランド物を持ち歩いているような子。

毎月、お気に入りのファッション雑誌を買いに、真っ先に本屋に行くような子。もちろん、他の小説とか難しい哲学とか政治とか、まるで興味の無い女子大生。あ、短大生でね。でもどこか素直で憎めないって感じの子で、あたしとは妙に気が合って、時々映画見たりショッピングしたり、だべったりしてたんだ。

で、高校出てから一年目の春、3月に、あたしと美帆は一緒に裏日本の何とかって言う温泉に行ったってわけ。

それも美帆が雑誌に書いてあったからって、結構強引に誘われてあたしも行く気になったの。美帆は最初から温泉とか興味なくて、ただ物珍しかっただけかも知れないけど……。

美味しい蟹とか食べたり、上等の温泉宿に泊まって、夜通し色々話したりしたわ。うん、すごく楽しかった。帰りには金沢に寄ろう、と話し合ってそっちの方へと足を伸ばしたの。そのつもりは無かったんだけどね。

で、金沢の少し手前の所に有名な名刹があると言うので、あたし達はバスを降りた。林の中のひっそりと立つ、その地方じゃ結構有名なお寺だというけれど、あたし達にはさっぱり。

でキョロキョロしていたら、境内からお坊さんが出てきて、『ど

5

うぞどうぞ』と話しかけてくるわけ」

「お坊さん？」

「そ。黒い袈裟着て、紛れも無くその住職よ」

「ま、まさか……？」

「ふふふっ、話をはしらせないで。」

そこであたし達二人はそのお坊さんと、境内で色々話をしたってわけ。坊主頭だけれど、背がスラリとして、案外イケメンなのさ。で、仏陀のなんやらかんやらって話を延々と聞かされて、あたしはもううんざりしてたのよ。

そしたら！ 直ぐ横の美帆は、まるで魅入られたようにその若い住職を見つめているの！ その目付きは今までに無い真剣そのものだったんで、あたしは本当にびっくりしたわ！」

「恋したの！？」と思わず梨沙も身を乗り出していた。

「美帆はね、きっと話なんか聞いてなかったんだと思うのね。ただ、そのう……ま、一目惚れっていうのかしら、そんな感じだった。

だって、話が一段落した時、美帆が言ったのは、『あのう、住職様は、独身ですか？ あ、そんなことないか、まっさかね』なんて聞くんだったもの！」

「で？」

「『僕は独身です』とそのイケメン坊主はのたまったわ。『こんな山里に来てくれる人なんか……居ませんよ』と」

「ひえー、でもなんかロマンチック」

「そう思うのは、美帆とかあんたぐらいよ」と明日香は笑った。

「でも、結局わたし達、その場は別れたの。美帆は人が変わったように、無口になってた」

「だって……そういう行きずりの恋って、なかなか成就しないじゃ

ない、ねえ」

「そうだね、最初は美帆もただ旅先の思い出と、諦めちゃってた」
「だよ〜」

「でもそうじゃなかったんだ！」

「うそっ!？」

そこで明日香は、ウェイトレスが運んで来たソーダを飲んだ。

「今の時代は、ITだよ、IT」

「それ、『イット』と呼んでた中年が居たっていうよね」

「アハハハ！ ばっか！ そう……確かにね。」

戻ってから、美帆ったらそのお寺をパソコンで検索したらしいの。そしたら、ちゃんとホームページがあって、メールアドレスも付いてた。で、美帆はそこに、『あの時は、色々ご説明ありがとうございました』って書き込んだじゃったんだ。

そしたら、返事が来たんだって！ 不思議なことに、相手も美帆のこと、一目で気に入ってたらしいの。後々にその坊さんが言うには、『これも仏縁です』ってさ！」

明日香はくっくくくと、口を開けずに笑い出した。

「仏縁、かぁ。なかなかやるよね、そのお坊さん」

「でも……二人の気持ちは結構マジだったんだね〜」

「そうなの、梨沙。お坊さんと言っても、所詮はオトコ。禅宗でもない限り、結婚はできるし恋もできる。てーか、奥さん募集してたみたいよ」

「はーっ、でさ、その美帆って人、今は？」

「今年の春、結婚しちゃった、そいつと」

「へえええ、やるねえ。でも勇気あるじゃん、その子」

「実はね、あのあと一人で会いに行っただって」

「ふへえ」

「でさ、あとで散々聞かされちゃったんだけど……お寺の伽藍の中で愛し合ったんだって！」

「ぐえっ！ マジ〜？」

「うん」と含み笑いをしながら、明日香は答えた。「もともと、人里はなれた寺だもん。誰も来なかったみたい」

「積極的〜！ てーか、バチ当たらない？」

「当たらなかったみたい。それどころか、もう無我の境地だったんだって！　すごい快感で！　ぶはっは。」

ま冗談はさておき、そう、なんかね、縁って不思議よね。あんなに俗っぽい美帆が、お寺の奥さんに収まっただなんて、今でも信じられない」

「わたしは……無理……」と梨沙はつぶやいていた。

「何でえ？　梨沙だって……」

「違うの」と梨沙は消えかかるような声で言った。「だって、先生、わたしを愛してないし、それに障害が多すぎるよお。」

美帆って子は、所詮仏教徒だったわけでしょ。いや信じる信じないは別としてさ、日本人はすべからく仏教徒じゃん。でも、牧師の奥さんって、クリスチャンじゃなきゃダメなのよ……」

明日香もまた黙り込んだ。

「まず、梨沙に振り向かせなきゃね」

「相手が多過ぎる」

「だって……梨沙って、可愛いじゃん。ていうか……普通よりずっと綺麗だよ。色白だし、頭もいいし、スタイルだって。男なら、ほっておかないって感じだな」

「そんなんじゃない……」

梨沙は虚しく、ストローでアイスコーヒーをかき回した。

けれども脳裏には、寺の中で愛し合っている、絡みつく男女の残像が消えないのだ。だからと言って、教会のチャペルで牧人と愛し

合っている自分なんて嫌だ！ チャペルは神聖な場所。もちろん男女の愛も神聖だが、それをもっと超えた愛が、そこにはあるのだから。

「本当の信仰を持たないと……先生は振り向いてくれないさ」

少しやけっぱちに、梨沙は呟いていた。

「本当の信仰……か。確かにね」と明日香も相槌を打った。「むずいなく、この恋は」

「でしょ？」と梨沙は口を歪めて、妙な笑いをした。ふと泣けてくるような自分が、頼りなく漂っている……。そのずっと先に、牧人が立っているような気がした。

いよいよ、教会学校のクリスマス会の土曜日、梨沙は重い心とはやる心の両方を抱きつつ、ページェントの台本を持って教会に出かけた。

その日の朝はまだ早い。誰よりも真っ先に来たつもりが、会堂の奥にある台所で何事か話し声が聞こえた。梨沙は、瞬間立ち止まると、そっと台所のドアに近寄って、聞き耳を立てた。なぜなら、その声の主が、主任牧師の娘田中愛と、今度洗礼を受ける予定の吉田リカコであることを悟ったからだ。そしてその声音には、ただならぬ調子が潜んでいたからでもある。

「あなたは偽善者よ！」とヒステリックに叫ぶ、愛の声が聞こえてきた。

「なぜですか？ 田中さん」と、しごく落ち着いたりリカコの声が応答する。二人の年齢はほぼ同じなのかな、と梨沙は感じていた。

田中牧師の娘、愛は、はっきりとは言わないが、もう少しで30歳になるはずだ。弟二人は、父親の職業の牧師を嫌って家を出ており、洗礼すら受けていないと言うが、姉である愛は、オルガニストでもあり父親の仕事の陰から手伝っている。もちろん洗礼も受けているれっきとしたクリスチャンだ。

T大の哲学科を出て一時はOLをしていたらしいが、最近は辞めていると言う。整った顔立ちの美人なのだが、年下の梨沙にはどこか冷たい雰囲気を感じさせていた。余り他人への愛嬌と言うものがな

いせいか、男性関係の噂はトンと聞こえて来ないのだ。

けれども、陰の噂では、愛は牧人にぞっこんらしい。上辺ではそ

うは見えないが、見合いの話に心が乱れていたことは、梨沙も知っている。ことによったら、梨沙以上に、ツンデレなのかも知れなかった……。

「たった三ヶ月で、あなたに信仰なんて分かるの!？」

容赦のない言葉が、リカコに向かっていく。

「ちゃんと先生は認めて下さいました。あなたのお父様の田中牧師先生からもOKをもらいましたし、橋爪先生からも、講義を受けて……」

「何時間、講義を受けたの」

「六時間、二日に分けて」

「はー、そう！　そもそも一日一時間を六回に分けてやるべきなのに、あなたは二回。じつくりと三時間、橋爪先生の部屋に居たのね、二人だけで」

「何が仰りたいんですか!？」と問いかけるリカコの声には、明らかに恨みがましい憤怒がこもっており、梨沙は思わず身震いした。「わたし、仕事の関係で、その日しか時間が取れなかったんです!」「みんな、忙しいのよっ。それに橋爪先生だって、その為にその日は潰れてしまって、『あー、疲れた』って言っていたわよ」

リカコは無言だった。

「あ、宮本さん。おっはよう!」

突然背後から荒川さやか、大きな朗らかな声がした。戸口の側の梨沙も、また台所に居て醜く口喧嘩していた愛とリカコもまた、ギクリとして、辺りが一瞬時が止まったようになった。

「どしたの、宮本さん?」

「い、いえ、別に。中に田中先生のお嬢さんがいらしたから……」

梨沙が何か言い訳しようとしていると、台所からふいにリカコが姿をあらわし、ドアの側に居た梨沙をジロリと睨むと、足早に立ち去った。

梨沙には、リカコの瞳に悔しさが滲んでいるような気がし、微かに気が引けた。

「なんか……早く来過ぎたみたい」

「そんなカンジ、ね」とさやかも肩をそびやかして、小声で言う。

「居るのなら、手伝ってよ！」

中からイラついた様な愛の声がした。

「あ、はーい！」「わ、分かりましたー！」

二人は同時に叫ぶ。二人とも、この牧師の娘の愛が苦手なのだ。

愛、という聖書から取られた聖なる名前を持ってはいるが、愛に“本当の愛”が分かっているのか疑問だ、と梨沙はいつも思う。

教会とは言え、所詮人間達の集まり。そんなにきれいな事では済まないのだ。特に、一人のオーラのあるオトコを巡っては、中に蠢く嫉妬や恋情や様々な思惑が女性信者達を、ただの“軽薄な女たちの集団”にしてしまうのだ。

どの世界に居ても、男と女の仲は難しい、と梨沙は思った。結局、オスとメスでしかないのだ。その前には、聖なるものなんて、何も無いのと同じ。

けれども梨沙には、愛もリカコもどちらも責められない。そういう自分だって、ここに来ている動機の半分は、牧人の存在なのだから。

―― 本当の愛ってなんだろう？ 男女の愛だって、神聖なのだけど、でもそれ以上の愛だって在るはずだ……。それが、神の愛？

梨沙が物思いに耽っていると、忘れられっこ無い足音がした。

「やあ、おはよう！ あー、みんな早いんだねえ」

「あ、先生ー！」

なぜか去って行ったりカコを除いて、その場に居る全員がそう答えた相手は、橋爪牧人。梨沙は一人考える。

「まさに、今流行りの逆ハーじゃなく、ほんもののハーレムだわ、これって。でも先生には、その事が分かっているんだろうか？ それとも何にも気付かない振りをしているのかしら？」

「そりゃあ、子供たちよりも早く来なくちゃ、サマにならないし」といつも物怖じしない、さやか of 明るい声が木霊した。

「そうか、ありがたいな、君達は」

「先生って、いつもそういう毒にも薬にもならない言葉しか発しないのね……。一体先生の本音って何だろ？ それとも、別に好きな人が居るの？」

まるで梨沙の気持ちを察したかのように、牧人は梨沙の方を向いた。

「宮本さん、あと少しで就職なのに、良く頑張ってくれてるね」

「い、いいえ。別にい。どーせ、家に居ても母と顔合わせるの嫌だし。ただそれだけです」

「わたしって、愛さん以上に、ツンデレかも知れない。これじゃあ、先生の気持ちになんて、とてもひきつけられやしないよ……」。

牧人が何か答える前に、同じCSの中年のオバサン先生が、

「あつらゝ、みなさんお早いねえ。やっぱり若い方たちは、力が有り余っているらしいや」と嬌声を上げつつ入って来た。牧人はすぐさま如才なく、そのオバサン信者の方に近寄って行く。

すっかりしらけた梨沙も愛もさやかも、何気ない顔をしたまま、ページエントの準備に取り掛かったのだった。

その頃、吉田リカコは会堂の隅に座って、一人悔し涙を流していた……。

ページェントの前にやって来る子供達の為に、梨沙やさやか、そして愛の三人は、お菓子を袋詰めにする作業に取り掛かった。その作業は、ある意味気が遠くなりそうな作業だったし、この為に来る子供達にとっては、本当に意味のあることか分からなかったからだ。それは、子供達はページェントには来るが、結局その日限りであり、肝心の日曜日のCSにはやって来ないからだ。

けれども梨沙は初めてなので、それがどういう事なのか分からない。

「毎年のこととは言え、この作業どうにかならぬかしら」と、苛々しながら愛が言った。

「ですよね、結局この日に来るガキ達は、お菓子を食べ劇を見て楽しんで、おしまい、ですからね」とさやか。

「親が悪いのよ。結局教会の劇って只じゃない？ だから、寄越すわけだ。で、クリスマス気分を味あわせておいて、それが終わったらもう関係ないって感じ。結局、クリスマスチャンは減るばかり。子供達も、只で楽しんでオシマイって言うから、現金だよな」

「あの」と梨沙は驚いて口を差し挟む。「それって本当なんですか？」

「そうよ」と愛は、やや呆れたように言って、菓子袋を放り投げた。「知らなかった？ あ、そうか、宮本さんはクリスマス、初めてなんだ」

「え……はい」

「わたし達の子供の時代には、少なくとも教会に来るからって意識

の子が結構居たけど、でも最近は教会学校って、もう死に体よ。段々少なくなってるって行って、その内に子供達も来なくなるわね」

「ってことは、最後はクリスチャンは居なくなる？」

「なによお、さやかは！」と愛は、年下のさやかに向かって、ぞんざいに言い放った。

「でも、そうですよね……」と、梨沙は慎重に答えた。「信仰する人って、少ないですもん。特にわたし達、若者達」

「だから貴重なんですよね、橋爪先生なんかは」
とさやかがそう言うのと、愛はほのかに頬を染めた。

「ま、そうね。橋爪先生のような、若くてバリバリの人がこれからの教会を継がなくては、もうクリスチャンはシーラカンスになってしまうわ」

「イリオモテヤマネコとかあ？」とさやかはフフフッと嗤いながら言う。

「朱鷺しきになるかも」と梨沙も言った。「ほら、鳥の朱鷺ですよ。天然記念物」

三人は、思わずプツと噴出した。さやかは、笑いすぎて涙を流しながら言う。

「わたし達って、天然記念物？ それとも、生きた化石、かあ」

「どうして笑っているんですか？」と突然入口で声がした。こちらの三人は、ハツとして手を止める。

「あ、凄いなあ、お菓子の山。子供達、喜ぶだろうな」

「そうでしょうね……橋爪先生」とさやかは朗らかに答えたが、直前まで笑っていた愛は、プイと顔を背けた。そしてさり気なさを装って、言う。

「結局、無駄になるかもですね、先生？」

― 可愛い気ないなあ、愛さんって。意外と明るい人かも知れないのに。もっと素直に先生に接すればいいのに……って言うわたしはどうよ？

「無駄？ 無駄でもいいんですよ。でもありがたいです」

と牧人は相変わらずそつが無い。

「あ、宮本さん」

「え？」

「ページント、宜しく頼みますね。こういうの初めてでしょう？
けれど、君は教師になる人だから、きつと」と珍しく牧人の言葉が途切れた。

「きつと？」

「いや、多分上手くやってくれると思って。それじゃ、頑張っ
てね、君達」

来たときと同じように、牧人は風のように去った。

「ふん。父ったら、橋爪先生に任せっきり。実の所、橋爪先生が居ないと、父はダメなの」

牧人が居なくなると、打って変って愛が力なく言った。

「え、どうしてですか？」と梨沙。

「父って……あ、ここだけの話よ。ここだけ」

「いいですよ」とさやか。「ね、宮本さん？」

「父は、この夏、心臓に持病が見つかったの」

「へー！」

さやかはそう小声で叫び、梨沙はぐつと息を飲んだ。

「跡継ぎが欲しいみたい……」

「跡継ぎ。跡継ぎって言う……愛さんと先生が……」

「そういう意味じゃないわよっ」と愛が氣負って言った。

「でも、そういうこともあり、ですよ」

そう言い継いだ梨沙の心に、どっと哀しみが押し寄せた。それを隠そうと、梨沙はゴチャゴチャに積み上がったお菓子の山をかき混ぜ、袋に詰める振りをしながら下を向く。

白いウェディング姿の愛と牧人が手を組んで微笑み合っている。その姿が、梨沙の脳裏に悪夢のように浮かんた。

「あ、わたしそろそろチャペルに行ってきます。だれか子供達来てるかも」

「来てやしないって、最近の子は」

邪険な愛の言葉を背に、梨沙はチャペルの中に入った。そして、リカコの姿を見つけた。

「あ……吉田さん？」

「宮本さん、よね」

リカコはハンカチを握り締めながら、振り返った。その目は真っ赤で、明らかに泣いていたことが分かる。

「はい、宮本梨沙です」

「わたし、今度洗礼受ける、吉田リカコ」

「おめでとうございます」と梨沙は如才なく言った。

「何が？ 洗礼のこと？」

「ええ。だって、そんな勇氣、わたしまだありませんから」

「洗礼は、勇氣じゃないわよ。必然性なの、わたしにとっては」

「あ、ごめんなさい。済みません」

「いいんです。……わたし……恋人を亡くしたの。それで」

「えっ!？」

梨沙は驚いて棒立ちになった。

「恋人はクリスチャンだったわ」とリカコは冷静に言った。

チャペル（会堂）の中は、まだ余り暖房が効かず、ひんやりしていた。古色蒼然とした木製の長いテーブル付きの椅子が、祭壇を囲むように整然と並んでいる。天井には、シンプルな灯りがぶら下がり、申し訳程度のステンドグラスの窓が密やかに二人を包んでいる。ここは聖なる場所。それは分かっているが、けれども生々しい場所でもあるのだ。

梨沙は、リカコの隣に少し離れて座り込んだ。

「それじゃ、洗礼はその人のために？」

「いいえ、自分のためよ」とリカコはキツパリと告げた。「彼のためじゃないの、わたしのため」

「ねえ、あの……信仰って何でしょうね？ あ……橋爪先生は何か仰ってましたか？」

「それは決まっているじゃない。イエス・キリストを神の子、として信じることよ。それ以外に無いでしょう？」

はーっと梨沙は溜息をつく。今の梨沙には、そうはっきり宣言できるだけの確信は、まだ無い。

「それから、これはご利益宗教じゃない、とも言われたわ。だから信じたからって、何事もうまく行くわけはないって。難病が治ったり、お金が儲かるためでもないって。

それでも、祈りだけは欠かせないように、とも言われた。それは真実だわ。わたしは常に祈っているんだもの」

「祈り、ですかあ？」

それも今の梨沙には、なかなか出来ないことだった。この年上の

リカコには、到底太刀打ちできない。リカコは何かしらの悲しみを乗り越えてきたのだろうから。

けれども梨沙自身の悲しみは、リカコ程ではないかも知れないのだ……。

「リカコさん、『ユースの会』に入ればいいのに。せつかく、CSのお手伝いしているんなら」

「でもわたし」とリカコは苦々しく微笑む。「あの愛さんに嫌われているみたいだし」

「ああ、愛さんは、わたしも少し苦手です。でも大丈夫ですよ、何を言われても聞き流すこと」

「宮本さんって、立派ね。若いのに」

リカコはジロリと梨沙を見つめながら、そうポツンと言った。

「そして強い人なんだわね」

「いえ……そんな事ないです」

梨沙がそう行った時だ。だれかが入ってくる足音がした。

「済みません。これからオルガンの練習するんですが、いいですか？」

それはオルガニストの滝沢という中年女性だった。滝沢は、この主任オルガニストであり、そしてどこかの短大の音楽部のオルガンの講師でもある。独身か、あるいは離婚しているとも噂されていた。

「あ、ごめんなさい。今出て行きます！」

と梨沙は声をあげると、「じゃあ」と言ってから出て行った。リカコも仕方なく、チャペルからのろのろと出て行くこうとする。

奥から子供達の声がした。どうやらやっと子供達がやって来たらしい。



ページェントは、どうにか難なく終わった。

いつもは10人ほどなのに、確かにこのイベントだけには、40人ほどの幼稚園から中学生までの子供達が集まって来ていた。そのほとんどが少女だ。

ページェントでの主役級の子供達は、皆小学校高学年と中学生達。ハンドベル、合唱、ゲーム、そしておやつの時間、と慌しく終わった。

最後の最後に、赤い服のサンタクロースが、プレゼントを入れた袋を担いでやって来ると、子供達の歓声が響いた。

「この時だけだね、子供らしいのは」とさやかが、そっと梨沙に囁く。

「きっと、これが目当てなのよ」と梨沙も微笑ましく答えた。

「そうかな？ 単に欲が深いだけ」

「あら？ 『天国は、子供達が居るような所』と言われたのは誰？」
言われたさやかは、肩をすくめた。

「サンタさんは、去年と同じ橋爪先生よ」

「そっかー。先生は何でもするんだ」

そのサンタは、子供達に手作りのプレゼントを手渡していた。白い髭がその若々しい姿には、不釣り合いだ。

後ろでは、田中牧師がじっと牧人のサンタを見つめている。

「橋爪先生は、今流行りの『草食男子』ね」

「あらっ？ じゃあ、わたし達、『肉食女子』？」

「わたし達って？ ふふふっ、あなたもなの？ 先生のファン？」

「い、いや、別に」と、梨沙は思わず本音を漏らしてしまった自

分を呪った。

「いいのよ。誰もが先生のファンなんだから。でもわたしは」

「あなたは、別にカレシがいるからいいのよ」

と梨沙は肘でさやかを突きながら、意地悪く言った。「あゝあ、わたしもそうあやかりたい」

言った途端、脳裏には別れた多田穰の顔が浮かんた。それはまだほんの二年前のことだ。

ひよんなことで知り合い、目くるめく性の歓びをシェアしていたあの頃の日々……。あの時多田との愛とは、一体何だったのだろうか？多田は梨沙に嘘を付いていた。別に、有名な女子大出のカノジョが居ながら、梨沙の身体を欲したのだ。けれども梨沙だって、多田とのセックスに溺れていたではないか？ だから捨てられても、恨みつらみはもう無いと思っていた。

けれども一度知った悦びは、消え果ててしまうことは無い。

目の前のサンタさんの扮装をした牧人と、ベッドインすることはあるのだろうか？

― あっ、バカバカバカっ。こんな時に、まだそんなことを考えている……。きつと神さまのバチが当たるわ……。ああ！ もう妄想はやめなくちゃ。

サンタさんが、帽子と髭を取った。

「なぐんだ、先生かぁ！」と失望の声が、子供達の間で上がった。

「当然でしょ。サンタなんか、居るわけないじゃん」

と中学生達は、オチビたちを軽蔑しながら揶揄する。けれども、そこには眩いばかりの牧人の笑みがある。

梨沙は、その笑みが自分だけに向けられれば……と夢想した。それは、所詮ありえそうも無い不可能極まる夢想だが、けれども田中

愛だけには向けて欲しくない。そう不遜な祈りを捧げたのだった。

あと一週間で、クリスマス礼拝。……そしてイブの晩には、キャンドル・サービスと外でのキャロリングが待っている。去年、そのキャロリングで牧人に出会ったのだ……。

CSでのクリスマス会の余韻がまだまだ残っている三日後、梨沙はウィンドウ・ショッピングに出かけた。

友人へのギフトや自分への「ご褒美ギフト」を買うため……と言うのは、本当でもあり嘘でもあった。財布にはそんなにお金も無い。まだ学生の身なので、家庭教師のバイト代だけでは、大した物は買えそうにはなかったのだ。

けれどもそんなことはどうでも良かった。母と公団住宅と一緒に居るのが嫌だったのだ。

梨沙の母、香里は今日火曜日が休みだった。

香里は48歳で、結婚アドバイザーという肩書きがあった。さる外資系の結婚斡旋所のような会社に勤めていて、自らの不幸な離婚後、梨沙を女手一つで育て上げたのだった。

歳よりも若く見える凄腕のアドバイザーだが、昔で言うところ「見合い業」のようなものだ。けれども今は“婚活”という風潮のせいか、結構流行っており、憧れの職種でもある。

それも、ちょうど香里のような中年女性がピッタリ来る職種だ。

けれども、母香里は今年の夏に恋人を亡くしてからは、その余りの嘆きの故に、家での状態はおかしくなっていた。

飲めない酒を飲む、梨沙には当り散らす、そぐわない高価なブラ

ンド品をかう、派手な化粧をして出かけるが、家に居る時はパジャマのままで、昼からワインやウォッカのがぶ飲み。そしてぼんやりと見ているか見ていないか分からないテレビの前の、母の背中を見ているだけで、梨沙は苛々してくるのだ。

梨沙はそんな母親を見るのが、そして一緒に住むのが嫌になっていた。だからと言って、行くあてなどどこにも無い。10年以上前に離婚した父親は、他の女性と再婚していて、実の娘の梨沙に会うことも、現在はほとんど無かった。

けれども全くの音信不通ではない。梨沙は時々、父の働いている大手広告代理店の近くに寄ると、父の携帯電話にかけて、夕食を共に食えることが年に一、二度あったのだ。

ただし、父子の間には情の通った会話らしいものはほとんどなく、父はさり気に万札を数枚渡して去るだけだった。

今の梨沙はそういう父も、そして飲んだくれている母も大嫌いだった。

友達は今、色々なことで忙しい。梨沙も暇ではないが、けれども今年のクリスマスは、今までのような“奇跡”が起るとは、到底信じられなかった。

梨沙はぼんやりと華やぐショーウィンドウを見つめた。ストリート・ヘアに、黒いダウン。そこから伸びる、自慢の細い足には、スキニージーンズ。けれども冴えない表情は、どこか疲れている女の顔だ。

元カレの多田^{みのる}穰は、梨沙のストレートな黒髪が好きだった。

「な、絶対に染めるなよ。梨沙……俺はそんな梨沙の黒髪が好きなんだからさ」

そう甘くとりける様に呟きながら、穰はいつもセックスの前には梨沙の髪に自分の顎を埋めていた……。それからおもむろに、梨沙

の服を脱がせるのだ。

それが梨沙にとっては、至福の時だった。その愛が永遠に続くと思っていたのは、それは真っ赤な嘘。自分は子供だった。

もう二度と、誰かを愛することなど無い、と誓ったのに、けれども今、梨沙の頭の中には牧人の姿が棲みついてしまっている。牧人との愛は、ホンモノになるのだろうか？　そして永遠に続く愛なんて……この世にあるのだろうか？　永遠に続く愛は、やはり神の愛だけ？

その愛を説く牧師である牧人は、一体どんな髪が好きなんだろう……？

ふと気付くと、美容院の前だった。今まで入ったことも無い高級な感じの店だ。

「カットとカラーリングとパーマで、14000円かぁ。お呼びじゃないな」

そう思った一瞬後、梨沙はその高級な美容院に衝動的に入っていた。昨日ボーナスだと母からもらった三万円があるのを思い出したのだ。

「なによ、これ！　これがわたしへのプレゼントのつもり！？」と毒づいたものの、梨沙はそれをカバンに入れていたのだ。くしゃくしゃになった万札が三枚……。

「いらっしやいませええ」と甘い声で、若い女性の美容師が迎える。「始めてでいらっしやいますかぁ？」

「ええ？　あ、はい」

「今日はどうぞなさいます？」

「あ……カットとパーマ。それからカラーリングも。今風の、あの……肩でくるっと巻いた感じの、あの……」

「はい、分かりました。今皆さん、流行っているんですね」

「ええ……それで」

「それじゃ、コートとバッグはこちらで」

と若い店員はニッコリと微笑む。梨沙と同じ年頃だ。キビキビと立ち働いている姿は、生き生きして美しく見え、何だか羨ましい……。

「クリスマス前だから、カレシとお出かけですかあ？」

「いえ。まさか……わたしは……でも」

「綺麗になって、あつと言わせたいんですか」

「そうかも」と梨沙は正直に答えた。「と言うより、自分を変えたいの」

「分かります、その気持ち」と美容師が相槌を打つ。

「なんか今までのイメージを変えたい」

「今のヘアスタイルもいいですけど、パーマかけたらきつとお似合いになりますよ。カラーはどういう感じで？」

美容師は緑色のビニールをかけながら、問いかける。

梨沙はハタと考えた。牧人なら、どんな女を好むだろう？ 多分清純そうな感じなのかな？ でも、わたしは……わたしは、真逆になりたい！ 牧人に嫌われてもいい。でも、あつと言わせたい。ただそれだけ……。

自分に目を向けて欲しいの！ 先生……こっちを向いて欲しいの。そして、穰が好きだった髪型なんて、もう嫌っ！ 変わりたい……。そう！ チェンジ、したいの。

「今流行の色で」

「少し薄めのブラウンなんかいいと思いますよお」

「それじゃ、お任せします」

「任せておいて下さいね！」と美容師はハキハキと答えた。

――失恋したりすると、女は髪型をかえると言うけれど、ほんとね。

わたしがそうなたっちゃうなんて。でも、先生はきつとこういう髪型、嫌いだろぅなあゝ。

二時間半後、梨沙はその店を出た。

「ステキですよ。物凄くよくお似合いですう！」と美容師は自画自賛していた。

鏡の向こうの自分は、確かに今までの自分ではなかった。薄茶色の派手なガーリーなロングヘアが肩で揺れている。

「きつと、カレシが気に入りますって！」

「そうかしら……？」

――きつと、先生、わたしのこと、もっと嫌いになるわ。でもいいんだ。これはわたしへの、ご褒美ギフトなんだから。

でも、こんな格好で礼拝に出席したら……ま、いいや、どうでも。

梨沙は暗くなった夜道に出た。向こうから来る若い男が、梨沙の方を振り返った。そして他の幾人かの感嘆の視線を浴びた梨沙は、少なくとも幾らか満足していた。そう。数秒間だけは……。

突如、この髪型で、牧人を失うのではないだろうか……という恐怖で、梨沙はその場に立ち止まってしまっていた。空には星が瞬いているだけの、孤独な夜に。

10

そつと教会に入ったつもりだったが、

「あれ？」と言う独特な言い回しが、梨沙を待っていた。クリスマス礼拝の玄関先には、韓国から日本に仕事に来ている、パク・ヒュンジュンが立って、梨沙を見つめていたのだ。

「あつ、ヒュンさん。こんなに早く来ているの？」

と、梨沙も驚いて尋ねた。CSの教師でもないのに、どうしてヒュンジュンが来ているのだろう？

「えへへ。お早うございます」とこの人のいい、韓国の青年は笑った。

ヒュンジュンは、皆からヒュンさんとか、ヒュンちゃんとか呼ばれていて、『ユースの会』の男性メンバーの一人だった。この愛すべき青年は、一年前にはこの教会に三ヶ月ほど居候していたのだ。

プロテスタントの教会には、大抵「ゲスト・ルーム」と呼ばれている部屋が独立して在るところが多い。

ご他聞にもれず、この教会にもそんな部屋が二階にあり、六畳ほどの日本間とシャワー付きトイレが備わっている。研修に来る神学生や、泊まる所が無い客人、その他牧師の友人や様々な人々が時折利用しているのだ。宿代は、もちろんタダ。

韓国から来日しては見たものの、思うような職場が見つからなかったこの人のいい好青年は、親の関係の知人の田中牧師のゲスト・ルームにご厄介になっていたのだ。時代は梨沙の母の頃とは違い、今はヨン様ブーム、韓流ブームで、両国の仲が格段に良くなってい

たのも関係あった。

韓国にはクリスチャンが日本より遥かに多いため、泊まる所には困らなかったヒュンジュンは、今はめでたくIT企業に職場を見つけていた。

韓国語、日本語、そして英語がペラペラで、韓国では有名な私立大学出のお坊ちゃんだというのが、その日本とは少し違う白い肌とヤワな感じに似合わず、その精神はとても挑戦的なのだろう。

そのヒュンジュンは、目を丸くして梨沙を見つめたまま、返事もせずまごまごしているのだ。

「え？ どうしたの？」

「い、いや、今朝の宮本さんは……と、とても、ステキです」

「ステキ？ ああ……やっぱり、感じ変わったかな？」

と梨沙はガーリーな髪の毛を揺らしながら、そう言った。

「物凄く、変わりました」とヒュンジュンは正直に答えた。「女性は、化けますね」

「まあっ」と梨沙は言いながらも、まんざらではない気がした。どの国であろうと、異性からそう言われるのは、嬉しいものだ。

けれども日本の男は、韓国ほど率直ではないだろう。中には、多分年配の信者達の中には眉をひそめる者も居るかもしれない。けれども梨沙にとっては、そんなことはどうでも良かった。

「んまあ！ 後ろから見たら、どなたかと思ったわ」

と言う大声で振り返ると、大宅おおやというかなり歳を取った婦人がそう叫び声を上げていた。

「あ、大宅さん。お早うございます」

「クリスマスだから、派手にしていらした……じゃなく、おめかししていらしたの？」

そう言う大宅婦人も、70は遥かに越えているかもという歳に似

合わず、ビジュ―付きの真っ赤なセーターを着てきているのだ。

「お若い方はいいわねえ。その髪型、とても良くお似合いよ」

「ああ、はあ、どうも」

梨沙は内心にんまりした。どうやらお金を掛けただけのことはあるらしい。ただし、着ているものは、ユニクロの何でもない黒のタートルセーターなのだが……。それに、偽物の真珠のネックレス。

やがて、会堂には大勢の信者と、“クリスマスだけ信者”とも言える人々が集まり出し、いつもより大勢になった。大抵開いている席も、今朝ばかりは満員だ。

牧師カラー（襟）の田中牧師も玄関先に、早くも出ている。けれども牧人の姿は無い。

「あ……橋爪先生は？」

「今日洗礼受ける、吉田さんと祈祷室じゃない？」

直ぐ側のさやかが囁いた。今朝のさやかも、いつもより綺麗に化粧し、そして今流行のチュニックを着ている。

クリスマスはクリスマスチャンにとっては、ハレの日。誰も彼もいつもの日曜日よりもお洒落して当然なのだ。

「そうか……」と梨沙は呟いていた。

「にしても、長いわねえ。もうすぐ始まるよ」

そういえば、今日オルガンを弾く当番の田中愛が、いつものようにツンとして楽譜を持って、入って来た。

その時、リカコが悄然と現れた。先例を受ける日だと言うのに、リカコの顔には涙の筋があり、そのどうにも冴えない顔が、もっとひきつつて醜く見せている。

「何か、あったのかな？」と梨沙は隣のさやかに囁いたその時、あとから牧人が現れた。牧人は田中牧師とは違い、普通の背広なの

だ。プロテスタントでは、牧師には制服などなく、礼拝時は個人の選択に任せている。テレビなどで出てくる、いかにも、という牧師の格好は……あれは真っ赤な嘘なのだ。

牧人はいつもと同じ、冷たいぐらゐに落ち着いて、隅の席に着いた。リカコは逃げるように、前の席に走りこむ。

梨沙は初めてのクリスマス礼拝に、みっともなくキョロキョロした。そして洗礼を受けると言うリカコが羨ましい反面、どこか変なのに気付いた。

梨沙は、ハツとしてリカコの後姿を見つめた。その自分の肩に視線を感じ、梨沙は振り返った。牧人の真っ直ぐな視線を捕らえると、その途端牧人は自然に目を逸らす。

牧人の表情には何も浮かばない。けれどもその目は何かを語っていた。

それは、侮蔑なのかそれとも喜びなのか、あるいは驚きなのか……その横顔は何も語らず、謎のままだ。

――橋爪先生の妻になれるんなら……わたし、洗礼するかもしれない。ああ神様！でもこれって、罪深いことなのね、きっと。わたしには、信仰なんか無いくせに。自分勝手な利己的な考えしかないんだ……。そんなわたしなんか、神様がお許しになるはずが無い。先生はわたしの姿を見て、どう思ったのかしら？

そして分かったのだ。リカコの本心を。それは、自分と同じだったんだと！そんな不純な洗礼など、牧人が許すはずが無い。

罪深いのは、多分多くの女性を惑わしてしまう先生なのだろう……。そうかも知れない、と梨沙は思う。オルガンでの前奏が始まった。

クリスマス礼拝の日はイブの日ではなかったので、別に24日にキャンドルライト・サービスが夕刻行われた。

この日は、平日なので忙しい信者達はやって来ないが、やはりイブだと言うので多数の信者が集まっていた。特に『ユースの会』のメンバー達は、ほぼ全員出席だ。

そして礼拝の後は、毎年恒例の教会前での聖歌隊のコーラスがある。

去年のイブの晩、ふらふらとさまよっていた梨沙がこの聖歌隊の妙なる調べに誘われるように、そして牧人の優しい笑顔に迎えられて教会の門をくぐったのが、全ての始まりだった……。きっとこれは“奇跡”だと。

けれども、それは本当に“奇跡”の始まりだったのだろうか？ ちょうど一年経った今、梨沙は疑いを心に抱く。それは“苦悩”の始まり、だったような気がする。愛することの苦悩、それも元カレの穢のような普通人ではなく、特殊な職業の人、牧師の牧人。

例え、ただの人だと思いたくとも、やはりそれは“聖職者”。神の言葉を凡人に取り次ぐ職業の人なのだ。

――なぜ、こんな仕事の人を愛してしまったのだろうか？ それも、皆からも羨望の眼差しで居る人だと言うのに……。そして牧人を囲んでいる女性達は、全てクリスチャンという冠^{かんむり}を頂いている。

それが、偽りであれ何であれ、その冠を頂いていることには変わりはないのだ。その冠は、余りにもキラキラ輝き過ぎて、わたしには似つかわしくないのだわ。だって、わたしは、ただの人、なんだ

もの。

けれどもふと気付くと、慌しくしているみんなから少し離れて、梨沙はぼんやりと突っ立っていた。手にはこれから歌うキャロルの楽譜を抱いて。

人の気配がする。振り返ると、牧人の穏やかな眼差しがあった。

「あ、先生」

「準備はできましたか？」

「ええ、キャロルのことならバッチリです」

と梨沙は俯き加減に言う。真っ直ぐには見つめられない、その瞳を感じながら。

「今日の宮本さんは、どこか違いますね」

「あら？ ヒュンさんもそう言っていたわ」

「やっぱり」と牧人は珍しく断定的に言った。「よく似合っています、その髪型」

「え？ 先生は、こんな派手な格好、お嫌ではなかったんですか？」

「派手？」と牧人は小首を傾げた。「ちつとも」

「よかった！」と梨沙は嬉しくなって言った。それは偽りの言葉なのだろうか？

「僕は好きです」

「え……？」

「女性が綺麗になって行くのはね」

「まあっ」と思わず梨沙は、掌で口元を押さえた。「先生がそんなことを仰るなんて！」

「牧師であろうと何であろうと、男性は綺麗な女性は好きですよ。目の保養になりますから」

綺麗に……綺麗……。先生！ それは本心？ それとも、信者に對するお世辞なの？

「この一年、宮本さんはよくやってくれました」と牧人は続けた。
「そんな。ただ、わたしの為でもあるし。もう直ぐ、教職だから」
「それだけでは続きませんよ、宮本さん。最初に来られたのは、今日と同じイブの晩でしたね」

「ええ……よく覚えて下さっていて……」

その時、「せんせーい！」と呼びかける、70は軽く超えている女性信者の声がした。牧人は目で合図すると、そちらの老婦人の方に歩み出した。そのほっそりした背中を、梨沙は呆けたように見つめる。

たった数分の会話。けれどもそれは、どこか意味深な雰囲気が漂う。そう思うのは、梨沙の心の欲求が生み出した幻影？

「宮本さーん！ もうそろそろ時間ですよー」

その声は、女子大生の葉麗はれいだ。ハレー彗星にちなんで名付けられたという、葉麗。彼女はまだ二年生だが、如何にもミッション系の女子大生らしい柔らかな雰囲気がある。それでいて、梨沙には少し謎の多い、苦手な人物だ。

ミッション系だというのに、今はクリスチャンの生徒はほとんど居ないが、その中でも教会に出席している数少ない女子大生なのだ。それでいて、梨沙のように、まだ未信者で洗礼は受けていない。どこか透明な空気のような、ガラス細工のような、けれどもふてぶてしいものも持っている奇妙なアンバランス感が逆に魅力的なのか、『ユースの会』の中でも目立っていた。

「今年はそんなに寒くは無いですね。で、外は晴れですよ。星空がキレイ！ ね、オネエサマ」

「オネエサマ!？」

「まあまあ、いいじゃないですかあ」と甘えたように、葉麗は言っ

た。

「さあさあ、梨沙ったら何喋ってたの、先生と」

さやかもやって来て、微かにウインクした。

「別に……なんでもないから」

「みなさうん。さあ、外に出ましようね。今晚も星が綺麗ですよ。

主イエス様のご誕生を祝って、歌いましようね」

先ほどの老婦人が、若い梨沙達を促した。

「いいわねえ、お若い方々は。まだ未来があるんですもの。わたしなんかは、もう天に召される時を、ただ祈りつつ待っている日々ですのに」

その上品な老婦人は、そうさり気なく言うと、率先して外に出ようとした。

「あ……クリスチャンは、召された後、又復活できるのでしょいか？」

と梨沙はとっさに聞いていた。脳裏には、母香里の恋人だった豊岡の姿があったのだ。

「そうねえ」と老婦人は感慨深そうに答える。「信じる人々には、そうなのかも知れませんか」

「じゃ、信じてない人には？ 永遠の命なんて、ないんですか？」

「一度死んで生き返って、この世に戻った人は居ませんもの。イエス様以外にはね。でも、最後の時には、みんな甦るのですよ。そう信じましょう。そう信じて……わたしも、死にたいものだわ」

老婦人はニツコリ微笑んだ。



さやかに 星は煌き 主イエスは 生まれたもう
長くも 闇路をたどり メシアを 待てる民に

新しい 朝は来たり 栄えある 日は昇る

いざ聞け み使い 歌う

妙なる あまつ 御神よ

讃えよ 清し 今宵

♪

― 毎年イブには奇跡が起るって信じてた。でも、もうわたしには奇跡は来ないんですか、神様？ 死んだ人は、もう二度と帰っては来ないの？ わたしには分からない……分からないんです……。

通りかかる人々は、ある者はたたずんで聴き、ある者達はこの世知辛い世の中に絶望して、さっさと通り過ぎた……。

――とうとう奇跡は起きなかった。奇跡なんて嘘！　っていうか、最初から奇跡なんてこの世には存在していなかったのかも知れないんだわ。わたしが勝手に思い込んでいたのかも知れないだ……。

12

梨沙は虚しい思いを抱いて、帰路に付く。既に時計は11時に近い、クリスマス・イブの夜。見上げると、天空には星が降るように自分を包み込む。

これだけはいつも同じだった。イブには、星がよく見えるのだ。そして大抵晴れている。広大な、そして永遠の宇宙の果てには、一体何があるのだろうか？

梨沙はふと、牧人が言った言葉を反芻した。

『僕は好きです……女性が綺麗になって行くのはね』

確かに牧人は、梨沙のことを綺麗だと言ってくれた。けれどもそれは、単なるお世辞かも知れないし、牧師の常套句なのかも知れない。

もしくは、単に可愛い仔犬を見た時に、思わず「可愛い」と言うような、感嘆詞だけなのかも知れない。

梨沙はあれこれ考えては、自分で苦笑した。

――ばっかみたいね、わたしって。ただ、何気なく言われた言葉を真に受けるなんて。本当に、ばか……。

梨沙は先ほどまで、教会内のダイニングで催されていた茶話会を思い出していた。



キャロリングのあと、歌った聖歌隊のメンバーや田中牧師、牧人、そして茶話会の世話人達と共に、梨沙はなごやかでささやかなイブのパーティを持った。

去年初めてこの群れに仲間に加わり、まごつきながら共に歌って食べたイブの晩が懐かしい。もう一年経ってしまったのだ。忙しく慌しく、そして残酷な一年だった。

何一つ知らなかった梨沙だったが、今では教会内の人間模様が良く分かる。

悟ったのは、彼らクリスチャンも結局は“ただの人”だということとだった。世間では、「クリスチャンは優しくて大抵の事では怒らなくて、大概の事は許し、寛大で優しく、そして清らか」などと言う馬鹿げたイメージが定着している。

事実梨沙も昔はそうだった。けれどもいざ内部に入ってみると、妬み、嫉妬、やっかみ、悪口、シカト、いじめと何でもござれで、外の人間達と何ら変わりはない。いやむしろ、“クリスチャンですっ”と言う札が付いている分、性質が悪いのかもしれない。

それは歳が取っているとか若いとか関係ない。大概の教会は、ほとんどが老齡の信者ばかりだから、歳を取れば悟る、人に優しくなれる……なんて、真っ赤な嘘なのだ。

それでも梨沙がこの教会に通っている理由は、単に牧人の存在だけではなかった。

梨沙は何かにすがりたかったのだ。女を作り、自分達母子を捨てた父に対する恨みは、やはり何年経っても消えないし、捨てられた母が新に出来たカレシの死を受け入れず、荒れた生活を送っている

のも耐えられなかった。

そしてあと数ヶ月で教師に成るとは言っても、梨沙は教師に自信がなかった。それは教育実習のときに、名家の子女が集まるという名門私立中学での、絶するほどの陰険さに唾然となったせいもあるかも知れない。

そして……一番の理由は、この格差社会で“負け犬”となりたくないために、頑張りすぎた自分を癒してくれる所が必要だったのだ。

実際は教会で癒してもらった気はしないが、けれどもそれなりの友達や仲間達、そして“神”とはなんぞや、ということが少しは見えてきた気がする。

キリスト教の神は、決してご利益だけを与えてくれるのではなく、むしろ試練を梨沙に示したのだった。

それは神の一人子と言われたイエスの、地上における無残な死の方を見ても分かる。この人生は、楽しいことだけを追求しても決して満足する事が無いのだ。それだけは分かった。けれども梨沙は、まだ信仰を告白する気は無いし、その時が来たとは思っていない……。

キャロリングの後の茶話会では、梨沙はヒュンジュンとよく喋っていた。けれどもチラリチラリと、牧人の辺りを伺うことだけは忘れない。

牧人の周囲には、田中牧師よりも人垣が出来ていた。老若男女が居るのだが、特に洗礼を受けたばかりのリカコは、牧人の直ぐ隣に立っているのだ。

そして少し離れて後方には田中愛が、リカコを迷惑そうに眺めながらサンドイッチを口に運んでいる。けれどもその味はしていなかったに違いない。

なぜなら愛の視線は、牧人の横顔だけに注がれていたように見えるのだ。

さやかはかなり離れて、ケータイで誰かと話していた。恐らくカレシなのだろうか？

「やあ、ご苦労さん」

突然背後から田中牧師の声がした。この小太りで温和そうな牧師は、何を考えているか分からない、可もなく不可もないような人柄だと梨沙は感じていた。

「あ、田中先生。もうお身体はいいですか？」とヒュンジュンは率直に聞く。けれどもヒュンジュンが言うのと、全然嫌味に聞こえない。

「え？ ああ、まあね」と田中牧師は答えた。

「でも、橋爪先生が居るから、ご安心ですね」

と梨沙もつられて言った。

「橋爪先生と、愛さんは結婚するんですか？」

このヒュンジュンの問いかけに、一瞬梨沙の心臓は飛び出しそうになった。が、それは田中牧師も同じだったらしい。

「どうしてそんなことを？」

「だって、跡継ぎとかあるでしょ」

「いやあ、パク君。そんなに簡単なことじゃないよ」と田中牧師。

「そうですかあ？」

「別にこの教会はわたしのものではないし、仏教のように世襲制でもないんだよ」

「あら、そうなんですか？」と少し驚いた梨沙。

「そうだよ。牧師は自由に教会を選ぶ権利がある。だから橋爪君が、いつまでここに居るのか分からない。それに愛だって……結婚はどうかなあ。なにせ、あんな愛嬌の無い娘だからね」

田中牧師の顔に、淋しげな陰が宿る。

「でもう……愛さん、橋爪先生が好きみたい……な気がするんですけど」

と梨沙は言ってから、余計なことだったのかと後悔した。

「え！？ そんな素振りにはわたしには見せないが……。ま、娘の気持ちすら、わたしには分からないんだよ」

「愛さんと橋爪先生が結婚すれば、万歳♪なんでしよう？」

とヒュンジュンは無邪気に言った。梨沙の顔から笑みが消え、田中牧師の顔は強張った。

「何でなのお、ヒュンさんは」

「だって、見たんです」

「え？」

「橋爪先生、ここから直ぐの所にマンション借りてますよね」

「それはね、教会が借り受けたんだよ、パク君」

「そうですか？ ああ、以前ね。僕がそこ通った時、そのマンションから愛さんが出てくるの、見ましたよ。夜ですけど」と能天氣にヒュンジュンは語る。

「そうか……。うーん、それは……」と田中牧師は、言葉少なに答えたが、梨沙の心は今にも砕けそうになっていた。



梨沙はそのことを思い出すと、通りに立ち止まってこぼれ落ちる涙を拭いた。

クリスマスが終わった後、梨沙はしばらく教会を休んだ。

世間では、年末の忙しい日々も大晦日も正月も、ただ何となく来て何となく過ぎて行く……。

元旦には、元旦礼拝があったのだが、梨沙はそれも休んだ。（注…やらない教会もあります）時折、『ユースの会』のメンバーのことを思ったり、行かないことに対する罪悪感があったものの、梨沙は完璧にそれを見殺した。と言うより、無視する自分を嫌悪しつつも、その素振りを続けていた。

― あゝあ……何もかも嫌だ……何もかもうざい……離れていたい、離れて……。

けれども、牧人の姿は常に梨沙の脳裏に居座り、消え去ってはくれない。牧人と愛がichaichaしている妄想を追い払う事は到底出来そうに無い。

皆がお祝いし、うきうきしている時、梨沙は沈んでいた。へこんでいた。

けれどもそれは何も梨沙だけに限った事ではなく、梨沙の母もそうだったようだ。

梨沙の母香里は、大晦日の晩から飲み始め、朝梨沙が起きてくると、炬燵のなかでいぎた無く眠りこけていた。音を消したテレビがついたままで、画面の中には振袖をジャラジャラ着たタレント達が、馬鹿笑いをしている。

「あゝあ、なんだよお、これ」

梨沙はスイッチを消すと、母がデパートで買って来たと言う、割りに高価な御節の蓋を開けてみた。全然美味しくない……。

「あ、梨沙。今、何時？」と寝ぼけ眼の母が、やっと薄目を開けて聞く。

「もう10時半ぐらい」と素っ気無く答える梨沙は、髪の毛をくしゃくしゃにし、アイラインを付けたままの母の姿をおぞましく感じた。

「梨沙、あんたさあ、教会には行かないの？」

「どうでもいいじゃん、そんなの」

「最近、あんた変だよ」

「お母さんだって。昨日のまんまの格好でさ、何考えてんだか」

「そう言うあんただって、パジャマのまんまだよ」

「いいじゃんか！ 今日元旦だし。一日食っちゃ寝、するから」

母はやっと炬燵から身を起こした。疲れてやつれた若作りの顔が、今朝は急に老けて見える。

「昨日まで仕事だったなんて、ほんと、世間様は冷たいわよ。それだからって、収入は少ないし」

「でも三日間は休むんでしょ？」

「今年は四日が日曜だけど、日曜日は稼ぎ時だからさ。……ま、仕方ないか」

母子は、どうにか洗顔と着替えをすると、だらしなく炬燵に寝そべりながら、出来合いの御節を食べ始めた。侘しい元旦だ。

酒が入ると、香里は知らず知らず愚痴を言い始める。

「大体さあ、結婚紹介業って花形だと言われるけど、ぜんぜん大したもんじゃない。収入も低いし……それでいて、毎日ちゃんと

してなきゃなんないし。

一番嫌なのは、来る客の要求が身勝手だってこと。男はもう40近くても若い娘こがいいといい、そのくせ、学歴しゅれきだけしか能の無い奴ばっか。

でさ、女の子ったら、今度はやたら高望み。もう30は遥か超えてんのに、弁護士、医師、会計士とか、IT起業の若社長とか……ほんと、やってらんないわ！ 自分の鏡を見てくれて言いたいわよ。ネイルだけは、しっかとギラギラさせ最新の髪型に最新の服を着て、キャリア・ウーマンぶってて……」

「もういいじゃん」と梨沙もいい加減うんざりして、香里を遮った。

「不味い御節が、余計不味くなる」

「あーら、ごめんねー、未来の先生様っ」と香里は、もう半分は酔っ払っている。

「だけど、お友達の明日香さんは、教師になるの辞めたんだってね」

「そう……実習で散々いじめられたの、生徒達に……」

梨沙は、実習の学校の片隅で嗚咽を上げていた明日香を、チラッと
思い浮かべた。

「それだけじゃないのよ、梨沙ったら、お婆かー」と香里は嗤った。

「きつとカレシと結婚するんでしょ。すぐに」

「でも、明日香、実家に戻るって言ってたし」

「梨沙ー、あんただって、カレシ取り逃がしたじゃない。ははは。
どうせ御曹司だったんだから、合いつこないか」

母親の冷笑が、梨沙の頭にカチンときた。

「どーでもいいじゃん、そんなの。それで、結婚幹旋業しているんだ！ 嫌味ばっかじゃないの！」

「だからあー、今度は神頼みってか？」

益々香里は毒の在る言葉を吐いた。

「そんな不純な動機じゃないよお。もういい加減にしてよ！」

「なら、教会でカレシ見つけたら？ それとも、当分独身教師として一人で生きるか？」

「もう、わたしちよつと外に行ってくる！」

梨沙は、ジーンズ姿で、家から飛び出した。これ以上、香里の御託を聞きたくはなかった。もしもお金があるのなら、もう母親とは同居したくない。けれどもそれはまだ無理だ。

近くのコンビニに逃げ込むように入り、どうでもいい雑誌を手にする。花嫁衣裳の表紙のブライダル雑誌が鎮座していた。

――花嫁なんて……絶対に無理。

でも、あの愛さんって、ツンデレのふりして、先生に近寄っていたんだ！ 何してたの？ 先生と同じ部屋で何してたの……？ ちえっ、騙されてたんだ、わたし。馬鹿なわたし……。

でも先生……あんな人が好きだったの？ それとも、愛さんが勝手に入り込んだのかしら？

ああ、嫌だ嫌だあ！ 元旦からこれでは、頭おかしくなりそう！

その時ケータイが鳴った。

梨沙はお尻のポケットのケータイを取り出した。写真は明日香だ。

「はい、もしもし。明日香く？ どうしたの？」

「あ、梨沙……今、いい？」

「うん、いいよ。ちょっと待って、店出るから」

梨沙はケータイを持ちながら、コンビニを出た。

「あ、おめでとう、梨沙。でも元旦でしょ？ 教会には行かなかったの？」

「行って無いよ。行ったとしても、もうお昼過ぎじゃん。あつ、うん、明けてましておめでとう。で、どうしたの、明日香？ 実家に戻ってなかったの？」

「これから帰る。ってか……今東京駅。新幹線に遅く乗るの。今から来れる？」

「うん、いいけど」

「ごめんね」

「どうせ、暇なんだ、あたし。それに家に居ても、母親は管巻いてるし。全然冴えないんだから。いいよ、これから行く」

梨沙は待ち合わせ場所を確認してからケータイを閉じ、ポシェットの財布にどれくらいお金があるかを見た。どうにか今日一日分遊ぶぐらいはありそうだ。

香里の仕事は上手く行っており、今でも大学生の梨沙は母の香里におんぶに抱っこ状態で、それが情けなくもある。バイト代と言っても、そんなにあるわけではないのが実情だからだ。

「ま、いいか……。でも明日香の声、どこか切羽詰っていたな」。

どうしたんだろ？」

—・—・◇・—・—・◇・—・—

明日香が指定したのは、東京駅丸の内。ちょうど窓から東京駅のホームが見えるという不思議な茶店だ。

冬の夕暮れは早い。すでに暗闇が押し寄せている。

明日香は店の入口近くに坐っていた。横には大きなボストンバッグ。ふと見ると、淋しげな横顔がある……。

「ごめん、ごめん。まだ新幹線間に合うかな？」

梨沙は慌てて駆け込むと、直ぐに謝った。明日香は言葉少なに、顔を横に振る。

「時間は決めてないの」

「でも元旦だよ。多くない？」

「立っててもいいし」

「ね、どうしたの？ 今頃」

「ケータイでも、メールでも良かったかも知れない。でも、なんか梨沙の顔見たくて。ごめんね」

「別にいいよ。わたし、暇だし」

梨沙は坐ると、しっかと明日香の顔を見つめた。

「どうした……の？」

「カレシと別れた……」

「ええっ！？ でも、上手く行ってたんじゃなかった？ だってえ、クリスマスにホテルに行くんだって、言ってたじゃないさ」

「行ったよ。でも」と明日香は言いにくそうだ。

「あ、わたし、紅茶でいい。ケーキがあります？」

と梨沙はやってきたウェイトレスに向って問う。「あれば、チーズ

ケーキと」

ウェイトレスは無機的に去って行く。

「へへへ。わたし、御節嫌いでさ。ちよっとお腹減ってんの」

「ねえ、梨沙く」

「なに？」

「何もなかったの。一緒に居たけど、ホテルに」

「へ？」

「カレシ、ずっとゲームしてて、わたしは風呂から出て、ずっと夜景見てて……それだけで」

「そっかー。でもそれって」と梨沙は突っ込む。「その気が無かったからって、別に別れなくても」

「ううん。彼、わたしが教師になるのを諦めた、と告げちゃった頃から、少し変だった。君は初心貫徹できないのか、とか言っちゃって」

—・—・◇・—・—・◇・—・—・—

梨沙は黙り込んだ。

あの時の教育実習は酷かった。中学生達は、実習生をいじめる事に快感を感じていたような気さえする。梨沙の英語の授業中も、梨沙を平気でからかう帰国子女も居た。

「先生、それで英語の教師になれるんですかあ？」

けれども何より、明日香への苛めはすごかった。明日香の福島訛りを平気で真似する。通りかかりざまに、「うざい」「きもい」とあからさまに聞こえよがしに言う。

「てーか、先生く、教師の才能ないんじゃないの」と言う生徒も居た。

それが、なんとミッション系の女子中高一貫校なのだ。聖書の中に、アイドルの写真を挟むのはまだ可愛い方だ。

ミッションだから必ずチャペルでの礼拝が週に一回あるが、後列の子達はほとんどメールをしているような有様だった。

そして……なぜか明日香のケータイに、嫌がらせメールが入りだした。

「ね、ね、ね、せんせー。教えてくださーい。メアド」

と猫なで声で言う生徒を可愛いと誤解した明日香は、その生徒にメアドを教えた。すると、あっという間に、そのメアドは全生徒に知らされたらしく、

「ぶすぶすぶすぶすぶす」と言うメールや、「しねしねしねしねしね」と言うメールが来るようになった。

子供の時から先生になることを夢見ていた明日香は……結局、教師になるのを諦めたのだ。と言うよりも、そのせいで鬱を併発してしまったといっている。

けれども明日香のカレシはそれを理解していると思っていた。事実はどうも違ったようだ。

「今のオトコって、その気にならない子も多いし」と梨沙は慰める。駄目だと分かっている。

「でも以前は違ってた。で、わたしから昨日言ったの。別れようって」

「そしたら？」

「『分かった』てメールが、直ぐに来た。それっきり」

梨沙は、言葉が出てこなかった。

「あ、もう行くかな。なんか梨沙に打ち明けたら、すっきりした。梨沙こそ、頑張ってるね」

「何を頑張るのさ」と梨沙は答えた。「恋に、頑張るは、愚問じゃないの？」

「そうだね」と明日香は笑う。それは泣き笑いに見えた。

梨沙は、それから2週間、牧人の居る教会には行かなかった。

悔しいが、梨沙はもうどうでもいいと、半ばヤケツパチになっていたのだ。そして、教師になった後には、キツパリと牧人を忘れて新たな出発をしようと決心までしていた。

けれども、それは虚しい決心……。何かあれば、音を立てて崩れていきそうな、まるでバベルの塔のような、虚しいものでしかない。

そんな時、パソコンのメールを開けてみて、梨沙はドキツとした。牧人からのメールがあつたのだ。

クリックする手が、微かに震える。

けれども中身は、素っ気無い程の、事務的なメール……。

『 宮本梨沙様

次週のCSは、あなたが英語で、聖書の箇所を引用して説明する日ですが、来られますか？ それとユースの会の新年会について、何かご提案はありますか？

それでは

橋爪 牧人 』

梨沙は猛烈な腹立たしさで、そのメールを削除しようとした。けれどもそれをする、直後には自分が酷く惨めで、そして深く落ち込むことを梨沙はもう分かっていたのだ。

― 理性的にならずに、理性的に。
でも、もう行きたくないって気もあるし、そう正直に書こうかな？

梨沙は深呼吸すると、打ち始めた。

『 橋爪先生

もう私、教会に行く気は無いんです

』

「いや、やめた」と梨沙はそう呟くと、その文を消し、頬をテーブルの角に載せた。辛い切ない思いが、苦く苦く心底からこみ上げてくる。

梨沙は新たに打ち始めた。

『 橋本先生

分かりました。考えておきます。
ありがとうございます。
それと

』

「それと？」と梨沙は独り言を言う。「何を書きたいの、わたし？」

『 それと、一つお聞きしたいんですが。

今、ユースの会で、先生が田中愛さんと、婚約するのだという噂が流れています。

＊ 本当ですか？ それが真実なら、おめでとうございます＊^^

クリックした後、自分がサタンになったような気がした。

― 本当に嫌味なわたし……。こうまで捻くれただなんて。

梨沙は暫くパソコンの前で、肘を立てぼんやりしていた。資料を書かなくてはならないのに、何もする気が起きない。今夜は、香里も遅いのかまだ帰って来ない。

時計が10時になった。もう30分もこうしていたらしい。

梨沙は無機的にメールを更新した。牧人からのレスが入っていた。

『 宮本梨沙様

CSのこと、了承しました。

そして、あのことですが、それは根も葉もない噂です。

私の様な薄給な牧師を誰が相手にするでしょうか。

橋本 牧人 』

「嘘つき！」と梨沙は叫び、直ぐに又レスを入れた。

『 ……薄給とかそんなの関係ありません。多分、愛さんは先生の事好きなんです。

だって、愛さんは時々先生のマンションに出入りしているって言うってますよ』

メールを送った梨沙は我が身を殴りたくなった。なぜ正直になれないのだろうか？

梨沙は絶望的になり、ベッドに身を倒した。涙がじわじわとわいて来る。

— こんなわたしだから、ちっとも幸せになんかなれないんだ……。

涙で曇った壁の時計が、10時半を差した頃、ケータイが鳴った。梨沙は誰か確かめもせず、それを開けた。

「あ、もしもし、宮本ですが」

「宮本さん？」

梨沙はベッドから飛び起きた。その声は、牧人その人だったのだ。

牧人からの電話……。それは思いもかけない出来事だった。

あれだけ皮肉っぽい文面だったのに、牧人は一体何を伝えたいのだろうか？ 始めて一対一で電話に向き合った梨沙は、さっと緊張した。

「あ、はい。わたしですが……何か？」

「あ……」とやや堅い牧人の声は、少し間を開ける。「少し宮本さんに言っておきたい事があった。メールだと、誤解されやすいから」「わたしのさっきのレスのことですね。それだったら、わたしが悪いんです。何だか、嫌味なことを書いてしまって。でも、それって本当の事なんです」

「僕が愛さんと結婚するって言う噂？」

余りにも直接的な言い方だったので、梨沙は返答に窮した。あんなことを書いてしまった自分が本当に情けないと思う。が、もう遅いのだ。

「え、ええ。つまり誰かが……それは誰とは言えませんが……愛さんが……先生のマンションから出で来る所を……」

「ああ！ それ？」

拍子抜けする程の軽い返答が返ってきた。そして微かな笑い声も、ケータイの向こうから聞こえてくるのだ。

「あれはね」と牧人の声は、かなり緊張が解けた声音に変わった。

「完全な誤解です」

きっぱりと言う牧人の声が、梨沙の耳に響いた。

「誤解って……そうなんですか？」

「実はね、宮本さん。これは余り言いたくないんですが……田中夫人が神経症なのをご存知ですよ。というか、ウツなんですけどね、長年に渡って」

「え!？」

そう言えば、田中夫人はほとんど教会には出席していない。

「そうだったんですか」

「それでね、朝起きられない奥さんのただ一つの楽しみは、夕食の料理をすること。そして独り身の僕に、そのおすそ分けをして下さることなんです。優しい人なんですね。

けれど、奥さんは外出恐怖症で外に出ることは余り出来ないんで、それで愛さんに料理の残りを託しているというわけで。

愛さんはいつも迷惑そうに、それを持って来てくれます。ありがたいけれど、ちょっと悪いような気もするんですよ」

――料理の残りを持ってくるだけ？ それってほんと？

「あとう、先生はご自分で料理なんかしないんですか？」

「ハハハハ!」という笑い声がした。その声を聞くだけで、梨沙の胸はキュンとする。

「僕の部屋に來たらびっくりしますよ。台所には何も無いし、冷蔵庫は空っぽ。めんどくさい時には、朝抜きとか、夕食を抜くこともありますね。侘しいもんです」

梨沙は黙りこんだ。牧人の言う事を全面的に信じたわけではないが、その屈託の無い笑い声を聞いている内に、自分の妄想が少し恥ずかしくなってくる。

「でも、先生は……」

「え、何ですか？」

「いつまでも独身で居るわけでは無いでしょう？　いつかは、良いご伴侶を求めていらっしゃるのでは？」

「心配してくれてありがとう。でも、今時牧師と結婚してくれるような人は、余り居ませんよ。大抵の僕の友達は、学生結婚か大学時代に婚約してます。そうでない僕のような者には、相手など居ません」

「でも、愛さんは牧師のお嬢さんでしょ？　だったら、理解があるんじゃないでしょうか？　あ、素人考えですけど……」

「そうですね、そう考えるのが普通でしょう」と牧人の声は少しだけトーンダウンした。

「けれども実際は、愛さんはお父様の仕事を見て、この仕事之余り報われることが無いのを知っているんです。人間関係も複雑だし、そのくせ収入は少ないし。神に仕えるというのは格好はいいけれど、けれども最近やる人が居ないのはそのせいでしょう。」

この間ですが、愛さんは僕に料理を手渡しながら、玄関口でこう言いました。

『先生、この仕事が素晴らしいのはよく分かります。でもわたしは、母のようににはなりたくない。人の為になる仕事って、理想ではいいみたいですけど、でも内実を知っているわたしは本当は嫌なんです』ってね」

「そう……ですか……」

梨沙の言葉は尻すぼみに成って行く。

確かに聖職者の生活は厳しいし、心や身体を病むことも多い。他人の為に尽くす仕事と言うのは、実際大変で、並みの人間では出来ないのだ。

「宮本さんも、もうすぐ教師になるんですね。子供達の為にする仕事は、このご時勢だから、大変だろうな」

「でも、わたしは」と梨沙はきっぱりと言った。「わたしは、先生

のような仕事の人、嫌いじゃないです」

「そう？」

「この世の中では、絶対に必要な職業ですよ。わたしはそう思いますけど」

「アハハハ、宮本さんのような人は少ないんだよね。君は希少価値がある人なんだな」

「だって、薄給だからって、そう卑下しないで下さい。世の中には、例え薄給でも先生を好きな人は必ず居るんです。わたしのうちだって、どちらかというと言貧乏だし、母の手一つでわたし育ったんですけど、だからって、お金が全てとは思いません。」

お金よりも大事な物ってきつとあるんだと、わたし思っんです」

今度は、牧人の方が黙り込んだ。

「宮本さんのような人なら、牧師の奥さんになれそうですね。その考えこそ、聖書に語られていることなんですから。宮本さんが、まだ洗礼を受けないのは、少し残念ですが……。でも色々ご事情があるんでしょうし」

梨沙はこの言葉にギクリとした。

一体牧人は何を言おうとしているのだろうか？ 梨沙は少しうろたえてしまう。

それは、牧人の婉曲な告白とも言えるし、単なる願いでも在るとも言えるし、そして単に客観的な牧師の妻のあり方を述べているだけかも知れない。

どちらにせよ、梨沙にとっては、牧人の心の中を少し覗いたような気がして嬉しかった。

「先生、ありがとうございます。わざわざお電話して下さい。でも洗礼はまだ早いと、わたしは思いますけど」

牧人はケータイの向こうで、少し苦笑いしたような気がした。

「それじゃ」と牧人は言った。「おやすみなさい、宮本さん。今度出席してくれますよね。長々喋ってしまっ

― 梨沙と言って！ “宮本さん”なんて言わず、わたしのこと、“梨沙”と呼んでよ、先生！

けれども梨沙は、落ち着いた声で応えた。

「はい、先生もおやすみなさい」

ケータイは切れた。けれども梨沙の心には、何かが残っていた。それは萌えるような思い。どうしても忘れられない、激しい思い！

牧人は、確かに梨沙に、“田中牧師の娘の愛とは、何でもない”
 というようなことを述べた。けれども、それを全て鵜呑みにするほ
 ど、梨沙はもう子供ではない。

梨沙自身も、何も言えた義理は無いのだ。事実、一年半ほど前
 は、元カレの穰と会えば肌を合わせていたのだから……。

穰は梨沙にとって、“初めての”人。そして最初こそ違和感があ
 ったものの、穰とのセックスは、次第に梨沙の理性を狂わせていた。
 梨沙はそれ程有頂天になり、それにのめり込んでいたのだ。そして
 ……気が付けば、穰に愛想を付かされていた自分が居た。

穰は梨沙が考えていたような男ではなかった。と言うより、穰自
 身も変化して行ったのかも知れない。穰の今のカノジョは、東京の
 有名な女子大生だ。そして金持ち……。

最初はそれを恨んだ。けれども、梨沙自身も変化していたのに、
 自分が気付かなかっただけかもしれない。

ガツガツした、魅力の無い自分自身。自惚れが先行していた、あの
 時の気持ち。会えば、必ず自分を愛してくれるという思い込み。そ
 して挙句の果ての、醜い嫉妬。

それらが梨沙を蝕み、本来の梨沙自身の持つ“美しさ”を覆い隠
 していたのかも知れなかった。

それに気付いたのは、穰と別れてからかなり経ってからだったが。

愛は人を狂わせる。けれども、狂うほど好きにならなければ、そ
 れは愛では無いと言う気もする。冷静な愛は、それは同情とか憐憫

とか友愛と、紙一重だ。男と女の間の愛は、そうではないと梨沙は信じている。

なぜなら、それは“神の愛”とは別物だからだ。だからと言って、男女の愛が汚らわしいとは思わない。それは純粋な情熱から出てくる物だから。けれどもそれは、独占欲へと変化していつても不思議は無い愛の姿……。

だから梨沙は牧人の前では、控えめにしていた。そして自らの愛を隠していた。押さえられない愛情をひた隠し、そして押さえつけていた。けれどもそのほとばしりは、時に自分を苦しめる。

皮肉な事に、母の香里は結婚幹旋業をしており、そしてその金で女手一つで梨沙を育てた。大学まで行かせてくれた。

それなのに、香里もまた、他人の結婚の仲立ちはするが、自分自身の愛はもてあましているようだ。中年で掴もうとしていた愛が、相手の死によってもろくも去ってしまったとき、香里もその喪失に苦しんでいる……。母子揃って、愛に翻弄され、それを失い、それでもがいているのだ。



梨沙は牧人との約束通り、次の日曜日から再び教会に通い出した。にこやかな牧人の微笑が梨沙を出迎えたが、ただそれだけだった。

少なくとも、今は牧人の言葉を信じたいと思う。いや、信じないとやっていけない自分が居るのだ。

牧人は穰とは正反対の性格と容貌を持つし、商社に行った穰とも、職種は全く違う。また、年齢も牧人の方が五歳は上だ。

けれども、二人にはどこか共通しているものがあるのかもしれない。そうでなければ、梨沙はこうまでも牧人を愛するはずが無かつ

た。

牧人は確かに、見た目はハツとするイケメンだし、とてもガチガチの聖職者というような感じではない。

それは牧人がプロテスタントの牧師であり、カトリックの神父のような仰々しい服装では無いからでもある。遠目には、普通のサラリーマンのような気がしないでもないが、けれどもそうした職業とは少し違う“何か”を、やはり漂わせているのは確かだ。

『宮本さんが、まだ洗礼を受けないのは、少し残念ですが……』
と言った牧人の言葉。それはまるで棘の様に梨沙に突き刺さっていた。けれども梨沙は、愛の為に盲目になるのは、もうこりごりだった。

まして“洗礼”などと言う重大な決定を、軽々しく下す事はできなかった。例えば、牧人と結婚するには、それが絶対条件だとしても。

洗礼は、あくまでも信仰の問題なのだ。それは、愛とは違う。

まだ梨沙には、信仰とか洗礼とかがよく分からない。“神”という存在も、まだ全然確信が無い。牧人を愛してはいるが、自分の心を偽るのは嫌だ。

梨沙は複雑な気持ちのまま、教会に居た。



「ねえ、あの……」と梨沙は、CSの時、横に居たさやかに耳打ちした。

「なあに？」

「田中牧師の奥さんって、長い間精神を患っているって、それほんとか？」

「え？ ああ、うん」とさやかは曖昧に答える。

「ほんとに？」

「うん。でも、それって、公然の秘密、ていうか、あんまりここでは言えない事なの」

「でも精神を病む人は居るでしょ。現代人には、特に」

梨沙は、酒乱気味の香里を思い出しながら、呟いた。

「ま、こんな世界だものね」とさやかは、その辺で終わりにしたいらしい。

「あ、先生っ！」とCSの中学生の女の子が、梨沙に寄って来たので、さやかはすっと離れた。

「宮本先生ってば。もう居なくなっちゃったのかと心配したんですよ」

と馴れ馴れしくその女の子は、梨沙に擦り寄る。

「ああ、ごめんごめん。ちょっとね。でも、又これからも来るからさ」

「先生、卒業で忙しいんでしょ？」

「でもないけど……」と梨沙は話題を変えようと焦った。

「ところでさあ、この春のCSハイキングはどこ行こうか？ 何か希望ある？」

「どこでもいいです」とふてた様にその子は言ったが、直ぐ梨沙の耳元に口を寄せて来た。

「ねえ、秘密ですよ」

「秘密って？」

「あの、橋爪先生に……この間の秋のハイキングの時、わたし恋愛について先生に質問したんですけどお」

「恋愛！？」と梨沙も小声で言う。「なに？」

「先生ったら、こう言うんですよ。『童貞を捨てるのなんて、案外簡単なんだよ』って！」

「え!？」

「でしょ？ あの顔でね、ほんと、すまして言うんですよ。考えられないでしょ？」

梨沙は何も聞いていなかった。頭が真っ白になったのだ。再び、不可解な疑問が梨沙を痛めつける……。

梨沙はぼんやりと、田中牧師の説教を聞いていた。

いや、聞いていたというのは嘘だ。何も耳に入らない。横の席には、牧人が何事も無いかのように座っている。その端正な横顔が憎らしくも感じ、けれどもやはり、堪らなく引きつけられもする。

牧人を清純だと信じていた自分が惨めだった。牧人は28歳。梨沙より6歳も年上だ。あの容姿で、あの佇まいで、あのオーラで、28歳まで何も無かった……なんてあり得ない。

そんなこと、分かっていたはずなのに、と梨沙は我が身を呪った。そして自分の思い込みの激しさにも嫌になっていた。

その思い込みが、もとカレの穰との仲もこじらせた原因の一つであり、過去のコイバナで勉強したはずなのに、やっぱりそれは直っていないのか……。

たった言葉一つで、様々な疑心暗鬼に陥る自分が情けなかった。どうして牧人を信じられないのだろう。過去に何かあったとしても、それはそれでいいではないか。他人のことを言えた義理ではないのは、自分が一番良く知っているはず、なのに。

「梨沙のように、お父さんを離婚とか病気とかで早く別れてしまった娘って、自分よりもうんと年上の人を求めるんだって。だから……多田君との仲は、最初からうまくいきつこなかったんだよ」と明日香は言っていたっけ。

ああ、そう言えば明日香はまだキャンパスに戻って来てはいなか

った。もう直ぐ卒業で、消化授業とは言え、あと一ヶ月はあるはずなのに。なぜだろう？

どうして今まで明日香のことを真剣に考えなかったのだろうか？

― けど、メールもしたけどレスないし、電話してもいつも留守電だったから……。だからって、ちよっとおかしいじゃん。

もう一度、電話してみよう。何かあったのかな？ でも明日香は強い女だから、多分大丈夫だと思うけど。

けれども嫌な胸騒ぎは収まらなかった。親友を放っていた罪の意識が、チクチクと梨沙の心を刺し貫く。

礼拝を終える「アーメン」と唱える田中牧師の声が、会堂に響いていた。



礼拝後、『ユースの会』の面々が暫く半地下の食堂で集った。

梨沙達は今年度の新年会について、議論し合った。牧人はまだその場には居ない時だ。

「ね、ね、もし良かったら、自分のマンションでやらないかって、橋爪先生が言ってたよ」

と葉麗が無邪気に言ったので、その場に居た会の面々は少し驚いた。

「先生の、マンション？」とさやかが問う。

「うん、オープンハウスにするって。どうせ何も置いて無いからいいよって言ってた」

「どれくらいの広さ？」とヒュンジュンが言うのと、

「さあ、わたし入ったことなんか無いし」と葉麗は答える。「でも、2LDKぐらいはあるんじゃないかな。あそこ、夫婦用だから

ら。ですよね、愛さん？」

問いかけられた愛は、お茶を入れる手を止めたが、振り向きもしない。

「さあ、わたしも知らない。入口までは知ってるけど、中はどんなっているか」

「見取り図も知らないんですか？」とさやかが余計なことを言った。「そうよ」と愛はツンツンと言う。「知るはず無いじゃない」

――本当なの、愛さん？ それって、もしも嘘だったら、あなた女優になれるわよ。それほど、芝居が上手いって事。

梨沙は妙に意地悪く見つめていた。けれども愛の言い方には、嘘がチラリとも見られない。

「一応、あのマンションは若夫婦の為に借りていたの。てっきり橋爪先生は奥様がいらっしゃるか、それとも婚約者が居るのかな」と父が思ってたね。でも、それらしき人は居なかったってわけ」

「一人じゃちと広過ぎません？」とさやかは尚も突つくと、愛はヒソヒソ声で続けた。

「そうね。でもいづれ誰かと結婚したら、ちょうどいい広さになるんじゃないの？」

「あはは、そうですか。確かにそうかも知れませんね」

突如背後で牧人の朗らかな声が響き、こちらの面々は全員凍りついた。一体いつから牧人は『ユースの会』の会話を聞いていたのだろうか？

愛は俯くと、頬を少し赤らめた。

「あ、先生でしたか」と葉麗が何でもない素振りで甘ったるく言った。

「ちょうど噂をしていたところ、ですよ〜」

「噂をすれば……ですかね。それはそうと、僕の部屋は本当にガランドウなんで、皆来てくれていいよ。コップ一つ無いから、紙コップとか紙皿で」

牧人は端の椅子に腰掛けた。見つめていた梨沙の視線と目が合うと、微かな微笑を口元に浮かべたような気がする。

梨沙は電話での牧人との会話を思い出していた。

「じゃ、皆さん、来週の土曜日でいいですよ〜」

と愛が音頭を取った。もう一人の太ったニートの若者だけが首を振ったが、この若者には誰も注意を払いもしない。それ程彼はここでは、おとなしくて現実味が無いのだ。まるで透明なクラゲのように。

「芦谷君以外はいいのね」と愛。

梨沙は思い切って、口を出した。

「あの〜、吉田リカコさんは……？ お誘いしましょうか？」

「あのうって、この会のメンバーじゃないじゃない！」

と愛が気色ばむと、

「いいじゃないですか。僕の部屋は誰でもウェルカムですよ」

と牧人が答えた。愛は不愉快そうに黙り込む。

「あのうだって、恋人を失って今は一人だし」と梨沙は余計なことまで言った。

「あのう」と突然今まで何も言わなかった芦谷が口を差し挟んだ。

「なに？」と愛は醒めた目付きで、このニートの若者を見つめる。

「吉田リカコさんには、恋人なんか居ませんでした。あの人は……」

あの人は……」

「なによお、じれったい！」

「あの人は、本当は人妻なんです！」

えええ〜っという驚愕の声なき声が、小波のように広がって

行った。

「人妻！？　あなた、何でそれ知ってるの？」

「ぼ、僕のアパートの大家さんの奥さんだからです」と芦屋はどもりながら答えた。

「独身なんて、嘘ですよ。子供も二人居るしね。あ、ついでに言えば、あの人虚言癖があって、近所でも有名なんっす」

『ユースの会』全員が黙り込んだ。梨沙がチラッと盗み見ると、牧人の顔がめずらしく渋面になっていた。

そうか……牧人は知っていたのだ、真実を！

――一人、競争相手が減ったわ……。

梨沙は奇妙なほど冷静に思考していた。そして又、そういう自分に嫌悪もしていた。

「18」(後書き)

仕事上、年末年始は多忙ゆえ、更新が滞りがちになりますので、ご容赦ください。

一見ぼんやりしているような芦屋以外は、全員騙されていた。いや、最もリカコを信用していたのは、他ならぬ梨沙だったのかも知れない。

あの時、隣に座って、涙ながらに亡くなった恋人の話をしていたリカコ……。それが全て偽りの涙だったとは！ 梨沙は恥じて黙り込んだ。

「ふん！ 分かったわ。哀れな女の振りして、同情を買おうとしていたのね。全く、なんていう女かしら！」

愛が憤懣やるかたない顔付きで、吐き捨てるように言った。

「先生は知っていたんですか？」

と今度はさやかが牧人に詰め寄る。けれども牧人は奇妙な笑みを浮かべたまま、

「まあね」とだけ曖昧に答えただけだった。

「牧師は、信者の秘密は誰にも言えないのは知ってるでしょ？」と愛はさやかに手厳しく言った。「ですよね、先生？」

けれども、牧人は珍しく腕組みしたまま黙り込んでいる。

リカコはある種の病気なのだろう。けれども「洗礼を受けたい」と言われれば、牧人には断ることは出来ないのだ。

多分牧人は主任担任牧師である田中牧師と、リカコの洗礼についてそれが本心かどうか色々討論していたに違いない。

けれども結果的には、リカコの要望を受け入れざるを得なかったのだろうか？ 梨沙にはその偽りの信仰が分からなかった。

信仰とは一体何だろう？ 洗礼とは……？

「まあ、神様の目から見たら、人間は皆何らかの罪を負っているわけだから」

牧人がポツンと言った。

「だから、吉田さんのことは黙って見ていきましょう。それだけでいいんじゃないのかな」

「だけどあたし嫌ですよ。あの人をもう絶対に『ユースの会』には呼びませんからねっ」

と言葉険しく言ったのは、葉麗だった。

「誰だって罪を負ってはいるけれど、でも吉田さんはヒドイ！ わたし達を欺いていたんだもの！」

「ま、ビョーキなんっすからね、あの人とは」

芦屋がポツンと呟いた。

「もうっ！ あの人のことはもうどうでもいいじゃないですか！ どうしますか？ 今度の土曜では」と愛がじれったそうに言い始めたので、みんなはやっと目が覚めたように新年会について話し始めた。



帰り道、梨沙はヒュンジュンと一緒に駅に向った。

「ヒュンちゃん、どう思う？ リカコさんのこと」と梨沙はマフラーを首にグルグル巻きながら尋ねた。

「みごとに騙されましたね。でもああいう人は、何とかって言う病気なんですよ。韓国にも居ますから」

「そうなの？」

「どの国も同じです」とヒュンジュンは静かに答えた。「人間は弱いんです。嘘だって平気で付くのが、弱い人間ですから」

「そうね、人間って嘘つきだもの」

「ですよね」とヒュンジュンは、日本人とほとんど変わらない綺麗な日本語で答える。

「先生だって、ああいう人に騙されたんですから」

「先生って？」と梨沙は小首を傾けながら聞いた。「まさか……橋爪先生が!？」

「あつ」とヒュンジュンは小さく叫んだ。「言っちゃったな」けれどももっと驚いたのは、梨沙の方だった。

「何よお。橋爪先生、誰かに騙されてたの？　どうということ……なの……？」

梨沙の心臓がドキドキしてくる。

ヒュンジュンは困ったように、頭を掻いた。

「困ったな。あの時、つまり僕が先生のマンションに数日後厄介になっていたときでした。先生と少し飲んでいたら、先生、ポロリと言い始めて」

「何をなの？」

「大学時代の苦い思い出、ですかね」

「カノジョとの？」

「そうです。先生、カノジョが居たんです、一つ後輩の」

「で、何なのよお、じらさないでよ」

「言っただいのかなあ」

「ここまで出掛かっているじゃない!？」

「先生、騙されたんですよ、その後輩に」

「騙された!？」

「お付き合いはしていたけど、でも一線は越えていなかったのに…

：その後輩のカノジョは、クラス全員に先生とデキテいたと言いつ
らしたらしいです。それも、難病に掛かっている母親の為に、信仰
を持ったと言っていたのに、それも嘘だったってね。お母さんはピ
ンピンしていたんだって」

「は!？」

梨沙は目を剥いて立ち止まった。

「別れたそうですよ、結局。凄い修羅場だったって。

以来先生は、女性の語る悲しい身の上話や告白を絶対に信じなくな
りました。信じられるのは神様だけだって言ってるね!」

ヒュンジュンは単純に笑ったが、梨沙の心は凍り付いていた。木
枯らしが吹きすさぶ暗い天気だったが、梨沙の心はもっと暗くなっ
ていたのだ。

― 誰も信じない? どんな女性の言葉をも……信じない……?

梨沙の考えも知らず、ヒュンジュンはゆっくりと言った。

「本当に深く愛していたらしいですよ。そして信じていたのにつて」

ヒュンジュンと別れたあとの梨沙は、電車で揺られながらも気持ちどこかに飛んでいた。思い浮かべるのは、牧人の過去の一事件。けれども、ただそれだけだろうか、という疑惑がどんどん膨らんで行くのだ。

牧人は酒を飲む方だといわれているし、確かに幾らか酔ってはいただろう。相手が日本人ではないと知っているから、気安く喋ったのかも知れない。それも年頃もやや似ているし、ヒュンジュンは聞き上手だからだ。

けれどもヒュンジュンの日本語のヒアリングは抜群だが、それでもやはり細かいニュアンスなどは分からないに違いない。ヒュンジュンの語った事がどこまで真実なのか、あんまり安請け合いないほうがいいのかもしれないが、けれども梨沙はやはり棘に刺されたように痛む心を抱いていた。

「先生の過去の謎の一つが少し見えてきた。だからと言って、『童貞を捨てるのなんて、案外簡単さ』とCSの生徒に述べた意味が分からない。

ひょっとしたら、あのあと何かが起こったのかもしれないし、別の人のことなのかも？ 修羅場って言うていたけど、どういう風だったのかしら？ 今の時代、別にデキてたっていいじゃない！

それとも先生は……そういう嘘を平気で付くカノジョが嫌になったのだろうか……？

梨沙ももう一年以上教会に居るから、幾らか中の仕組みは分かっ

てきていた。

神学生は卒業後すぐ牧師になれるわけではなく、“伝道師”に三年ほどならなければならない。まあ、見習いのようなもので、医者でいうインターンのような制度だ。

その後は、テストを受け按手札というのを授けられて初めて、正式な牧師になれる。それまではかなり薄給だし、いわゆる洗礼や聖餐などの秘蹟を執り行う資格は無いのだ。けれどもどうやらその制度も、日本だけのようだ。

この制度のせいで、牧師になる若者は年々減るばかりなのだが……。

だから、たった一年ほど神学校に通ったぐらいで牧師と名乗っているのは、それはニセモノ。単なる“自称牧師”であり、時々そういうかがわしい教会に限って、献金を莫大に請求したり、へんてこなマリア像などを信者に高額で買わせたりする。

そういう“キリスト教”は実は似非（＝似て非なる＝エセ）なのだが、キリスト教になじみの薄い日本人は、いとも簡単に騙されてしまう人が多い。

もちろん牧人は大学の神学部大学院まで出て、三年間伝道師としての修行を受けた後の、“正式”な牧師なのだが、今の教会に派遣されたのは梨沙が来る僅か一年前だった。

だから、まだ二年目に過ぎない。

けれども、むしろ主任担任の田中牧師より、牧人の方が人気があったのは致し方ないだろう。

若く、その上イケメンで、将来性もある。時には田中牧師の代わりには説教を担当する事もあるが、張りのある艶やかな声とどこか艶かしい仕草で、うっとりとして聞いている信者が多い。

そういう牧人が、あの歳まで女性と何もなかったはずが無いし、

ホモセクシャルであるとも聞かない。

― ま、いいか、どうでも。考えても一緒じゃん。だからと言って、先生に詰め寄れるはずも無いし、例え詰め寄ったとしても、きっと100%先生は何も言わないさ。当然と言えば当然だけど。

だってプライバシーは守られるべきだし、誰だって突けば何か出てくるから。わたしだって、他人のこと言えた義理じゃないじゃん。あゝあ、わたしってバカ。ちょっとしたこと、気持ち揺れる……。

．．．◇．．．◆．．．◇．．．

梨沙はポケットに入れていたケータイを取り出した。

「あ、メール」

急いで見ると、梨沙は微笑んだ。明日香からだったのだ。今まで何度もメールしたり電話したりしても梨のつぶてだったのに、やっ

と！
『ごめん、梨沙。メールありがとう。でもなかなかで』

梨沙は直ぐにレスを打つ。

『気にしないで。それより、大学にはいつ戻るの？』

それから梨沙はぼんやりとケータイの蓋を閉じた。明日香からの返事が直ぐ来るとは思えなかったのだ。

けれども、次の駅で降りるときに見てみると、返事が来ていた。

『それが、戻れない』

『なんでよ？』

梨沙はなぜか胸騒ぎを覚えた。明日香はこんなに短いメールを打つ人間じゃない。その上、内容は文章に反比例して深刻だ。

― 戻れないって。なぜなの？ 明日香、どうしたのかしら。

結局メールの返事はそれ以上はなかった。

心配しながらも、梨沙は今、自分のことで精一杯だったのだ。

誰かに相談したい！ けれどもいつも明るく相談に乗ってくれた明日香は、とても他人どころではないようだ。このままだと、授業にも出ず試験も受けないつもりだろうか？

失恋の痛手は案外深かったのかも知れない、そして教師になりたくともなれなかったという事実は、明日香を打ちのめしていたのかも知れない……。

― ごめんと言うのはわたしの方だよ、明日香。又何度もメールするから、きっと戻ってきてよね。いつもの明るい笑顔のままで。

新年会の前の日の金曜の晩遅く、母の香里が酔っ払って帰宅した。「またか、ちっ」と苦々しく感じたものの、梨沙は苦しそうな香里を介抱した。

少し落ち着いた香里に水をやりながら、布団を敷いていると、

「明日、どこか行くのお？」と香里がからんできた。狭い玄関に置いてある梨沙の紙袋に目をとめたらしい。

「うん、ちよつと教会へ」

「へえ？ また？ えらく熱心じゃない」

「別に。退屈だから、新年会に行く」

「本当？」と香里は顔を近づけてくる。そして何かを嗅ぐように、鼻をクンクンさせた。

「なんか、臭う。あ、そーか、好きな人が居るんだあ」

「そんなん、居ないよ」

「相変わらず、梨沙って嘘付くのが下手だねえ。お見通しよ。それとも、信心深くなったの？ って、あり得ないけどさ」

「信仰は……少しはあるかな」と梨沙は嘘を付いた。「好きな人なんて、居ないし、それに教会のような場所に居るはず無いじゃん」

「そっか。まあ、貧乏人とだけは結婚しないでね。稼ぎの無い奴は駄目よ、駄目っ」

「別れたお父さん……稼ぎはあったんじゃない？」

余計なことを聞いたらしい。香里は突然、ガラスのコップをドンとテーブルに置いた。

「あつたからって何なのよお。ただ、うまくいかなかったってことだけじゃない。それに、女が出来たんだし。多分わたしよりいい女がね」

「だからあ……」

「えらそうな口きかないで！　今はね、お金がなきゃ駄目な世の中なの。お金が無いと、医者にも行けない世の中……。ったく間違っていると思うけどさ、そんなもんなの、現実って。だから、うちの会社に来る女の子達は、皆、年収幾らってことばかり気にしてるけど、それが本当なのかも知れないって最近思う」

「もういいよ、寝なよ」

「あんたさあ、教会の変な男に気があるんじゃないの？　信心が無いのなら、それっきゃないじゃん」

「誰も居ないって！」

「キリストさんがあんたを救うの？　妙な宗教に嵌らなきゃいいけどさ」

「ちゃんとした所だから……」

「宗教法人なんて、税金タダじゃない！」

「なら言うけど」と梨沙は苛々しながら言い返す。「仏教だって、最近ぼったくりじゃない」

「ぼったくり！？　なんてこと言うのよっ」

「あの……仏壇だって、凄いお金出して買ったんだし、戒名にもお金要ったし、何から何までお金だけじゃん、最近の仏教は！」

「豊岡さんを侮辱すんの！？」

「豊岡さんのことじゃないよ。でもお母さんが、豊岡さんのお葬式に、凄いお金を出したの知ってる。そこまでするのかしらって……」
「バカっ！」

そう怒鳴ると、香里は猛烈な勢いで梨沙を打とうとした。けれど

も酔っているせいで手がすべり、香里は台所に無様に転がってしま
う。

「ほらほらほら。もういい加減にしてよお」

梨沙は苦々しい思いをぐっと飲み込みながら、香里の肩を抱こう
とした。香里は突っ伏したまま泣いていた。

「本当に、もうどっちが子供なんだか……」

「梨沙！ キリストさんがあんたを幸せにしてくれるの！？」
どっちなのよお」

「もともと、ご利益じゃないし」

そう答えながら、梨沙も又、信仰とは何か、自分の抱いているも
のがニセモノなのかどうか計りかねていた。

どっちもどっち……そんな思いが胸を塞ぐが、香里が亡き豊岡を
忘れられないように、梨沙も又牧人が忘れられない。

「一つだけ言うけど、牧師は税金払わなきゃ駄目なんだ……あ、も
う寝たか……」

泣きながら香里は、そのままいぎたなく寝てしまったようだ。

「泣きたいのはわたしも、なのに」

梨沙は呟いていた。けれども涙は乾いていた……。



次の日、香里がまだ寝ているので起こさずに梨沙はそっと家を出
た。時計は九時半だ。十時には牧人のマンションに着くだろう。ヒ
ュンジュンと駅で待ち合わせている。

牧人のマンションに行くのは初めてだ。愛はしょっちゅう訪ねて
いるらしいが、梨沙はまだだった。なぜか期待しているようでもあ
り、不安な感じもした。みんなが集まるといっても、少なくとも牧
人のプライベートの一端を知るわけだから。

ヒュンジュンはひよろりと背が高いし、かなりの好感度の青年だ。イケメンではないが、ヒュンジュンと居ると、梨沙はなぜか素直になれる。もちろん何のときめきも感じないのだが、だからこそ何でも話せるのかも知れない。

梨沙は昨晚の事を、少しだけヒュンジュンに語った。

「ね、ヒュンちゃん。わたしも母も、どっちも大して信心なんて無いらだろうね。ヒュンちゃんは、信仰って必要だと思う？ あ、当たり前か、こんなこと聞いて」

「もしも神が居なかったら、この世はもっと混乱すると思います」とヒュンジュンは真面目に率直に答えた。

「善とか悪とか、人間じゃ決められないでしょ？」

「そっかー、そうよね」

「人間達の上から、何かが支配していると思いませんか？ ところで」

とヒュンジュンは、改まって言う。「僕達、カップルに見えるかも知れませんかね」

「は！？」と梨沙は目を丸くして、ヒュンジュンを見上げた。ヒュンジュンは、陽だまりのように暖かく微笑んだ。

〓22〓 (前書き)

皆様、明けましておめでとうございます。本年も宜しくお願い致します。
では・・・

〜22〜

〜22〜

牧人のマンションに着くまで、梨沙は黙り込んでいた。ヒュンジュンには悪いが、梨沙にとってはヒュンジュンは、気心の知れた友人でしかないのだ。

はつきりしない牧人に比べ、ヒュンジュンは積極的、直接的だ。とてもいい人だとは思うが、それとこれとは違う。

梨沙が黙り込んだので、ヒュンジュンも口を閉ざした。

そうこうしている内に、牧人のマンションが見えてきた。牧人はそのこじんまりした三階建てマンションの一階に住んでいるという。そこで今日はスキヤキ鍋を囲むというのだ。

二人の気まずさを救ったのは、ちょうど向こう側から来たさやかだった。さやかは遠くから二人を認めると、手を振って見せた。片手には重いスーパールの袋を提げている。既に若奥様の風格すら漂っている。

梨沙には少し羨ましかった。けれども今は助かった気がする。

「あ、来てたの？　ちょうど良かったわね〜」

と近寄ってさやかが言いかける。「な〜んか、いいムードよ、お二人さんっ！」

「何言ってるのよ」と梨沙はとぼけた。というか、そういう風に想像されるほど、仲が良く見えるのだろうか？　ひょっとしたら、牧人も勘違いするほどに？

「あ、ヒュンちゃん。いいお肉買ってきたから、韓国風のチゲ鍋風スキヤキにしてよね〜」

さやかは愛嬌がある、と梨沙は思う。自分には出来ない仕草だ。けれどもそういう女らしい、というよりもお茶目な仕草が自分にも必要なかも知れないと感じるのだ。

「ああ、いいですよ。うんと辛くしますけどね」

ヒュンジュンは何事も引きずらない性格なのか、明るく答えると、さやかの持つスーパールのレジ袋をさり気なくとりあげた。

三人はそのマンションに入った。最初に小さなロビーがあり、それから放射状に四部屋ずつ並んでいる。そして、真ん中には螺旋階段があった。

「なんか、モダン」と梨沙は呟いた。「いかにも、って感じ」

梨沙はなぜかドキドキした。

「さ、入ろうか？」

そう言うときやかは、102号室のドアのチャイムを押した。ほどなくして、ドアが開き、なんと葉麗の姿が現れた。葉麗はいつもよりお洒落していた。

「あ……肉買ってきた？」

「うん、いいのがあった。でも高かったよ。みんな覚悟してね」

「美味しけりゃなんでもいいのよ」と葉麗は笑う。その屈託無い笑いが梨沙には眩しい。

「あれ？」と中を覗いた梨沙が叫んだ。「あの人誰？ 『ユースの会』の人じゃないよね」

梨沙はすぐのリビングのソファに坐る、一人の初老の男性を見つけたのだ。その真向かいに、牧人がニコニコしながら坐っていた。

「ああ、あの人？ あの人牧師なんだって。先生の同級生」

「同級生！？」と今度はさやかが大声で叫ぶ。「うそー！」

「あ、来ましたね」と牧人が立ち上がりながらこちらに向かって来

た。梨沙は思わず下を向く。

「よく来てくれました。あ、宮本さんにパク君、荒川さん……」

こちらの三人が入ると、台所では既に愛が来ていて、甲斐甲斐しく立ち働いていた。そしてチラッと振り返ると、黙ったまま忙しく包丁を動かしている。

ソファの初老の男性は、心なしもじもじしていた。

「あ、この方ね、僕と同級生で六角章さん。関西の教会で牧師をしているんです。たまたま会議でこちらに来ていて、明日までここに居るんですよ。いいでしょ、一緒に会食して」

牧人の紹介で、その六角章牧師は律儀に立ち上がって、こちらの新参者に礼をした。

「わたくし、この橋爪君には大層お世話になりました……」

「やだなく、何言ってるんですかあ、こちらの方が色々お世話になってしまったのに」

牧人は照れたように笑った。その笑いはごく自然で好ましい笑いであり、梨沙はこの六角牧師よりも牧人の笑みばかり見つめていたようだ。

「この人はね、昔は銀行マンだったんですよ。それを定年退職して、いよいよ自分の生きたかった道へと進んだんですね」

「いやいや」と六角牧師は謙遜ばかりしている。

「でも……橋爪先生の同期とは思えませんね。もっとお若いのかと……」

とさやかが怪訝そうに言った。

「ははは、この世界はね、こういう世界なんです」と六角牧師は頭を掻く。

「つまりね、若い人ばかりでは無いってことかな？」と牧人。

「はあ？」とこちらの三人。

「牧師になる若者は、どんどん減っているんですな。ですからわたくしのような、年寄りが頑張らざるを得ないわけです」

「年寄り、じゃないでしょう」と牧人はいつになく朗らかにケラケラ笑いながら、六角牧師の肩をポンと叩いた。「まだまだじゃないですかあ」

「ま、少なくとも、橋爪君よりかは年寄りってことですな」と六角牧師はニヤリと品よく微笑んだ。

梨沙は奇妙な気分に乗われた。

“この世界”とは、こんなものだったのだろうか？　それほど若者は貴重だってこと？　そういう人を愛してしまった、というよりも恋焦がれてしまった自分は、ちよつと変なのだろうか？

けれども梨沙はそれ以上は考えずに、すぐに愛の手助けをし始めた。もう崩れかかったガーリーヘアを、無雑作に後ろでバレッタで留めて。

ふと振り返ると、牧人の視線が一瞬自分に注がれていた……。

く23く

く23く

『ユースの会』の新年会は、場違いな歳の六角牧師を含めて、今日は来ない芦屋を除き、賑やかに進んだ。

さすが単なる初老のオジサンにしか見えない六角牧師は、若い人々との談話が上手だ。というよりも、若者に囲まれて、嬉しそうだった。

「わたくしの教会はですね、ご他聞に寄らず若い信者がほとんど居らず、40歳代が“若者”と呼ばれている始末ですよ。ですから、こんな場はなかなか無いんですな」

「へー、そうですか。でも、これでも多い方なんですか？」
ときやかが臆せずどんどん話しかける。

「ほんと、橋爪君は羨ましいですよ。こんな若々しい信者達が教会にいるなんて」

「でも……わたしはまだ信者じゃないんですけど」
と躊躇いがちに口を出した梨沙に向って、

「ああ、求道者ですか、あなたは？　でも誰も居ないよりはましですよ」

と六角牧師は穏やかに言い含めた。

「先行きがどうなるのかな、ね、橋爪君。この先若い信者さんが減って行くと、その内、日本のクリスチャンは絶滅してしまうんじゃないのかな？」　朱鷺のように」

「ミッシヨン系っていつても、もう形骸化していますもんね」
と葉麗も言い始めた。

「ほう？」

「わたし、ミッション系の女子大生なんですけど……周りにキリスト教に興味ある人なんて、ほとんど居ませんよ。ここだけです」

「じゃ、ここは特別区なのかな？」

と六角牧師は柔和に微笑んだ。

「てか、橋爪先生のおかげじゃないの？」と愛が皮肉っぽく言う。

「この若さで、牧師になるなんてよっぽど酔狂なんでしょうね、先生は」

牧人は少し離れた所に坐って、ジュースを飲んでいたが相変わらず黙しているばかり。

「ね、ね、橋爪先生って、もててたんでしよう、大学では」

さやかが身を乗り出して、聞いてきた。

「教えて下さいよお、六角先生っ。橋爪先生ったら、なんにも言わないんだもの」

その時、ヒュンジュンは俯いてクスリと笑っていた。

「もてない訳やないですよ、そりゃあね！」と六角牧師は嬉しそうに言う。

「一人居たかな、後輩に」

「先生っ！」と突然牧人が声を上げた。「もういいじゃないですか、それは」

「ん？ まあね……だけでももてたのは本当だから」

「じゃあ、何で結婚しなかったんですか？」

梨沙は嘴を入れた。

「そんなにもててたんなら」

「まあ……色々あったんでね……」

六角牧師は言葉を濁す。

「色々って!？」と何も知らない葉麗がじれったそうに聞いた。

「旨くいかなかったってことですかね」

「そこまで!　そこまで!」と牧人が制した。

「なくんだ、いいとこだったのに」と葉麗。

「他にもありましたよ。それは大学院での事で」

と六角牧師は悪戯っぽく言った。少しのビールで、酔ってきたようだ。

「へえ?　先生って隅に置けないじゃん」と葉麗は楽しそうだ。

「カタブツっぽいのに」

「ねえ、先生!　そのハナシはもういいでしょ」

牧人が慌てて制したが、六角牧師は若者達に囲まれて調子付いたのか、言わなくてもいいことまで喋り始めた。

「我々が大学院の頃、神学生として毎日曜日にはどこかの教会で奉仕しなければならんです。そして橋爪君は、ある教会に出向きました。」

そこに綺麗なお嬢さんが居てね……。ま、信者ではなかったけれど、お二人は忽ち恋に落ちて……」

「先生っ!!」

牧人は困惑して遮ったが、年上の六角牧師は益々図に乗って言い続ける。

「だがね、うまくいかんものでね、今回も。」

そのお嬢さんの親御さんが、牧師という職業を嫌いでね。娘が苦勞するとも思ったのかな?　それとも何らかの偏見があったのでしよう。結局、別れてしまった。というか、別れさせられちゃったというのかな?」

梨沙がふと牧人を見やると、牧人は「あゝあ」という顔をして、頭を抱えていた。

「今時、キリスト教に対する、偏見が？ やだ、昔じゃあるまいし」

ときやかが、のけ反りながら苦笑した。

「それがあるのよ」と愛はピシヤリと言う。「日本ではまだまだ」

「ミッシヨンの学校に行っても、そうですよ」と葉麗も続けた。

「結婚式なら良いんです。でも、その他のことは、色々あるでしょう？ 先祖代々のお墓がどうか。神社の神様はどうか。学問としてはいいけど、実際にクリスチャンが身内に居たら嫌だとか。神様を信じるのは、弱いからとか、馬鹿だからとか」

「そうそう。それは言ってるね」と六角牧師は溜息を付いた。

「わたくしも、家内を説き伏せるのに、物凄く苦勞しましたからね。家内はクリスチャンじゃなかったし、50過ぎて今更苦勞するの！？ って散々言われました。最後には、離婚するとまで。

だけど、まあ何とか収まって、今わたくしは幸福ですが、橋爪君はこれから大変だろうなあ。せっかく、我がクラス屈指のイケメンなのに」

牧人はただ苦笑しているだけだった。

梨沙は又少しだけ牧人の過去を知った。そして知れば知るほど、牧人の今までの道のりが平坦では無いことも分かった。

だからと言って、梨沙はどうしていいのか分からないのだ。愛する事と、結婚する事とは違うのかも知れない、と梨沙は考えて始めていた。今までの女性達がそうだったように……。

けれども自分は、後悔はしたくない。まだまだどの道がいいのか、梨沙には判断できなかった。

ただ一つ、牧人の孤独を今更ながらひしひしと感じただけは確かなのだ。孤独な魂には、もう一つの孤独な魂が寄り添ってこそ、真に分かり合えるような気がする……。そう梨沙は思った。

コチジャンとスキヤキの微妙だが美味しそうな臭いがしてきた。みんな、今度は食べることに精一杯になって行く。若いなあ」と相変わらず六角牧師は、溜息をつきつつも、自分自身も結構美味そうに食べていた。

「あ……ジュース無くなったね。それに、食後のお菓子足りなくいと葉麗が甘ったるく言う」と

「それじゃあ、わたしが買ってきます」と六角牧師が立ち上がった。

「橋爪先生にご厄介にばかりさせられませんからね」

「いや……」

「それぐらいのお金は持ち合わせていますよ。それに今夜は橋爪君の所に泊まらせて頂けるんだから」

六角牧師が玄関を出ようとすると、梨沙はさっと近寄った。

「あ、わたし近所の安いスーパー知ってます。わたしも一緒に出かけていいですよ、橋爪先生？」

牧人は梨沙の方をチラッと見ると、うんと首を縦に振った。

「済まないわねえ、宮本さん」とさやかはそう言いつつも、肉に喰らい付いている。

「いいんです、わたし、まだ求道者だから。じゃ、行きましょ、先生」



外を出ると、日が翳り始めていた。二人の長い影が、寂れた道路に並ぶ中、若い梨沙と初老の男との奇妙な二人連れは、スーパ―に急ぐ。

「君は大学生？」と六角牧師は、にこやかに尋ねた。

「ええ。でももう直ぐ卒業です。教師になるんです」

「さっき、求道者とか言っていたね」

「ええ……だめですか？」

「だめじゃないですよ。誰だって、慌てて洗礼を受けるべきじゃないと、わたくしはそう思っていますからね」

暫くして梨沙はポツンと言った。

「わたしは、クリスチャンに値いしないのかも知れません……」

「なんでそう言う事を言うの？」

「何だか……わたし、利己的なんですよ。それに、洗礼すること何かを得たいと……つまり、ご利益なんですよ、これって」

「洗礼した前と後とでは、確かに少なくとも表面的には何も変わりませんよ」

六角牧師の言葉は柔らかいが、どこか辛辣だった。

「わたしだって、こうして牧師をしていても、まだまだ迷いがある。死んだら本当に天国に行くのか？ それとも終末には、必ず復活できるのか、とかね、色々です」

「最近、母の親しい人が、と言うか、愛していた人が亡くなったんです。でも、それ以来母は何も信じなくなってしまうて。」

それなのに、毎日仏壇の前でぼんやりしている。二度とこの世では会えないのに、でも忘れられないんです。毎日お酒を飲んでばかりで」

梨沙はつい母への不満や愚痴をこぼしていた。

「それはね、宮本さん、て言いましたね、それは普通の人間のある

べき姿なんですよ。悲しみは尽きません。愛していたからこそ、残された人は苦しむ。それは“普通の姿”なんです。決してお母さんが変なんじゃない。それは人間の当たり前の姿です。

一見醜いようだけでも、でもそれを許してやりなさいね」

「わたし、許せません」と梨沙はきっぱり言った。「わたしだって、母を見ていると苦しいんです。それなのに、母はわたしのこと全然分かって居ないし、自分のことばかり！ 他者の苦しみは理解しようとしてもしないですよ」

「あなたのお気持ちはよく分かります」と六角牧師はそう静かに言った。

「肉親の辛い気持ちを察するのは、これは結構しんどいんです。

でもね、お母さんを許せないのは、自分が神様に“赦されていない”と言うことなんです。神様に赦されていると言う確信や……つまりそれが“信仰”というものなんです。その確信がありさえすれば、自ずとお母さんを許すことが出来るようになる。

人間は脆いんだ、と知れば、ね」

「人間は脆い？」

「そう脆いんです。土の器に過ぎませんから」

「そうですね。強がっていても、結局は弱いものなのかも」

「分かっていらっしゃるじゃないですか！」

六角牧師は明るく言う、
「あ、あのスーパーですか」と尋ねた。
小綺麗ながらも何でも揃っていきそうなスーパーが見え、夕餉の支度に取り掛かる前の主婦達が、徒歩や自転車で大勢来ている。

「ああ見えても、橋爪君も脆かった……あの時は……」

思いがけなく牧人の名前を聞いて、梨沙はハツとなった。

「あの時って？」

「二回の失恋の時、ですかね」

「ああ……さつき……」

スーパ－の籠を持とうとした梨沙は、突然周囲の雑踏も聞こえなくなってしまうた。

「でも、今は立ち直って、ちゃんとしている。大したものですよ。わたしなら、一度の失恋で、もう駄目になっているかも知れませんが」「教えて……下さいませんか？」

六角牧師が入口近くでふと立ち止まったので、後ろから来ていた主婦は迷惑そうにジロリとこの初老の冴えない男を睨んだ。

「知りたいんですか？」

「あ？ ええ」

「あなたは……好きなんですわ、彼を」
「……!？」

梨沙の心臓は飛び出しそうになった。そうして、その凍った心臓は、分厚いダウンコートから遙か彼方へと飛んで行ってしまいそうだ。

「あのう……それは……」

俯いた梨沙に、六角牧師は暖かな眼差しを注ぐ。

「やっぱり、ね。ま、わたしは結構ドン臭く見えて、勘が強い方です」

「でも、先生は……」

「愛しておられるのなら、もう橋爪君を哀しませないで下さいね。今までの人達のように」

「それじゃ、教えて下さい。どうだったのか」

梨沙は顔を上げて、しっかりと尋ねた。

「分かりました。帰り道で言いましょう。ま、内緒ですよ、これは」「はい」

梨沙の心臓はドキドキと波打っていた。

25

スーパーのレジ袋を、各々一つずつ持って、梨沙と六角牧師は、わざとゆっくりと一月末の厳しい寒さの大気の中を歩いた。

「あのね、先にこれを言っておこう。牧師の世界は結構狭いってことを。そして婚期を逸すると、なかなか相手が現れない」

「へー、そうなんですか……」と梨沙は意外に感じながらも、そう相槌を打った。

「そうなんですよ。わたくしの様に、会社員を勤め上げてもう妻子が居るものはいいい。けれども若い牧師の卵達は、大抵は神学校時代に伴侶を見つけるものなのだ。つまり……そとに出ると、もうキリスト教徒の若い女性が余り居ないからだね」

「じゃあ、牧師の妻は必ずクリスチャンでなくてはならないんですか？」

「いや、100%そうとは言切れないが、やはり信徒達との間に立ってあれこれしなくてはならないだろうしね、理解も必要だから。わたくしの知っているある牧師は、結局信徒ではない奥さんとは離婚してしまったね。うまく行こうと努力はしたんだろうが……」

「そう……ですか……」

梨沙は、やはりそうかと暗澹たる気持ちになった。

「でも、橋爪先生なら」

「うん、そうだよ。あの通り容姿端麗で、才気活発な好青年だから、女性が放っておくわけが無い。ほどなくして、一年後輩の女の子と付き合い始めた。彼女も神学部だったから、好都合だね」

「でも、駄目になったんでしょ？」

「そうだね」

「なぜですか？」

六角牧師はしばらく躊躇ったような足取りになったが、意を決したように語り始めた。

「彼女には、盗癖があったんだ」

「盗癖！？」

「試験の前には、決まって誰かのノートを盗んだ。両親が離婚して、かなり辛い日々を送り、ミッシェン系の女子高に入ったときからだったそう。ストレスがそうさせたのかも知れない。

そしてその度に、神に祈り自分の罪を悔い改め、洗礼を受けた。けれども、結局盗癖は直らなかった」

「はー」と梨沙は深い溜息をつく。

「そして彼女は、橋爪君に近寄ろうとしていたもう一人から、彼を奪った。つまりそれも盗癖からなんだろうけど。」

最初は橋爪君のことをそれほど好きではなかったらしいのに、誰かが彼に近寄ろうとすると、彼を盗みたくなってしまったのだ。愛しても居ないのに、愛している素振りをし続けていたのだよ」

「それから？」

梨沙はドキドキしながら問う。

「彼女はもう一人の悪口を橋爪君に吹き込み、自分は哀れな女性であるということを言い続けたんだ。そして橋爪君は、何も疑わずに彼女の言葉だけを信じた。

彼女は可憐な女の子だったから、彼も彼女を愛し始めていた。見た目は理想的なカップルに見えたよ」

梨沙の脳裏に、リカコの姿がチラツとかすめた。だから牧人は、リカコの本質を見抜いていたのだ、きっと……。

「けれども愛を偽るのはいつまでも出来ることではない。

ある日、彼女は将来訪れるだろう貧乏生活が嫌になってきた。牧師の妻になるのは、とてもじゃないがお金持ちとは程遠い生活だ。もちろん、ブランド物など買えるわけが無い」

「でしうね」

「そして……彼女は、学生担任に、橋爪君にレイプされかかったと訴えたんだ」

「ひどい!!」と思わず梨沙は叫んでいた。「そこまでやりますか、ふつう」

「つまり彼女は普通ではなかったってことだな」と六角牧師は呟いた。

「気づいた時には遅かった。けれども、幸運なことに彼女が言った月日には、橋爪君は静岡の実家に戻っていたんだ。幸いだったよ。多分神様が護ってくれたんだろう、彼をね」

梨沙は我知らずホッとしたが、虚脱感がどっと押し寄せてきていた。

「彼は容姿だけではなく、とても前途有望な若者だった。その上に優しいし知的で。ま、部屋の中は、散らかってはいたけど。

結局彼女の嘘はバレバレになり、彼女はその後休学してしまったよ。橋爪君は、淡々としていて、決して彼女の悪口は言わなかったが……気落ちはしていただろうね。それでも、その後、勉学は怠らなかった。彼は情熱的なんだが、決して情熱に溺れるような人柄では無いから」

そう言う六角牧師の言い方も、酷く無感情な調子だった。けれどもそれが牧師の口調と言え、そうかも知れない。

「愛と言うものは厄介なものだ。それに溺れてはいけないし、けれどもやはり溺れるくらいの方が無ければ、信仰も恋愛も突き進むことは出来ない。冷たい人間では、そのどちらも不足してしまう。」

お嬢さん、あなたはそのどちらなのかな。本当に純粹に、彼を愛し続けることが出来ますか？ 様々な国難や、邪念に支配されたりはしないでしょうか……？」

六角牧師は、静かにそう言った。

「あ、マンションが見えてきましたね」

「そうですね。今までのお話、ありがとうございました、先生」

「内緒ですよ、内緒」

六角牧師は、悪戯っ子のような微笑を浮かべてみせた。

～26～

～26～

マンションに上がる数段の階段上で、梨沙は六角牧師に言いすがった。

「あ……忘れていたんですけど……橋爪先生の二度目の失恋事件って、何なんでしょう？」

「ああ、あれね」と六角牧師は突然立ち止まって、梨沙を振り返った。

「そっちの方が、我々牧師にとっても極めて遺憾なことでした。ね。橋爪君も、そちらの方がもっと傷ついたかも知れないで……。」

お嬢さん、今度」

「あ、わたし、宮本です。宮本梨沙」

「宮本さんですか。では宮本さん、それは又今度ということにしましょうよ」

「ええ……はい。先生、しつこくって済みません、わたし」

「いえいえ」と、六角牧師は手を振った。「あなたのお気持ちは手に取るように分かります。だからこそ、このことは余り言いたく無いんですよ。分かりますね？ あなたの為でもありますから」

「ええ、分かりました」

梨沙は静かに頷いた。

— +

+ — — ◆ ◆ —

二人が中に入ると、待ってましたとばかり皆が寄って来て、レジ袋の中身を覗いた。

梨沙はもう二度と、例の件については話をしなかった。『ユースの会』の面々は、その日は夜になるまでワイワイ騒いで、そしてお開きになった。

彼らはそれぞれ牧人のマンションをあとにしたのだった。

一人になり、電車に乗った梨沙は、牧人の二番目の恋の破局の原因をあれこれ思い巡らせていた。が、結局何も想像できず、深い疲労感に襲われてやめることにした。そして開いた席に座って、うとうとし始めた。

なぜかふいに元カレの多田穰の顔が夢路に浮かび、梨沙はハッと目覚めた。

多田とは3年半の付き合い。そして最後の半年は、身体の関係まで進んだのだ。ただそれがマンネリになってしまい、会えば話すよりも肌を合わせるのが慣習になっていた。そして次第に二人の間の言葉が消え、いつしか心の繋がりが無くなっていったような気がする。

そんな時、穰は新たな恋に突き進んだのだ。相手はリッチな女子大生。穰にはピツタリの相手だったかも知れない、と今はそう思えるが、その時の梨沙には地獄だった。修羅場だった。

捨てられたという事実、梨沙のプライドを傷つけ、見えない血を流させた。

けれども又、牧人も同じ苦い思いを、自らの失恋の中に置いたのだらう。そう思うと、益々牧人が身近に感じられてしまう。今更、諦めることなどではしない。

もう直ぐ2月。そして、14日はバレンタインデーの土曜日。梨沙は卒業と就職の準備で忙しくしていた。数人のクラスメート達は『卒業旅行』と称してヨーロッパ方面や、アメリカ西海岸など、そ

こに行けない者達はせめてソウルか香港かグアムに出かけて行つたが、お金の無い梨沙にはそれが出来なかった。

もちろん、母香里に工面してもらうことも出来たのだが、頼み込むことが癪に障って、結局行けずじまいだった。

それにもう一つ、理由がある。あれだけ仲の良かった明日香から何の連絡も無く、大学にも戻っていなかったのだ。卒業には支障は無いが、もう既に授業日数はなく、3月の卒業式まで明日香がどうしているか全くなかがい知れなかった。

入試シーズンに入って、梨沙はやることが無くなった。今までバイトしてきた家の生徒が見事志望中学に合格したので、梨沙の出る幕は無くなり、暇な日一日中家でゴロゴロしている時が多くなった。雑誌に載っている、そしてテレビで見たりする有名な高級チョコレート店にあるチョコを、牧人に贈ったら牧人はどういう顔をするだろうか？ いつも牧人に妙な色目を使っているオバサン、あるいはお婆さん信者からは、幾つかもらうかも知れないが……。

かと言って、まるで高校生のように、自分で溶かして作るというのも躊躇われた。

「どうしょっかな」

梨沙はゴロンと自分のベッド兼ソファに寝っ転がり、天井を見上げた。

「やっぱり、やめようか……。でも、それでいいの？ 後悔しない？」

牧人が甘党かどうかは分からないが、自分の差し出したチョコレートを見て目を白黒させている様を勝手に想像して、クスリと笑った梨沙だった。

「子供っぽい、な〜んて思われなかな〜？」

それとも、牧人は生の感情を押し殺したまま、ただ「どうもどうも」とだけしか答えないのだろうか？

梨沙の気持ちは千々に乱れたが、やがて寒い町の中に出かけて行った。そしてお目当ての小奇麗なショコラ店に入ると、チョコを選び始めた。わくわくした感情を抑えきれずに夢中になって選んでいると、ふとその店に居る女の子達や主婦やOLらしき女性達の顔が、心なし生き生きと、そしてその表情が美しく輝いているのを感じた。他人にあげるのに、嬉しいとは……。この感情は、一体何なんだろう？

――無償の愛？　ばーか、梨沙。考えすぎ。この内の誰かは、きっと自分チョコだったり、義理チョコだったり、お父さんにあげたりする人が居るのに！

そっか……。お父さん、か。

梨沙は最近ほとんど脳裏に浮かべたことすらなかった実の父、浦上聡のことを思い出していた。父聡が出て行ったのは、梨沙がちょうど12才になったばかりの頃。中学入学を待たず、母は梨沙を連れて離婚したのだ。

その後、父は新しい女と再婚した。今は、自分よりも一回りも年下の小学生の娘をもうけ、新しい人生を歩んでいる。

梨沙は、小さな“自分チョコ”と、牧人へのちよっぴり高価なチョコ、そして聡への怨念と愛憎を込めた高級チョコを買って、紙袋を揺らしながらぶらぶらと家路についたのだった。

そして日もとっぷり暮れた人通りの多いざわめきの街路を歩きながら、ケータイの蓋を開けた。

「もしもし……。あ、お父さん？　梨沙です、お久し振り」

梨沙は銀座の高級ホテルのラウンジに居た。窓から見る黄昏た銀座の町は、社会が荒み経済が悪化していても、相変わらずキラキラと瞬いている。紙袋を抱えた人々や、如何にもホステスと言った感じの着物姿のスラリとした色っぽい女性達や新宿とは違って品のいいホスト達、恋人達、一人っきりだが妙にケバイ女性達、アフター・ファイブのサラリーマン達……。彼らがいそいそと集う町なのだ。

わたしには縁が無い町……と梨沙は感じた。けれども、別れた父浦上聡には縁のある町なのだろう。

本来梨沙は、“宮本梨沙”ではなく、“浦上梨沙”だった。大手広告代理店勤めだった父聡と母香里は、最初はうまくいっていたらしい。けれども相次ぐ転勤、移動その他多忙な父と、自己主張の強い母とは結局うまく行かなかった。

と言うより、聡の浮気が離婚のそもそものきっかけだった。勝気な母香里は、慰謝料を放棄し、完全に独り立ちしようとしたが、実は聡は梨沙の高校の学費までこっそり出していたことを、梨沙は後で知った。

この日本の社会では、やはり母子家庭は厳しい。まして先進他国では当たり前の授業料無料と言う制度も、今のこの社会では無理だった。奨学金ですら余り無いその中を、段々稼げるようになってきた香里のおかげで、やっと公立大学まで出たのだ。

その間聡は新しい女と、腹違いの娘と共に、転勤で福岡に居た。彼ら一家が戻ってきたのは、ちょうど梨沙が元カレの多田と出会った頃、今から五年ほど前だ。

以来、梨沙は聡には数回会ったことがある。いつもこのラウンジだった。

母香里は、知っているのかいないのか、見て見ぬ振りをしているのかそうでないのか一言も言わなかったが、けれども梨沙は香里はきくと知っているに違いない、と薄々勘付いていた。

けれども、この淋しい母子はお互いに何も聞かず、何も言わなかった。暗黙の内に、彼らは“聡”の存在を陰だと思っていたのだ。居るようで居ない、居ないようで実は居る、という存在だと……。

時計は七時半を過ぎていた。

「やあ、待ったかい」と言う、まるで囁き声のような中年の男の声が耳元でした。

梨沙は少しだけ振り返った。いつも父聡と会うと、奇妙な気持ちに押し潰されそうになるのだ。息苦しく、辛いのか嬉しいのか分からない気持ちに。

「うん、少し」と梨沙が言うと、聡は梨沙の真正面に座って、いつものように腕をテーブルで組む。二年振りだ。そして、聡は少し老けていた。けれども、やはりどこかダンディだ。

「大人になったね」と聡は娘をじっと見ながら言いかけた。

「もう22歳だし」と梨沙は答える。「それにもう直ぐ卒業」

「そうか……そうか。うんうん……」

しばらく沈黙が支配した。父子は黙ってメニューを見ていた。

イケメンの若いウェイターがやって来て、無機的に立ち止まる。

聡が先にテキパキと注文した。

「あ……僕は……これ。セットで」

「じゃ、わたしも」と梨沙は小声で言った。

「はい」

そう言いつつも、ウェイターの視線はどことなく二人が普通の親子ではないことを見抜いていた。とは言え、愛人とも見えない。

「どうした？ 急に携帯に電話なんかしてきて。なんか、あったのか？」

「ううん、ただ」

そう言っていると、梨沙は紙袋から高級チョコの箱を取り出した。青いリボンが、薄暗いラウンジにぼんやりと映る。

「なんだ、これ」

「チョコ」

「あ、そうか。バレンタインデーの？」

「うん」と梨沙は頷いた。「まだ少し早いけど、でも何となく買ってしまった」

「ありがとう」と聡は素直に受け取り、自席の横に大事そうに置く。

「いつもは毎年、芙美乃がくれるけどな、小学生だからまだ可愛らしい包みの小さいのを」

「そう……なの」

梨沙の胸は、なぜか分からない哀しみに締め付けられるようだ。

「妹、元気？」

「ああ、元気だ。香里は？ 手術後、大丈夫か？」

「今のところ。でも、好きだった人が去年の夏、亡くなって。結構めげてる」

「そうかあ」

聡は黙り込んだ。

「香里にも、幸せになって欲しいんだが……」

それは聡の正直な気持ちなのだと、梨沙は悟った。なぜなら、梨沙は聡の方に似ているからだ。顔付きも、精神も。

「梨沙……髪型変えただろう。分かるよ」

と言いつつ、聡は微笑む。「もうすっかり年頃だな。例の恋人とは？」

「別れた。それって以前言ったじゃない!？」

「そうか。そうだったね……忘れてた」

聡は運ばれて来た食前酒に口をつけた。酒の飲めない梨沙は、オレنجジュースを飲む。それから、前菜を食べ始めた。

「わたし……また、好きな人、できちゃった。でも片思い」

「ほお! いいじゃないか、片思いでも。梨沙は綺麗だからな、相手も梨沙の気持ちに応えてくれるよ。元カレのことなど、もう気にするな」

「気づいてるの」

「え?」

「その人、わたしの気持ちを知っているのよ! でも気づかない振りをしているの」

「どういう意味かい?」

「わたしもいけないのよ。どうしても、もう一步踏み出せない」

「どうして? 梨沙だったら……」

「違うの!」と梨沙はフォークを止めて、ハタと聡を見上げた。

「その人、聖職者なの」

「へえ?」と思わず聡は身を乗り出した。

「牧師」

「それは、変わった職業だね」

「やっぱり……そうなのね」と梨沙は呟いていた。「変わった、ヘンな仕事なのね」

「世間では、ね」

「わたし……諦めた方がいいのかなあ」と言った梨沙は、今にも泣き出しそうになるのだ。銀座ではなく、先の見えないトンネルに居る気がふとする。

梨沙は父聡と銀座で別れた後、虚しい気持ちで帰路に付いた。

聡は全然変わっていなかった。人生においては、勝者と敗者しかない……そういう思考の持ち主だったが、それは今でもそうだった。そして別れたとは言え、娘の梨沙には勝者としての男性を見つけるべき、そのような人こそ愛に値する……そう、遠回しだが言つて、高級なワインを飲みながら、微笑んでいた。

梨沙は一体何を食べたのかすら、今は思い出せず、電車の揺れに任せていた。けれども別れ際の最後に一言ぼそつと言つた聡の言葉だけは、今までとは少し違つていたように感じる。

それは、「男としてもしも立派なら」と聡は言い出し、直ぐにやめたのだった。

「え？ なに？」

「いや……何でもない。とにかく、梨沙にはいい人と結婚して欲しいな。僕達が失敗した分、梨沙には失敗して欲しくないんだ。後悔して欲しくない。」

結婚は後悔の連続だとも言う。けれども、今の僕は少なくともそれほど後悔していない。香里を愛していたときも確かに存在していたし、今の妻も……」

聡は雑踏の中で立ち止まり、梨沙をじつと見つめた。

「梨沙、僕はね、梨沙が幸せになってくれればそれでいい」

それから聡は少しだけ、手をあげた。

「じゃあ」

「今日は色々……」

「風邪ひくなよ」

そう短く言うと、聡は梨沙のそれ以上の言葉を聞くことなく、雑踏に消えた。梨沙はほんの少しの間、その場に佇んでいたがやがて地下鉄に降りて行く……。

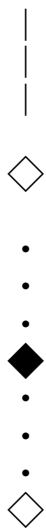
― わたしは、失敗を怖がっているのかも知れない。そして橋爪先生も、また。

梨沙は吊革に捕まりながら、そうぼんやりと考えていた。

父が新しい別家族と幸せに居ることは、梨沙にとって嬉しいのか悔しいのか分からなかった。急に香里の待つうちに戻るのが嫌になったが、それが現実と分かればそうする他無いのも知っていた。

若い女が一人都会で住むのも、今は大変な時代だ。しばらくは香里と共に居るしかない。新しい職場に慣れ、そして数年経つまではその選択しかないのだ。その選択に、牧人と一緒に居る自分の姿はなかった。あくまでも、それは“夢”か“幻”なのだ。幸福な幻影をいつまでも、追いかけても仕方ないのに……。

梨沙は溜息をつき、とぼとぼと家路に向う。



2月14日。バレンタインデーは土曜日だった。

梨沙はお昼近くまでぐずぐずしていた。美しく包装されたチョコの包みをトートバッグに入れたまま、香里の居ない団地の一室で、ごろごろしてテレビを見たり、ケータイを覗いたりしていた。

2月の夕暮れは早く、最後には梨沙はじっとその包みを見つめているだけだった。勇気の無い自分が嫌だった。けれども、どうしても身体は動かない。

ケータイが鳴って、香里の声がした。

「あ、梨沙？　今晚遅いから。同僚と一杯やんのよお。遅くなるから、あと頼むね」

「また？　明日も仕事でしょ？」

「ううん。明日はねえ、休むの。有給で。うふふふ」

香里の含み笑いが聞こえた。変だと思ったが、梨沙はそれを聞くとやっと決心がついた。

梨沙はチョコの包みを持って、自宅を出た。もうすでに暗い夜空には、星が幾つか瞬いている。牧人の居る教会までの道のりは、遠いようで近い。

電車を下りて歩いているときも、心はどこか空中をさ迷っている感じた。梨沙はしつかとチョコの包みを抱き締めた。

チョコを牧人の玄関口に置いて、そのまま帰ろうと梨沙は考えていた。直接手渡すのは、何だか怖い。けれども、何もしないで行くのは自分に正直ではなく、悔いが後々残るだろう……。玄関に置くと、いつか牧人は誰かがチョコを置いていったことに気づくだろう。それでいいと、梨沙は思った。

牧人のマンションに近付ごとに、梨沙の胸はドキドキと波打った。けれどもなけなしの勇気を振るって、梨沙はマンションに近寄り、エントランスに入ろうとした。

その時、中から楽しげに出てくる2つの影……。一人は明らかにその声で分かる愛であり、もう一人はすっぱりフードを被った男の影。牧人に似たその背中。

「ねえ……あたし……どっか……だけど……」

愛の特徴のある声が響くと、愛はその影の男の腕にしがみついて、反対方向に歩き始めた。男の声は聞こえない。けれども梨沙は、ただ呆然としてその場に凍り付いていた。

楽しげなカップルの影が角に消えたとき初めて、梨沙は持っていたチョコの包みを道路に投げ捨て、それを足で何度も何度も踏みつけた。

― バカバカバカ！ 梨沙のバカ〜〜！！ わたしって……本当の、バカ野郎。

溢れ落ちる涙を拭おうともせず、梨沙はその場にしゃがみ込んで、泣き出した。誰も通らない暗い夜道で……。

どれくらい泣いていたか分からない……。やっと声を忍びつつしやくりあげながら、梨沙はノロノロと立ち上がった。右手で涙を拭き、左手でクシャクシャになった無残なチョコをしっかと胸に抱いた時だった。背後に足音がしたのは。

梨沙がハッと振り返ると、すぐそこには牧人の姿が街灯にぼんやりと照らされていた。それも右手に革鞆を持ち、フード付きではなく律儀そうな黒っぽい半ゴート姿だ。明らかにさっき愛と一緒に居た人影ではない！

「あ！……先生！？」

「宮本さん？」と呼びかける牧人の怪訝な声が出た。「どうしたの、こんなところで」

「あ……いえ……」

梨沙は狼狽の声を上げたが、それは喜ばしい狼狽でもあったし、そして自分に対する恥の叫びでもあった。一瞬でも、いや今まで牧人を信じていず、愚かしくも全く勘違いしてた自分が恥ずかしくてならない。

「あの……つまり……」

しどろもどろで、どう言い訳していいか分からない。

「先生に会いに」と梨沙はキッパリと言った。「でも……落としてしまつて……チョコを」

「チョコ？ ああ、今日バレンタインデーだから？」

「そうです」

「ありがとう。義理チョコでも嬉しいよ」

と牧人は暗がりでもよく分かるほど、ニツコリと微笑んだ。

「義理じゃないです！」

思わず我知らず声が出てしまう。

「……………」

「義理じゃないんです。でも……あげられません。目茶目茶になってしまっ」

再び涙が頬を伝う。けれどもそれは後悔の涙だった。

「わざわざ届けに来てくれたんですね、この寒いのに」と牧人は優しく言いかけた。

「それだけで、僕は嬉しいですよ、宮本さん」

「あのお、先生は教会に？」

「ええ、今までずっと。まあ、色々雑事がありましてね、教会では」

二人の背後に、人影が通り過ぎた。二人は黙ったままだ。

「さっき……見たんです。愛さんと誰かが、ここから……」

「知っていました」と牧人は静かに答えた。

「え？」

「愛さんには、恋人がいらっしゃるんですよ。あいにくと、ここ、同じマンションにね」

「それじゃあ……」

「そう。察しがいいですね、宮本さんは」と牧人は淋しげに微笑む。「愛さんは、僕に時々料理を届けて下さるが、実はそれは口実だったんです。愛する人がここに住んでいるからなんです。僕は単なる美人局、というか、ダシに使われていたみたいです。まあ、別にそれでもいいんですがね」

梨沙は金槌で叩かれたような気がした。愛の行動の全てが明白になった。そして、梨沙は何もかも勘違いしていたのだ……。

「先生の為じゃなかったんですね」

「そう……みたいです。ま、いいじゃないですか。恋人達の美人局は。愛さんは、ノン・クリスチャンであるその恋人のことを、お父さんに言う事をすごく躊躇っているんですよ。きっと反対されるってね。」

でも僕はいいと思うな。時々その人をお見かけするんですが、とても感じのいい隣人ですよ。ここに来ている内に、どうやら知り合いになられたようです。相手は外食産業の工場の人だそうです」

牧人はさばさばした声音で言い続けていたが、ふと梨沙に目を止めた。

「ああ、立ち話で済みません。寒いのに。宮本さんも早く帰った方がいいですよ。若いお嬢さんは夜道は危険ですからね、最近は」

「先生……わたし」

「はい？」

「さっき、義理チョコじゃないと言いましたね」

「ええ」

「わたし……本気なんです」

牧人は暗闇でハッと息を飲んだようだった。

「本気チョコだったんです。わたしは、わたしは……」
梨沙の声は乾いていた。

「わたし、先生のこと、好きなんです！」

牧人は驚いたように俯く。

「好きなんです！ 愛してはいませんか、先生のこと！」
「ありがとう」と牧人は短く答えた。

「先生はわたしのこと……嫌いなんですか？」
「嫌いだなんて……」

牧人はしばらくモジモジしていた。けれどもようやく顔を上げる

と、

「僕は……でも……」と真っ直ぐ梨沙を見つめて答える。

「でも、それから、なんですか？」

「僕も嫌いじゃない。て言うか、僕も……」

「え!？」

「でも」

「でも？」

「あなたが、クリスチャンだったら、と……」

「クリスチャンでなければ駄目ですか？ 洗礼受けないと駄目なんですか!？」

「牧師の奥さんになるには……」

「じゃなくて、先生自身はどうなんです!？ わたしのこと、好きなんですか」

「好きです」と牧人はポツンと答えた。「けれど」

「どうして、愛しているだけじゃだめなの？ なぜ、洗礼とかにこだわるんですか？ わたしはただ先生を愛しているんです！ 条件なんか付けないで!! 付けないで……」

ひと時の歓喜は絶望に変わった。

梨沙はクルリと振り返ると、牧人に背を向けて走り去った。途中で、一部破れたチョコの包みが落ちたが、振り返りもせず梨沙はひた走る。悲しみだけが梨沙の後を追いかけて行く……。そして後には沈黙が残った。

あの日から、もう五ヶ月が経った。今梨沙は、中高一貫の私立藤が丘女子学院の英語の教師だ。この七月はもう直ぐ期末テストだというので、かなり忙しい日々を送っていた。

あれ以来、梨沙は教会に出席したことが無い。牧人を忘れようと、慌しく卒業し、そして就職。それから教師として、忙しい初めての年度で精一杯なのだ。けれども教会に行かなくなった理由は、やはり“あの出来事”にあった。

牧人の言葉は、梨沙を深く傷つけていた。所詮、男とはそういうもの……とすっぱり諦める気でいた。そして時が経つにつれ、次第に牧人の存在すら薄れて行くものと信じていた。

なのに、何一つ薄れることが無いのだ。むしろ、ふと一息ついたときなど、否応無く牧人の姿が脳裏に浮かぶ。条件付きの嫌な奴、と思いたいのに、あの時の牧人の切なそうな言葉の響きや、眼鏡越しの眼差しが忘れられない。

何か言えはよかった。もう少し落ち着いて対応すればよかった……。と考えることは、いつもそればかりだった。

けれども人生は色恋沙汰ばかりではない。

明日香は卒業式の前にどうやら上京してきたが、その余りのやつれように梨沙は息を飲み、自分のことなど幾らか忘れた。明日香にあの時の痛みや愚痴を聞いてもらいたかったのだが、明日香を見るとそれが言えなくなった。

明日香は、鬱病を併発していたのだ。彼女は絶えず何かのクスリ

を飲み、それによって精神の均衡を保っているようだった。そして卒業式が終わると、明日香はさっさと実家に戻って行った。親友だというのに、梨沙は明日香に何の手助けも出来なかったのだ。

そしてほどなくして就職。それから以後、梨沙にとっては辛い日々が待っていた。

私立藤が丘女子学院は、駅からなだらかな丘の上に建つ、少なくとも見た目は麗しい学校だった。

偏差値は真ん中よりも幾らか上で、子弟達はみな中流から上流の女子ばかりだ。梨沙のような片親は少なく、大抵両親が揃い、この不景気なご時勢だというのに経済的には余り問題の無い生徒達ばかりだった。

けれども問題はもっと他のところにあった。

シカトが横行し、女子達はどこかのグループに属して居ないと、この学院には居られないといった状況であることに、やがて梨沙は気づいた。そして彼女達の一部が、帰宅時駅のトイレで、その窮屈な制服を脱ぎ捨てていることも判明した。

一学期で既に一人が妊娠し、一人が親の経済状況の変化で退学して行った。その上、梨沙の教師としての評判は、あまり親達には良く無いと言うことも分かった。

けれども元来頑張り屋の梨沙は、決して母香里には弱音を吐かず、何とかこの七月まで辿り着いたのだ。確かに牧人や明日香のことは、考える暇もなかった、と言ったほうが正しい。

そして帰宅すればしたで、様々な文献やテキストに目を通し、日曜休日は疲れ果てて寝てばかり。香里の方が、反対に梨沙の身体を心配することもあった。

けれども少なくとも、牧人のことをひと時忘れることができる。そしていつか忘れはてる……。その考えが甘かったことに、やがて梨沙は気づくのだが。

その間、教会の『ユースの会』のメンバーからは、ほとんど何の音沙汰も無かった。あの一年間は一体何だったのだ、と梨沙は思う。ほぼ一年居たものの、信仰とは何か結局のところ理解出来ていなかったらしい。

そして『ユースの会』の面々との付き合いも、それっきりなのだろうか……。



梨沙がそう思っていた頃、思いがけなくさやかから電話が入ったのだった。

「もしもし、宮本さん？」 わたし、さやか」と言う、いつものながら朗らかそうなさやかの声がした時、梨沙は一瞬ギクリとして身構えた。

「あ……荒川さん、ですか？」

「ですか、じゃないわよお。どうしたの？ 最近とんと出席して居ないけど？」

「あ、いえ」と、梨沙は居残りの教師が少なくなった職員室で、躊躇いがちに応えた。

「忙しくて」

それは嘘だったが、確かに多忙だったのは本当だ。

「もう教会やめたの？」とズバリさやかは聞いてきた。「それとも、又来る？」

「ええっと」と梨沙は慌てた。「そうですねえ……。……ところで皆さん、お元気ですか？」

と話題を変えて、梨沙は無難な質問をする。

「ええ、まあ元気よ。でもね、橋爪先生、ここんところ、ちょっと調子悪くてねえ」

「え」

心臓が震えるのはなぜだろう。

「二月末に風邪をこじらせて肺炎を起こして、しばらく入院していたの。あ、今は現役復帰しているけど、あんまり元気が無いなあ」

「そうだったんですか……」

「食欲無いらしく、少し痩せてる。まあ元々スリムだったけど」

――二月末と言えば、あのあとか……。

梨沙の脳裏に、ちらっと牧人の顔が浮かんた。悲しくなる……。病院に伏せっている牧人を想像するだけで、胸が潰れそうになるのはなぜ？　それでもやもやしたこの気持ち……そう、これが罪の呵責と言うもののだろうか？

けれども梨沙自身は、牧人に対して何も罪を犯しているという自覚は全く無いのだ。梨沙は勇気をふるって告白した。そして牧人も同じだと告げた。けれどもその後は……。

「宮本さん？　どうしたの、黙ってしまっ」

「あ？　いえ、別に」

梨沙はハッと我に返る。

「ねえねえ、グッド・ニュースもあるのよ！」

「え？」

「愛さんねえ、遂に結婚するの！　それもノン・クリスチャンの人で大学出でもないし、フツのサラリーマン。田中牧師ったら、もう大変だったんだから」

「反対されて？」

「ん、まあね。でも橋爪先生が援護してくれて。」

ねえ、宮本さん。わたし達、愛さんに騙されてたのかも知れないわね。愛さんって、てっきり橋爪先生を好きなのかと、わたし勘違

いしてた。結局は、先生、隠れ蓑にされていたのよ。愛さんもずるい人！でしょ？」

「ええ」

そう答えたつきり、梨沙は次の言葉が出て来なかった。

あの晩、愛が他の男性と睦まじく出て行った姿を目撃していた梨沙は、改めて愛のやり方を身に沁みて忌々しいと思った。けれども、それも恋愛のなせるわざなのかも知れない。愛情は時として醜い。けれども、人間には必要なものののだ。

「ね、又来てね。夏休みぐらい、空いてるでしょ？ みんな、待ってるから」

そう言うと、さやかは電話を切った。梨沙はケータイを持ったまま、自分の机の前でじっと凍りついたように座り込んでいた。

梨沙には初めての夏休み。けれども、何の計画も無い。

顧問をしている英研は、夏休みの間に活動することは余り無かったし、フレッシュマン先生として、何か大事なことを任せられることも無かった。

大学時代にオーストラリアに語学留学はしたものの、この学院には帰国子女や幼児の頃より英語に勤しんでいる者が大勢居て、梨沙の英語の発音をあげつらう生徒も少ないが居た。

けれども、英語の読解力や文法能力にかけては、梨沙に敵う生徒など居なかったことだけが、唯一の幸運だった。

「昔なら、梨沙はスッチーになれたのに」

と母香里が残念そうに言うのだ。

「スッチーなんて……今はフライト・アテンダントでしょ」

「スッチーの前は、スチュワーデスと言って、わたし達の憧れの職業だったのよ」

「それって、随分昔のことじゃん。今じゃあ、あんな過酷な仕事は無いって」

「時代は変わって行くわね」と香里は溜息をつく。「以前は送り迎えされていて、並みのサラリーマンよりも、給料が上だったのに」

「わたしは英語教師で充分」と梨沙は淋しく笑った。

「そう言えば梨沙……最近教会にはとんどご無沙汰みたいね」

この香里の問いかけに、梨沙はギクリとした。

「そうかな？ 多分、日曜日は思いっきり寝たいからじゃない？」

「うん、まあ確かに先生は辛いかも、最近はね。でも、他にも理

由があるんじゃない……」

「なんも無いって！」と我知らず梨沙は香里の言葉を遮っていた。
「考えすぎじゃない、お母さんは？」

香里はふーんと言ったつきり、それ以上は詮索しなかった。

「じゃ、この夏どっか行くの？ このまんま、ずーっと家に居るんじゃないでしょうね？ カレシ、出来た？」

「学校には、ほとんどが既婚のオジサン先生か、ヘタレの冴えない独身ぐらいかな？ あとは女性の先生ばかりだし」

梨沙はそう言うと、ドサツと畳に寝転がった。

「恋愛なんて、とても出来そうな場所じゃないよ」

「でも、一生……」

「なによ」

「一生独身で居るのも、何だか寂しいよ、梨沙」

「わたし、まだ23歳じゃん。そんなに焦らせないでよ！」

「人生は一瞬よ、梨沙。いい人がいたら、絶対に離しちゃだめ」

そう言うと、香里は出かける支度を始めた。

「今日、休みじゃなかった？」

「友達と銀座に行くの」

そう言い残し、香里はさっさと出かけて行った。その言葉を信用していいのかどうか梨沙は迷ったが、結局母親の生き方にどうこう言える筋合いではないことに気付くと、梨沙はテレビを付けて、ソファに転がった。



テレビは、いつもの如くつまらない旅番組を流していた。

ぼんやり見ていた梨沙は、ある場所でふと頭をもたげた。どこかで聞いたことがあるお寺とその付近の景色、そしてタレント達の食

べ歩きが紹介されていたのだ。その名刹には、確かに覚えがある。

「あれっ？ どこかで……？」

梨沙はちゃんと居住まいを正すと、食い入るようにテレビの画面を見つめ出した。もう直ぐ地デジに買い換えなければならない、アナログTVだったのだが、そんなことはもうどうでも良かった。

画面に写る溪谷が美しい夏の緑に映え、境内は如何にも涼しそうだ。けれども、旅をする分にはいいが、住むにはちょっと侘しいし勇気が要る……そんな場所に見える。

ひっそりと佇むお寺の名前は、『塔然寺』。法然の作った浄土宗の由緒あるお寺だと言う。けれどもそんなことはどうでも良かった。そのお寺の名前は、確かに聞き覚えがあるのだ。

――どこかで聞いたのに、どうして思い出さないんだろう？

梨沙は自分の記憶力の不確かさに苛々し始めていたが、突如その名前を鮮明に思い出した。そう、それは明日香の美帆と言う友達が、旅行中にその若い住職に一目惚れして嫁いだというお寺に違いなかった。

『すご〜く、綺麗っ！』と画面の中の若いタレントは、流行のチュニックに包まれてわざとらしく叫ぶ。

『ステキね〜。空気が美味しくて、新鮮な野菜の精進料理がこの辺で食べられるそうよ』

ともう一人も相槌を打っていた。

『じゃ、大谷温泉に行って、それ食べようよ』

と、タレントが台詞どおりの言葉を吐き、二人はその場を後にした。次の場面は、風呂に入っている半裸の二人だった。もうあの場所を出てこない……。

結局、『塔然寺』に嫁いだ美帆という女性は出てこなかった。タレント達は、こちら側に居てただ涼しい顔で台詞を吐いているだけで、あっち側の本当に生活している人々はどうでもいいのだ。メディアというものは、得てしてそんなもの。

ただ過ぎ去り行く土地ならいい。けれども住んでいる、その美帆と言う女性は、今現在どんな生活を送っているのだろう。

都会育ちでお嬢さんだったと言う美帆は、今どんな心境でそんな鄙に住んでいるのか？ 後悔していないか？ それとも、満足しているのか？ あるいは、もしかすると、もう離婚したかも知れない……。

そう思うと、突然梨沙は押入れを空けて、グリーンズのチェックの旅行カバンを取り出していた。思い立つと留まる所を知らないのが梨沙の長所でもあり欠点でもあったが、今の梨沙は居ても立っても居られなくなったのだ。

「お母さん ごめんなさい

わたしちよつと金沢方面に行って来ます

また後で連絡するね」

そう言う素っ気無いメモを残すと、梨沙は真夏の金沢に向って、一步を進めたのだった。何か自分に指針を与えてくれるかも知れない場所に向って。それは或いは、幻滅する旅なのかも知れないのだが。

駅を降り、二時間に一本しか無いと言うパスに乗り、田舎の人々の気まぐれな視線に耐えながら、梨沙は車中から見る、見事な緑深い溪谷を覗いていた。

旅は得てして現実から離れる為だと言う。けれども今の梨沙にとって、旅は現実そのものだった。とは言え、飛び出してはみたものの所詮知らない土地……。やはり目的地に着くまでは気が抜けない。

それでも、梨沙はなぜか穏やかな気分になっていた。今まで余りにもリアルな現実、かなり心身ともに疲れていたせいかもしれない。

初めて直面する女子一貫校での気苦労や、母香里との気まずい生活、そして何よりも恋から逃避し、それでも忘れられない思いを未だに抱いている、この息苦しさ。

それらがここに来た理由の一つだったが、それはまだ牧人を忘れられない自分を、新たに発見した旅でもあったのだ……。

梨沙は親友の明日香には何も言わずにここまでやって来たが、けれども美帆という女性と会った後には、それを述べるつもりでいたとにかく突っ走りたい……。自分の思いのままに、何かを求めて走り続けたい。今はそのことで精一杯だ。

そんなことを考えている内に、目的の大谷温泉まで来た。そこから『塔然寺』（とうねんじ）までは、徒歩で20分ほどだと言う。小さな町には、それでもコンビニが一つと郵便局、そして雑貨屋のようなミニ・スーパーがあり、たった一本しかない通りがその町

の目抜き通りと言った風情だった。

大谷温泉という古びた木の看板の下には、底深い溪流が流れ、数件の温泉宿と少し奥にはペンションがあるらしく、『木陰やど』と言う綺麗な看板があった。梨沙は迷わずそのペンションに入った。

中から50代ぐらいの案外洒落たオーナーらしき婦人が出てくると、にこやかに梨沙を迎えた。木の香りが漂うような、素朴だがステキなダイニングキッチンが見える。

「いらっしやいませ〜！ お客さんでしょうか」

「あの、わたし予約してないんですけど、今日お部屋空いていますか？」

「ええ、空いていますよ。お一人？」

「え？ ええ、一人……ですけど」

「ベッドはダブルでいいですね」

オーナー婦人は、テキパキとした態度で、台帳を広げた。

「ここにお名前とお住所を書いて下さいませんか」

「は、はい」

「お一人ですか？」

「そうですけど」

「こんな田舎にお一人でいらっしゃるなんて、珍しいですね。帰りには金沢に寄られるんでしょう？ 犀川さいがわとか、いいですよ」

「いえ、知り合いが居て」と梨沙は、計らずも嘘をついた。

「まあ、どちらに？」

「と、塔然寺に……」

「あらあ！ あそこの若住職さんのお嫁さんの！？」

とオーナーは急に親しみのこもった声をあげる。

「今日中に行けますよね」

「ええ、夏だから日が暮れるのは遅いですし、まだ大丈夫ですよ」

オーナー婦人はニツコリ微笑むと、鍵を出した。梨沙の軽装とそのカバン一つの身軽さにも、頓着していない様子だ。

「本当に、この辺りの人達、驚いていたんですよ。若住職さんに、大都会からお嫁さんが来るなんて、誰も信じられなくてね。だって、どこも今嫁不足なんですよ、こんな田舎。それがねえ、ほんとびっくりで。」

今はインターネットとか携帯があると言うけど、ほんと、そういうことって実際にあるんですねえ」

オーナー婦人は、感に堪えないように言い続ける。

「それに、若奥さんは綺麗な人だし。いえ……あなたもお綺麗だわ。あなたが入って来た時、何だがそこいらへんが、明るくなったような気がしたんですよ」

「まあ……そんな」

梨沙は鍵を受け取りながら、このオーナーはお世辞がうまい人だと思った。客商売だから当然かもしれないが、綺麗と言われて嫌な客は居ないだろう。それを知っているのだ。



まだ日が高い内に、梨沙は『塔然寺』への細い道を歩いていた。小さな田舎町から離れるにつれ、少しずつ心細くなってくる。けれども、途中軽トラックやクルマが2、3台通り過ぎ、ここが全く忘れ去られた鄙ではないことも感じられた。それを証拠に、鬱蒼と茂った木々の間に、三重の塔のある寺社が見えてきたのだ。

梨沙は急に期待と不安が縋い交ぜになって、歩みを止めるとその寺社を見上げた。思っていたよりも大きな寺社だった。HPもあるのだから、当然と言えばそうだが。

そして薬草を売っている小さな茶屋が、ひっそりと寺社の側に佇ん

でいた。その店から、老婆がこちらをチラッと伺っている。まるで時を忘れたような場所だ。

けれども寺社の前には、赤い派手な車が止っており、梨沙を現実
に引き戻した。その車は、さつき梨沙を追い越した車だ。中からは、
ちようど若い女性が降りてきたところだった。淡いベージュのチュ
ニックが、細身のスキニーパンツに似合っている。

「あの」と梨沙は言いかけた。

「え？」とその若い女性は振り向く。手に持ったサングラスが、午
後の遅い日光を照り返す。

「ここが、『塔然寺』ですよ」

「そうですけど、何か？」

「あっ……ええっと……こちらに、美帆さんって方、いらっしやい
ますか」

その女性は一瞬黙り込んでいたが、直ぐに答えた。

「美帆はわたしですけど」

「え」と梨沙は思わず息を飲んだ。想像していた人物とはまるで違
う美帆の姿が、躊躇いがちに目の前にあった。

テレビの旅番組とはアングルが少し違うものの、和の美とも言ふべき、『塔然寺』はやはり美しい。けれども、その奥ゆかしさと、目の前の美帆とは何の関係も無さそうに見えた。

むしろ、古い寺院の前に対峙して立つ二人の娘の姿の方が、より絵になるかも知れない。梨沙も美帆も、違う意味で若々しく精気に満ちており、そして美しかった。特にこの自然の中では、画家なら絵筆を、写真家なら写真を、エッセイストならエッセイを成さずには居られない……そんな構図なのだ。

「あ、ごめんなさい。わたし……」と梨沙は歩いて来たせいか、額の汗を掌で拭った。

「明日香の大学時代の友人なんです」

「ああ……明日香の？」

美帆の小首を傾ける様が、自分には無い可愛らしさだ、と梨沙はふと思った。目の前の若い女性、美帆は都会に居ても少しもおかしさは無い。むしろ都会的だと感じたからだ。それに比べて、自分の方が遥かにダサイかも知れないと。

「わざわざここまで来てくれたんですか？ 観光とか？」

「いいえ」と梨沙は手を振った。「あのう、あなたに会いたくて」

「え？」と美帆は訝しげな視線を梨沙に注いだ。

「わたし、明日香からあなたのこと聞いたんです。あなたと、この住職さんとの……なれ初めを」

「ああ、わたし達のコイバナを聞かされたんですか！？」

うつすらと微笑が美帆の唇に広がったが、けれども美帆はまだ警

戒を解いてはいないようだった。どこか表情が硬いのだ。

けれども助け舟が現れた。かなり長い階段上から声がする。

「お客さんか？ 檀家の人？」

「違う。わたしの友達友達、だって」

現れたのは、スラリとした体格を黒い紗の衣で被った、若い僧侶だった。その濃いねずみ色の衣が、浮世離れしてハタハタと風になびく。その僧侶を見上げて、美帆は声を張り上げたのだった。

「あの方が……？」

「わたしの夫。って言うか……ここの若住職でもあるし」

「お客さんなら、あがってもらいなさい」

遠くから、美帆の夫でもある住職のよく通る声がする。

「そうね。遠い所から来たんでしょ。宜しければ、伽藍にどうぞ。」

時々、メディアの人とかもやって来ることがあるし」

「テレビで見ました……」

「ああ。あの旅番組？ 随分勝手なことばかり言ってたけど、半分は演出なのよ」

美帆は、少し苦々しげに笑った。

住職が降りて来た。確かに、こんな所に、と思うほどの美青年だ。牧人とは感じが違うが、もっと男っぽい雰囲気がある。頼りがいのある、それでいてどこか神秘的なたたずまい。それは、僧衣のせいなのかも知れないが。

住職は深々とお辞儀をした。

「これはこれは、ここまでよくいらっしやいました」

「この人、わたしは知らないんだけど、明日香の友達だって」

「ほうお、そうですか」

住職は上品に微笑む。それが嘘であっても、確かに魅力的だ。何となく、牧人の微笑みに近いものを感じるの、宗教は違っててもど

ちらも聖職者であるからなのだろうか。

「お寺に興味がおありですか」

「違うのよ。この人……あ、名前聞いてなかった」

「宮本梨沙です。済みません、わたししたら」

「ですって。宮本さん、わたしに会いに来たんだそうよ」

美帆は甘えたように言うと、住職の腕を掴んだ。

「何だか、疲れちゃった」

「ああ……荷物は僕が持つよ」

二人は浮世から現実に戻ったただの夫婦と化し、一礼した住職は赤い車から荷物を引っ張り出した。

「ごめんなさい。今日、病院に行って来たもんだから」

「ご病気、でしたか」

「違うの。ふふ……分かるでしょ」

一瞬梨沙は美帆が何を意味しているのか分からなかったが、フワリとしたチュニックの下にあるやや膨らんだ腹部にやっと気がついたのだった。

「あ！ おめでた」

「そう」

美帆はあっけらかんと言うが、夫の方は顔を伏せる。

「お茶でも飲んでいって下さい」

そう言いかけるのがやっとの様子で、もじもじしている。そしてクルリと向きを変えると、重そうな荷物を持ったまま、スタスタと階段を上り始めた。

「おめでとうございます。ご主人、お優しい方ですね」

「そう？ 夫なら当然じゃない？」と美帆は梨沙に言いかけた。

「あなたは……独身よね、まだ」

「ええ。教師をしています」

「だと思った」

「え？」

「何か、お堅いんだもの」

「そうですか……」

「綺麗なのに……せっかく……」

美帆は言い過ぎたと感じたのか、ゆっくりとした歩調で黙って夫の後を追った。そして振り返ると、

「どうぞ」と梨沙に言う。梨沙は階段下で突っ立ったままだった。このまま、美帆に付いて行っているのか、梨沙は迷っていたのだ。

下世話な目論見とは違って、このような現実離れした森の中では、全てが御伽噺のように感じてしまうが、目の前の二人の存在は明らかなる事実だった。

「それじゃあ、お言葉に甘えまして……」

「いいのよ」

「あの……最近、明日香はどうしてます？」

その問いかけに、美帆は鋭く反応した。ゆっくり振り返ると、じいっと梨沙の方を見下ろす。

「何か？」

「知らないの？」

「え？」

「明日香……自殺したの。鬱病だったってことは知ってたけど……」

梨沙はこの衝撃的な事実にも目の前が真っ暗になり、そしてこの暑さだと言うのに、背筋が凍り付いていくのを感じて立ち止まった。

「そんな！ いつですか！」

「二ヶ月ほど前だって」

美帆は目を伏せた。

「知らなかったんですね、やっぱり」と美帆は静かにつぶやいた。
「身内だけでひっそり、送ったそうです。地元の高校の同級生にしか、知らせなかったって」

「明日香……」

突っ立ったままの梨沙の瞳から、涙が溢れ落ちた。

なぜもつと早く、明日香と連絡を取らなかったのだろうか……。

その思いは梨沙を奈落に落とした。明日香が鬱なのは知っていたが、まさかそこまで落ち込んでいたとは！ 自分は親友明日香にとって、何だったのだ！？ 己のことばかり思案して、友達のこととはほったらかしだった……。

苦い後悔に飲み込まれそうになり、梨沙は一步も動けなかった。美帆が心配そうに、又降りて来ると、そつと梨沙に寄り添った。今までの取ってつけたような態度とは違い、柔らかな女らしい風情が美帆から滲み出てきている。

「ねえ、宮本さん。もう仕方ないよ、明日香のことは」

「でも！ 何か出来たはずなのに……わたし、自分のことばかりで」
梨沙は涙をぐつと飲み込んだ。

「それは、みんなそうよ」と美帆も同意する。「みんな、自分のことだけなのよ。わたしもそうだった。だから、それをお母さんから聞いた時、自分の罪深さにぞつとした」

「罪深さ？」

「そう、罪深さ。煩惱に縛られている自分、人間の弱さを初めて知ったの。お寺に嫁に来たと言うのに、それまでわたしは仏教とか宗教とか、そんなの要らないと思ってた。

だけど、その時夫の前で思い切り泣いたら、夫は言ったわ。彼女は彼岸に去ったのだって。でも、それは阿弥陀菩薩の居られる極楽浄土だって言われた。多分わたし……それを信じたい。見えないものだけれど、それを信じようと思った……。

夫は明日香の為に念仏を唱え始めたの。わたしはその側に座って、

一心にお祈りした。今までそんなことが無かったのにね。そうしたら、夫の唱える念仏と共に、何か浄化されたの……言葉では言えない何か」

美帆は優しく、嗚咽をあげ続ける梨沙の背中をさすった。

「あなた、明日香のこと、本当に好きだったのね」

「う、うん……ええ」

「嬉しいわ。さ、行きましょ。冷たい飲み物でも飲んで、落ち着いたら彼女の菩提を弔いましょう、一緒に。南無阿弥陀仏、と」
「ええ」と梨沙は不思議な思いに捕われながら、うなずいた。

阿弥陀如来はキリスト教の中のイエス・キリストとは違う。けれども、結局同じ存在なのだと梨沙は今思う。

今までは理屈で祈ろうと思っていた。けれども、キリストへの祈りは、念仏と同じなのかも知れない。自分が祈りの中で、無になること。人間の傲慢さを捨てて、ひたすら帰依すること……それは一緒なのだ。

儚い人生だからこそ、人は何かにすがらずには居られない。けれどもそれは弱さではなく、人間の持っている本質なのだ。

もしも牧人がここに居たら、牧人は梨沙に何と言うのだろうか。梨沙はふと、牧人の面影を追っている自分を痛切に感じた。

やはり牧人は必要だ。自分にとって、側に居て欲しい、そんな存在なのだ。

|| || || ★ . . . ☆ . . . ★ || || ||

ひんやりとした僧坊で、梨沙はやっと人心地がついた。美帆は畳に座り、重そうな身体を団扇で扇いでいる。冷たい麦茶が、熱っぽい身体を冷やしていった。麦茶と共に、小さな茶菓子が置かれてある。

「済みません、こんな所まで来て、ただただ泣いてご迷惑ばかりかけてしまつて」

「いいえ、きつとショックだったのね」

「ええ」と梨沙は素直に答えた。「身近な人が亡くなるって……今まで余り無かったことだったし。母にはそういう体験が起つたんですけど、去年。でもわたしは、結構知らん振りしていた。何だか、悪いことしたみたいで」

「わたしも、そういう気持ちだった」と美帆も答えた。

「友達を亡くすつて、辛いことね」

「そうですね」

しばらく二人は黙したままだったが、美帆から言い出した。

「ところで、わたしに何の御用で？」

「あ……それは」

梨沙は言いよどむ。

「言つてちょうだい」と美帆が催促した。

「言つていいのかしら。とても私的なことだし」

「恋……のこと？」

梨沙は美帆の勘の鋭さに、しばし言葉を失った。けれども、やがて梨沙は少しだけ居住まいを正して、美帆に向き合つた。

「わたし……ある人を愛してしまつて。その人は、聖職者で」

「やっぱりお坊さんとか？」

「いいえ、牧師さんで」

「ああ」と美帆は、団扇を扇ぐ手を止めた。「そうか……」

「迷っていたんです。でも、別れました」

「告白したの？」

「ええ。その人もわたしを愛していてくれてたと知つて、わたし、

とても嬉しくて。でも、別れちゃった」

「へえ。なぜ？」

「洗礼を、強要されて。って言うか、そういう風に言われてしまつて。洗礼しないと結婚できない、とかって」

「キリスト教って、そんなに堅苦しいの？」

「そうじゃないんです。でもその人は、そう言ったんです。そしたらわたし、急に……」

「嫌いになった？」

「いいえ」と梨沙はキツパリ言った。「嫌いになったんじゃないんです。でも、その人の側から離れてしまつて」

「きつと、許せなくなったのね」

「そうなの……かなあ。わたしには分からない。今でも、分からないんです」

「でも、好きなんでしょ、今でも」

「当たり前、ですわね」

ここに来て初めて、梨沙は少しだが、笑った。

「ええ、好きです。今でも愛しています。だからって、洗礼はその為に受けたくは無いです。そんなの、ニセモノの信仰だもの」

「ニセモノの……」と美帆はつぶやいた。「昔のわたしみたい」

「美帆さんは？」

「仏教には洗礼とかの儀式は無いわよ。でも彼と結婚することは、結局お寺の奥さんになるわけだから、やっぱり迷いはあった。

でも、信仰とか信心って、ほら、ここにあるお菓子みたいで、お茶だけが現実なら、それを潤すものかも、って感じて」

「と言うよりも、彼を愛する方が勝ったんでは？」

「当たり前」と美帆も言うど、梨沙を見ながら微笑んだ。

「理屈ではなく、わたしもやっぱり彼から離れられなかった。ただそれだけだったのね」

「理屈や打算を超えてまで、彼を愛していたんですね。でも、わた

しには、無理かも知れない……」
そう淋しく梨沙は答えたのだった。

涼やかな風が、どこからともなく吹いてきて、しばらく無言だった二人の髪を揺らした。

「でも、淋しい。明日香がもう居ないなんて。わたし、初めて死を本気で考えた。そして夫の修君に、『死って何？』と聞いたの。でも、答えは永遠に無いのね。分かっていることは、明日香がもうこの世には居ないってこと……」

「そうですね」と梨沙も、美帆に同調した。「明日香はもう居ないんです。どこを探しても……でもそれって虚しくありません？ 明日香だけではなく、わたしも居なくなる、いずれは……。わたし達って何の為に生まれてきたんだろう？ 何の為に生きているのかって、考えたことありませんか？」

美帆は梨沙を見つめると、静かに扇を扇ぎながら口を開いた。

「正直、ここに嫁ぐまでは真剣に考えたことは無かったわ。でも、ここに来て否応無く、檀家さんのお葬式に出たり、法事があったりすると、最初何も手伝わないと言っているけど、でも手伝わざるを得なくなってしまうた。」

それって、結婚の時の約束とは違うって、わたし夫に抗議したの。でも、一旦そういうものに出してみると、どうしても死とか生とかあの世とか、考えちゃうわね。まして、子供を授かった時には、自分でも涙が出てきてしまった。自分が自分の中に命を持っているってことが、本当に今でも不思議な気がするの」

梨沙は無意識に少し膨らんだ美帆のお腹を見つめていたようだ。なぜなら美帆は恥ずかしそうに、下腹部を撫でて俯いたのだから。

「あ、ごめんなさい。すごく言い難いことを聞いてしまったのかしら、わたし」

「いいのよ」と直ぐに美帆は明るく言った。

「わたし、もう戻らなくちゃ。おご馳走様でした」

と梨沙が立ち上がりかけると、

「その人とは、別れたままにしておくの？」と美帆が上目遣いに聞いてきた。

梨沙は何を言おうか逡巡していたが、ふいに底知れぬ悲しみに襲われて涙ぐんだ。

「でも、彼、条件を言うんですもの。それはわたしには理解できなくて」

「関係を持った？」とズバリ美帆は聞いた。梨沙はドギマギして立ち尽くす。

「まさか。あの……そう言えばわたし、彼の手を握ったことすらない。身体に触れたことも無いの。馬鹿みたいですね」

「そう」と美帆は少しだけ笑った。

「わたしの場合、二回目に出会った時、思わず抱き合ってしまった。何かが弾けたの。彼を受け入れたくて受け入れたくて、仕方なかった。理性ではなく身体が要求したの」

梨沙は美帆の告白を聞きながら、穰との激しい逢瀬を思い出していた。

「そんな気持ち、ない？」

「あ、そうですね。でもわたし以前、元カレとは直ぐ関係を持ったの……彼とは……」

「聖職者であろうと、それは同じよ。男と女ですもの」

あっけらかんと言う美帆は、やはり子供を孕む一人のオンナの姿だった。

「わたしはまだ駄目。でも」

「でも？」

「抱かれます」と梨沙はキツパリ答えた。「彼の者になりたいし、彼を支配したい。やっぱり一緒になりたいって気持ちは変わらないんですね。動物的かしら、わたし」

「いいえ、それが本当よ」

梨沙はチラッと牧人に抱かれている自分を妄想して、少しだけ頬を染めた。

「じゃあわたし帰ります。色々ありがとうございました。明日香の菩提……吊って下さい」

「いいわよ。修く〜ん！ 修く〜ん！」

美帆の大声に、夫の住職が奥から出てきた。



美帆と住職の修一は、梨沙を山門まで見送った。そして涼やかな瞳を瞬きしながら、ゆっくりと梨沙に頭を下げる。

「この度は、わざわざお越し下さってありがとうございました」

「いいえ。わたしの方こそ、押しかけてしまって」

梨沙も山門の石段で頭を下げた。

「ね、どうか奥様をこれからもお守りして下さい」

「はい、それはもちろん」と修一も答えた。

「それじゃあ」

「又いつか来て下さいね。さっき教えたメアドに、メールでも下さい」

梨沙は黙って頭を下げて、石段を降りて行く。ふと振り返ると、美帆が甘えたように夫の腕に寄りかかっている後姿が見えた。絵になるような若夫婦の姿だ。

ペンション『木陰やど』に戻った梨沙はそこに一泊すると、翌朝早く帰路についた。

案の定、その日休みだった母香里は、戻って来た梨沙を見ると、小言を言い出した。

「何してたのよお。てっきり家出したかと思ったじゃないの！ 変な置手紙なんかするから」

「へー、心配してたんだ」

「当たり前じゃない。たった一人の娘なのに」

「ね、お母さん」と梨沙は、冷蔵庫をゴソゴソ開けている香里の後姿に言いかけた。

「何よ」

振り向きもせず香里は面倒くさそうに問う。

「明日香、ねえ」

「ああ、明日香ちゃんが、どうしたの？」

「死んだの。自殺だって」

香里はパツと振り返った。

「自殺……？」

「そう……自殺しちゃったのよ、明日香。何で何で、もっと早くわたしに何か言ってくれなかったのかしら！ 馬鹿なのよ、明日香ったら」

「そうなの」と香里は冷たいジュースのペットボトルを持ったままボソリと言った。

「きつと苦しんでいたのね……」

「うん」

しばらく母子の会話が途絶えた。

その晩、梨沙は久し振りに自分の机に向かい、ノートパソコンを開けてみた。メールをしようとして、どうでもいい受信メールを見

つめていると、受信トレイのある人の名前が梨沙の心臓を射抜いた。
『橋爪牧人』

それは間違いもなく、牧人からのメール！

マウスを持つ梨沙の手が震える。メールをあけるのが怖い。勇気を振るってあげなければならぬと思う。けれども、どうしてもそれが出来ない。

中身は大した内容ではないかも知れないし、それとももしかすると牧人の私的なメールなのかも知れないが、今の梨沙には決心する何の力も無かった。というよりも、牧人に対する激しい怒りに襲われたのが本当の所だ。

「ああ、どうしよう」

数秒か、あるいは数分の間、梨沙は迷いに迷っていた。クリックしようとして、手が震え、けれども結局削除という場所に矢印を持っていった自分が居る。

―― どうせ大した内容じゃないんだ。どうでもいいことなのよ。教会に出席しろとか……そういうことなのよ……。

あつという間に削除されてしまったメール。その後には、もう何も残っていない。その時、梨沙は猛烈な後悔に襲われて、泣きじゃくった。明日香への、そして牧人への後悔、その両方が、梨沙を怒涛のように涙の海へと流していった。

失ってしまった者は、余りにも大き過ぎ、梨沙を飲み込んで行く……。

夏期講習、ミーティング、他の友達とのミニ旅行、映画等々で夏も過ぎた。今梨沙は再び、戦争のような教壇に立ち、一向に耳を傾けない生意気な女子中学生達に四苦八苦していた。

明日香の母親に電話でお悔やみが遅れたことを詫び、いつか必ず墓参りすることを約束した。けれどもその約束が実現されるのは、まだまだずっと先のことのような気がする……。

そして秋の気配が、台風が幾つか来る度に深くなっていき、それでも梨沙は教会には出席しなかった。いつかS教会と牧人の存在が、自分の脳裏から消えることを願いつつ、淡々と仕事をしていく自分。そして彼らからも忘れ去られていく自分。虚しいが、そんな日々も人生なのかもしれない。

・・・◇・・・◇・・・

そんな時、思いがけなく葉麗から電話が掛かってきた。

「元氣い、宮本さんっ」

葉麗はいつも女らしい。その声も甘ったるいのだ。

「あ、山口さん？」

「どうしてるかって思ってね。ね、もう忘れちゃったの、わたし達のこと？」

「そんなこと無いけど」と梨沙は嘘をついた。「でも、なに？」

「あのねえ、今度ヒュンちゃんが韓国に戻るの。だから、送別会するんだけど、宮本さんも来ない？」

パク・ヒュンジュン……梨沙も好きだった、韓国の好青年がいよいよ帰国するという。ヒュンジュンに対する思いは、もちろん牧人への思慕とは全く違う。けれども、好ましいという感情は確かにあった。

そしてヒュンジュンもまた、梨沙に大しては紳士的な態度を崩さないまでも、幾分好意を抱いていたのかも知れない。

「ヒュンちゃんか……懐かしいな」

思わず、梨沙の口からもその言葉が自然に漏れた。

「でしょ？ 残念よねえ、ヒュンちゃんたら、ずっと日本に居るのだとばかり思ってた。でも、お兄さんがアメリカに転勤になってしまつて、ヒュンちゃんには是非とも戻って欲しいと、両親から懇願されたんだって。仕方ないよねえ、親からそう言われたら」

「そうかも知れない」

「あのね」と急に葉麗が声を落す。「実はね、あっちでお見合いらしきものをするみたい。相手は、ご両親も知っている方のお嬢さんだって。梨花女子大出の才媛で、チェ・ジウに少し似た、結構美人らしいって」

「そうなの」と梨沙は、半分喜び半分少し惜しいような気がして答えた。

「あんた達、あれこれ知っているのね」

「だって、ヒュンちゃんから写真見せてもらったんだもん」

「そうか……」

あの愛すべきヒュンジュンは、母国できっと愛され、そして幸せになるだろう。梨沙には何となく、その姿が見えていた。

「だからさあ、たまには来てよ。今度の日曜日、礼拝の後、教会の地下の大部屋でやるんだって」

「だって……いいのかなあ、わたし。このところ、全然出席して居ないし」

「いいよ。宮本さんが来ると、きっとヒュンちゃん大喜びだよ。ていうか、わたし達も宮本さんに会いたいし」

“会いたい”と言われて、嫌な気はしない。けれども……。

「あの……先生達も出るの？」

「田中先生とあの愛さんとその婚約者も。でも、橋爪先生は関西に出張で、残念ながらその日は居ないの」

「ああ、そうか」

「橋爪先生が居なくて、残念でしょ」

「いや、別に」と梨沙は複雑な心境になって言った。けれども、実際は牧人が居ない方がいいのかも知れない。ヒュンジュンにはやはりお別れを言いたいのだ。そして幸せになって欲しい、と告げたい。

「行こうかな」

「え！？　ほんと！？　来てくれる？」

葉麗の驚きようは、実は梨沙が来ることを期待していなかったと言う事を如実に示していた。

「うん。ヒュンちゃんには色々お世話になってるし……田中先生と愛さんにも、おめでとうを言いたいから」

梨沙のいい訳じみた声が途切れる。

「愛さんは、クリスマスの前、11月の終わり頃に結婚するのよ。バージンロードを田中先生が歩き、司式は橋爪先生だって！　とうとうあのツンデレも、年貢の納め時ね」

「本当ね。愛さんもうとうとう花嫁さんかあ」

この嘆息は事実だった。愛は牧人を愛しており、それとも一生結婚しない人種なのかと信じていた。けれどもそれは違った。愛は一見氷のような外見に似合わず、一人の男を愛していたのだ。

「そうなの。その時も何だか見ものだわ。10数年振りにうちの教会で、ホンモノの信者が結婚するんだから！」

「そう？ 信者以外の人達は、みんなニセモノの教会でするんだものね」

「そう。商業的なウェディング・チャーチでね。あたしは三年。あ、ところでわたし、まだ就職先は決まらないのよ。全く、ここ最近はやっぱりだ」

「葉麗ちゃんは、まだまだ若いんだもの」

「宮本さんは？ 誰かい人居るの？」

「居るわけないじゃん。忙しくて」

「学校の先生とか、居ないのかあ」

「ドラマじゃあるまいし、そうそいい人なんて出来るわけ無いじゃん」

そう答えた梨沙は、一瞬胸が詰った。無視した牧人のメールの身が何か……もう永遠に分からないだろう。

「何時から？ わたし、行くわ」

「1時から。ヒュンちゃん、きっと喜ぶよ」

そう言うと、葉麗はケータイを切った。

牧人が居ない送別会。淋しいがそれでいいのだと、無理やりに梨沙は思い、資料作りにパソコンに向う。けれども心は空っぽのままだった。

梨沙は少し早く来てしまったのかも知れない。半年以上も離れてしまっていたので、教会の門をくぐるのが何だか怖かったが、まだ信者達は余り来ていなかったのが幸いだ。

入口でモタモタしていると、見知らぬ初老の婦人と石田笛子という年配の女性信者が、何やら話し込んでいた。

ふとその二人が、梨沙を目ざとく見つけ、振り返る。

「んま！ 宮本さんじゃないの！？ 本当にお珍しいわ！ 随分久しぶりね」

と石田笛子は大袈裟に手を広げて見せたが、その隣の見知らぬ婦人はただ黙ってどこか温かみのある微笑を浮かべただけだった。

梨沙は反射的に頭を下げた。

「あ、石田さん……お久しぶりです」

「今日、ヒュンジュンさんの送別会があるからなの？ そうよね」

「え？ はい、そうですね……」

梨沙は曖昧に答えると、隣の婦人にも少しだけ頭を下げた。婦人も頭を下げる。誰かに似ているような気がしたが、

「宮本さ～ん！ 来てくれたのお」と叫ぶさやかの懐かしい声に、

梨沙は気を取られてしまった。

さやかは跳ねる様な足取りで梨沙に近寄ると、梨沙をギュッと抱き締めた。

「嬉しいわぁ！ 宮本さん、色々忙しかったのね。でもわたしはあなたがいつか絶対に来るって言っていたのよ。みんな、半信半疑

だったけど、でもわたしの勝ち」

「ええ、あ、はい」と梨沙は戸惑いを隠せない。けれども、さやか
が嬉しそうにしているのを目の当たりにして、自分も少しだが幸福
な気分になった。

奥の部屋では、CS（Ⅱチャースクール）をやっているのだろ
うか。ガヤガヤした音が聞こえて来る。

梨沙がそちらを見ているのを察したのか、年上のさやかは梨沙に
耳打ちした。

「今、ヒュンちゃんの送別会をしているの。泣き出した子供も居て、
案外最近の子供達も同じだよな〜と感じてたところ」

「淋しいってことは、大人も子供も同じ感情なんですね」

「そうね。わたし達も淋しくなるわよね。なにしろ、ヒュンちゃん
が居なくなると、後にはろくな男子しか残って居ないもん。それも
少数」

「あら？　だって、さやかさんにはカレシが居たでしょ」

と訝しげに聞く梨沙に向って、さやかは少し悲しげに俯いた。

「ああ、知らなかったんだあ。わたしね、カレシと別れた。あ……
でも、心配ご無用！　わたしはそんなことじゃめげないから。又新
しいカレシ、探すわ」

さやかは極めてあっさりと言う。

「橋爪先生とか、いいんじゃないですか」

急に梨沙の心にサタンが入ってきたかのように、梨沙はわざとそ
う言った。

「先生はねえ」とさやかは、幾分躊躇した。「誰か好きな人でも居
るのかしら？　失恋したって噂が出ていたぐらいだったし。

でもね、先生、来年四月から新しい教会に赴任よ」

「あ……えっ」

梨沙は言葉が出なかった。

「みーんな居なくなるのね、イケメン達は！」ときやかは朗らかに笑う。例え何があったとしても、失恋しても、さやかはいつものさやかだった。多分その所が、明日香とは違ったのかもしれない……。失った友、明日香の顔がチラと浮かぶ。

「今度は副牧師ではなく、ちゃんとした牧師として」

「一体どちらへ？」

「うん、わたし達まだその場所は知らされてはいないのよ。でも多分……ええっと、関西方面かもって」

「関西……」

梨沙は愕然とし、そして心が空っぽになって行くような気がして血の気を失った。

「どうしたの、宮本さん。やっぱりあなたも淋しいんでしょう。そうよね。田中先生も、次の副牧師や神学生を探しているみたい。やっぱり一人では牧会が無理みたいって」

さやかがそう慰めるように言った背後から、

「宮本さん？」と呼びかける懐かしい声を聞いた。梨沙が振り返ると、ヒュンジュンが立っていた。穏やかで色白の肌の顔立ちと、落ち着いたアーモンド型の瞳。

「ヒュンちゃん!？」

「あ、お久しぶりです」とヒュンジュンはゆっくりと頭を下げた。子供達がヒュンジュンの周りに纏わりついている。梨沙の口元は自然にほころんで行った。

「ヒュンちゃん……戻るんだってねえ」

「来てくれたんですか。ありがとう」

「ね、ね、長い間ご無沙汰だった宮本さんも、ヒュンちゃんには会

いたかったみたいよお」とさやかはおどけて言うと、両手を梨沙の肩に手をやって微笑んだ。

「会いたかったなんて、そんな」とヒュンジュンははにかんだ。

「ほんとよ、会いたかった。会って言いたかったの」

「えー、なんて？」

「わたしも、ありがとう」

ヒュンジュンはじっと梨沙を見つめていたが、ただ微笑み返しただけだった。

オルガンの前奏が始まり、辺りがざわめいて来た。様々な信徒の人達、ほとんどが高齢者だったがぼちぼち集まり始め、牧師カラー（襟）の田中牧師がふと梨沙に目を留めると、早足でチャペルに消え、そして愛が男性と一緒にこちらに近寄った。確かにその男性は、牧人と顔は全然違うものの背格好はよく似ており、バレンタインのあの晩、梨沙が勘違いしたのもうなずける。

けれども梨沙は、あの時を思い出して、棘で刺されたような痛みを胸に感じた。愛は少しだけ微笑むと、目で挨拶して会堂に消えた。

「もうすぐですよ、それじゃ参りましょうか」と石田笛子が見知らぬ婦人を促しつつ言いかける声がした。

「あ、そうですね」

その声は歳よりも若く響く。

「息子さんが居なくて、残念ですわね」

「いいええ。牧人の説教はもういいですよ、聞き飽きてるし」

「そうですか、橋爪さん」

橋爪さん！？ 息子！？

梨沙はビクツとして、その婦人を見た。けれども彼女は、既にチャペルの中に入って行っただけだった。

「ああ、あの方ね、橋爪先生のお母さん。昨日静岡から親戚の家に来たついでに寄ったんだって。でも先生ったら居なかったので、ちょっとガツカリしているみたいよ」

とさやかが囁く声は、まるで彼方からのように梨沙には感じる。

「品のいい人ね、余り似て無いけど」とさやはサラリと言った。

ヒュンジュンの送別会は、滞りなく終わった。

実は礼拝の後、梨沙は牧人の母、橋爪明子に何か言いかけたと思ったものの、結局勇気が無かった。

明子は聡明そうな女性に見えたが、慌しく静岡に戻って行った。やはりクリスチャンだと言う。牧人が牧師になったのは多分この母親の影響なのかもしれないが、明子は他の信徒達にも決して自分のせいとは告げなかったらしい。

「それは多分神様のご召命なのでしょう」と明子は控えめに答えただけだ。

そして彼女は帰る間に、チラッと梨沙を見つめて軽く頭を下げた。梨沙も又、どぎまぎしながらも、礼を返した。何か心に引かかる……。

ヒュンジュンは、終わりの挨拶で少しだけ涙ぐんだ。いい人だった、と梨沙は思う。ヒュンジュンの純粋な思いに、心慰められたことは数知れない。それをヒュンジュンは知っているのだろうか？

ヒュンジュンの別れの挨拶に、皆もシーンとなった。

「僕は……ここで経験した素晴らしい出来事の数々を、決して忘れることはありません。特に、田中先生には日本に来た初めの頃、色々お世話になり、泊めて頂いた恩は忘れません」と、ヒュンジュンは綺麗な日本語で送辞を述べる。

これを聞くと、田中牧師はうつむいた。多分涙を見せたくないのだ、と梨沙は思った。

「あ、でも、韓国は近いです。ソウルは日帰りでも出来ますよ。韓国に来る時には、是非僕にご連絡下さい。あちこちガイドしますから」

「又会おうね、ヒョンちゃん」と葉麗も又涙声で言った。

「はい、又」とヒュンジュンは泣き笑いしながら答える。「又会いましょう、山口さん」

「ヒョンさん……ありがと」と突然端の方から愛が話し出した。

「え?」

「ヒョンさんが居るだけで、ここが明るく和やかになっていた。それを忘れないわよ、わたしも父も」

「ヒョン君」と田中牧師は言うのと、黙ったままヒュンジュンの手を握った。

「やだなく、最後じゃあるまいし。韓国は隣の国じゃないですか」

「そうだな」と田中牧師も相槌を打つ。「我々は、キリストの再臨の時には、全員復活の主に預かり、そして又出会う。例え召されようとも……」

「父さんっ、ここで説教はやめてよ」と愛が苦笑いしながら遮った。

やがてお開きになると、一人二人と去って行き、梨沙とさやかだけが、残った皿や湯のみなどを洗っていた。愛がそっと近寄る。

「宮本さん……よく来てくれたわね」

珍しく愛が楚々と言うので、梨沙は面食らった。結婚間近になると、こうも女は変わるのだろうか。

「あ、はい。随分ご無沙汰してしまって……どうも」

「あなたもきつと色々あったんでしょ。荒川さんにも、辛いことがあったみたいだし」

「わたし……親友を自殺で失いました」

梨沙の衝撃的な告白に、二人は濡れたタオルを持ったまま、静ま

った。

「あ、そうだったの」と愛は小声で言った。「それは、大変だったでしょうね」

「でも、わたし随分後で知ったんです。何も知らず、教師の仕事で忙しくしていて。ほんと、とても親友とは言えませんね」

愛とさやかはしばらく黙っていた。けれども、思いがけなく愛が、
「他人の苦悩は、誰にも分からないのよ。神様だけを除いてはね」と言い始めたのだった。

「そうかも知れませんね」

「自分では懸命にやっても、でも失敗ばかり。けれども結局は何かが見守っている……そういう風に信じないと、この人生生きてはいけないわよね」

「愛さん」と梨沙は向き直った。「おめでとうございます。本当に「ありがとうございます」と愛は率直に答えた。

「でも、田中先生と奥様を説得なさるの、大変だったでしょう？
相手はノン・クリスチャン（＝非キリスト教徒）だし」とさやかが中に入る。「ですよね？」

「ええ、最初はね。でも途中から、橋爪先生が加勢してくれたの。父を説得したのよ。条件を付けては良くないって。彼は確かにクリスチャンじゃないけど、でも理解だけはあるから。それに、わたし自身を……受け入れてくれてる」

愛の頬がポツと染まる。

けれども梨沙はそれを聞いて、複雑な気分陥った。牧人は自分には条件を突きつけたのだ。それなのに、愛には助け舟を出した。矛盾しているではないか……。

「彼と橋爪先生は、同じマンションなの。先生にしょっちゅうおか

ずを運んでいるんで、最初は彼、わたしと先生の仲を勘違いしていたみたい。

けれども、ある晩、雨が降り出して、仕事から戻って来た彼が傘を差し出した。それが

きっかけ。彼は長い間、誤解していたのよ。でも秘かにわたしを見ていたのね。考えたら、

橋爪先生がキューピットみたいな者なのかなあ」

「ふあゝ、ロマンチックううう」とさやかが両手を合わせた。「まるでドラマ！」

「馬鹿ねえ」と愛はクスリと笑った。「荒川さんも、又いい人見つけないさいよっ」

「はいっ、見つけまゝす！」

「宮本さんは？ いい人見つかった？」と愛の矛先は、今度は梨沙に向う。

「え、わたし？ いいえ、まだ」

「学校にもいい人居ないんですって！」とさやかは屈託無く言った。

「でもその内に、きっと出てくるわ。宮本さん、魅力的だもん。ね、わたし達の結婚式にもきっと来てね」

「あ、はい」と梨沙はやっとそう言ったが、心半分と言うところだった。

「宮本さん。終わったら、一緒に帰りますか？」

と突然背後でヒュンジュンの声がしたので、三人はハッとして振り向いた。どうやらヒュ

ンジュンは、奥で田中牧師と個人的に別れの挨拶をしていたようだ。

「そうよお、駅まで一緒なんでしょ」とさやかが梨沙を突く。

「でも、荒川さんは……」

「わたしは愛さんと、まだここに居て」

「一緒にワインを飲むの！」と愛も楽しそうに相槌を打った。

「だからあ、最後だから一緒に帰んなさいよ」とさやかは梨沙の背中を押す。

「じゃあ、この辺で」と梨沙も手を止め、ヒュンジュンと共に玄関まで行った。



梨沙とヒュンジュンは、しばらく黙ったまま駅への道をゆつくりと歩いていた。

「あゝあ、この道を通るのも、もう最後かあ」とやっとヒュンジュンが言い始める。

「だって、ソウルは近いってさっき言っていたじゃないですか。又いつか日本に来て下さい。

い。奥様と一緒にね」

「うん」とだけヒュンジュンは答えた。

「ねえ、宮本さん」

「え？」

「橋爪先生とは、結婚しないんですか」

梨沙は立ち止まった。

「何で、そんなことを」

「あゝゝあ、日本人って、ちょっとじれったいなあ。もっと情熱的な告白をしなければ。

僕はね、知っていたんです。と言うか、勘付いていた、と言った方がいいのかな？」

「何を……」

「先生が君を見つめる目。あれは本物でした。そして君も又、先生の気持ち、知っていた

んじゃないのかな？ 僕にはそう感じた。だから僕は、君が好きだ

ったけど、諦めたんです。国際結婚が大変とかそういう事じゃなく……僕は、君と先生が幸せになって欲しかったから」

梨沙は何も答えられず、ただ俯いただけだった。

「本当に愛する人は、この世ではなかなか出会えないものなんです。だから、自分の気

持ちに正直で居て欲しいな、宮本さんには」

「ヒュンちゃん……」

梨沙は今初めて、もう一つの静かなる愛を知ったのだった。もう遅いけれど……。

ヒュンジュンと別れ一人電車に乗ると、ひしひしと孤独が募って行く……。

梨沙は窓から流れる夕暮れの景色をぼんやりと眺めながら、過ぎ去った過去を思い起こしていた。

確かに牧人を今でも忘れられず、だからこそそれで苦しんでいるのは確かで、ヒュンジュンが言った通りだ。けれども、やはり心の隅では牧人の言動が許せないところがある。それは、無理して隠蔽できるものではない。それは常に梨沙を苦しめていたのだから。

再び教会に出席する気は無かった。けれども愛から招待されれば、愛の結婚式には出席するかも知れない。自己矛盾だとは思いますが、梨沙には何も決められないのだ。それに朴訥でいい人のように見えるのだ、愛の相手は。

— 愛さん、変わった……。いい人、見つけちゃって。

梨沙はすっかり伸びきった髪をいじった。ガーリーにしていたヘアは、忙しさにかまけてパーマも出来ず、すっかりもとのままのストレートヘアになっていた。いや、お洒落をすることすら忘れていたようだ。今の自分は、もう老女のように感じる。まだ世間的には若い女なのに、そう自覚することなど最近とんとなかった。

梨沙は苦笑した。

明日は中間テスト後の休みだ。梨沙は英語クラブの副顧問でもあったが、無理して出席する必要は無い日だから、久し振りにぐっすり寝ようと思っていた。

家に戻ったが、まだ香里は帰宅していなかった。最近母香里の様子が少し変なのに気づいていたが、なぜか今日はピンと来るものがある。

梨沙は香里の寝室のふすまを開けてみた。余り香里の寝室に入ったことなど無いが、今晚の梨沙は妙に冴え冴えとしていた。

年甲斐も無く派手なハート柄のベッドスプレッドの掛かっているベッドに座ってぼんやりしていたが、なぜか視線が窓際のドレッサーに向く。散らかった化粧品の中に、白い物が無雑作に置いてあったからだ。

梨沙は立ち上がると、その白い紙片を手にした。

『ホストクラブ シャレード』と綺麗な文字で印刷されてある名刺。

「ホストクラブ!? そんな……」

紙片を手には、梨沙は呆然とする。裏返すと、須賀リユージという名前があった。多分、源氏名なのだろうか? それとも、本名?

そういう場所には全く疎い梨沙には見当もつかなかったが、香里がそこに、いやそのホストに嵌っているのだけは、瞬時に理解した。今、刹那的にしか生きられない母親が、憎らしくもある。その思いが、この頃香里に対して段々募っていた実体だった。

「バカ。バカバカっ! お母さんったら」

梨沙の憎悪が高まる直前、ケータイが鳴った。

「はい、もしもし」とナンバーも確かめずに、梨沙はぞんざいな口調で出た。

「あ……梨沙?」

少しくぐもったハスキーな声、それは忘却の彼方にあると思っていたが、けれども結局は忘れていなかった声だった。

「みのる穰？」

「ああ、そう。元気？」

梨沙は一瞬黙り込む。

「なによ、今更……」

「ああ、ごめん。驚かしてしまって」

多田穰の声は以前と同じく優しく甘い、けれどもどこことなく相手を見透かしたような声音だった。

「あの……何でしょうか」

「そんなに他人行儀に言わないでくれよ」

「だって……もう他人じゃん」

「仕事、忙しい？」

再び、梨沙は黙り込んだ。多田に対する思慕は、今ではほとんど消えかけていることに気付いたが、けれども多田の声を聞いていると、官能に火がついたようになってしまふのだ。いけない、と梨沙は戒めた。

「もう切るわよ」

「なあ、明日でも会えない？」

「何言ってるのよ！ もう二年近く会ってもいないのに。何考えてんのよ」

「君が欲しい」

「何ですって！？ まじ言ってるの？」

バカにしないで、と言おうとして、梨沙はハッと口元に手をやった。

「君が欲しい」というあからさまな要求をされたことが、最近あつ

ただらうか？ 牧人然り、そしてヒュンジュンも、二人とも余りにも控えめで、こういう端的で乱暴な要求はするはずもなかった。けれども、その言葉はまるで魔術かサタンの誘いのように、梨沙を捕らえて離さない。

「彼女が居るのに……ずるいじゃん」

「ああ、カノジョ、ちよっとお堅くってね」

「わたし、そんなに簡単に……売り物じゃないんだから」

こう言ったものの、もう抗えない気がした。罠にかかった兎のように、そして蜘蛛の糸にからめとられた蝶々のように、もう抵抗できない魔法の言葉……。

それは数年に渡る肉体の交わりがあったからだ。それは卑猥さを至福と陶酔とに変えてしまう、どうしようもない人間的な欲求だった。

「分かった。明日はオフなの」

「いつものシティホテルでいいよね。休憩ってことで」

「何時？」

「一時半。ロビーで」

「うん、いいよ」

「良かった！ 久し振りだなく、梨沙と会うのは。どんな先生になっ
っているんだろ」

「ただの冴えない教師よ」

「じゃ」

切れたケータイをいつまでも握り締めている梨沙。そして窓ガラスの向こうの、果てしない暗闇を覗きながらつぶやく。

「わたしも……母と同じなんだわ」

以前、穰と逢瀬を重ねていたシティホテルは、あの時のままだった。昔の思い出がフラッシュバックしてきて、梨沙の身は堅くなつて行く。

一時半と言っていたのに、穰はなかなかやって来なかった。じらしているのか、それとも昨日は単に穰の思い付きだったのか、あるいは何かあったのか分からないが、一階ロビー奥の喫茶店に座っていた梨沙はなぜか不安になった。

今でも穰を愛しているのかどうか分からない……。誘われて、ちように空虚な自分が居たからその誘いに乗っただけかも知れないし、身体が誰かを欲していたのかも知れない。どちらにせよ、ここまで来てしまったのは悔しいが事実なのだ。

座っている窓から外を眺めると、秋の雨が降り出したのが分かる。まだ秋と言ってもそれ程寒くは無く、何となくぬるい温度、湿った感じがする。けれども、紅葉は始まっているのか、少しだけ落ち葉が散っている街路には人々が早足で歩いて行く。

梨沙はそつと頬を窓ガラスに押し付けた。

「梨沙」と呼ぶ声で我に返った。目の前には、仕立てのいい背広を着た穰が居た。

「久しぶりだね。梨沙、来ていないのかと思ったけど」

「その格好。仕事？」

「まあね。あるはずの会議、実は無くなったんだ。だから午後はずっといいよ。さ、行こ」

穰は如何にも忙しいビジネスマンらしく、梨沙を誘った。右手はダレスバッグ、左手には既にルームキーがある。

「もう予約しちゃったよ。向こうの方から、梨沙の存在を確かめたから」

と穰は如才なくキイを見せ付けた。

梨沙はまるで魔法に掛かったように、じっと穰に付いて行った。

☆・・・★・・・★★★・・・★・・・☆

1010号室。その部屋に入った途端、穰が背後から梨沙を抱き締めた。余りにも急なので、何も構えていなかった梨沙はビクツとして身体を硬直させてしまう。

「やめて」

「どうして？ 梨沙は相変わらず綺麗だなくとさつき遠くから梨沙を見たとき、そう思った。梨沙はちっとも変わらないんだね。もうちょっと先生っぽくなっていたかな、と思ったけど。」

一番最初に、梨沙と駅で会って以来、変わってない（＊短編「星降る夜の奇跡」参照）

そうして穰は手馴れたように、梨沙の髪をいじる。

「やっぱりずっとこのストレートヘアなんだ……」

「い、いえ、ちょっと……」

ふと梨沙は、以前のガーリーヘアを思い出していた。そして同時に牧人の顔、ヒュンジュンの顔を……。

けれども穰はお構いなく、梨沙の髪に自分の顎を載せる。

「うーん、いい匂いだ。昔と同じシャンプーなんだ……」

「もうやめてよ」と言いざま、梨沙は振り返った。「昔のことはもういいでしょ」

「そうだな」と穰は言い、腕を解いた。

「じゃシャワーでも浴びてきて」

「なぜそんなに急ぐの」

「だって僕は、今じゃ大学生じゃないものな。仕事があるし、今日も残業がある。君だってもう教師だ。それに……昔なじみだろ？」

梨沙はふと自分が売春婦にでもなったような気がした。「来なければよかった」そういう後悔が、梨沙をたまらなくする。

けれども素早くそれを察したのか、穰は両手で梨沙を抱き締め、ドッと大型のダブルベッドに押し倒した。

「急がせてごめん、梨沙」と穰は以前のように優しく言うと、梨沙の髪を撫で続けた。

「いいのよ」と梨沙もその気になってしまう。穰は女性にかけては、凄腕だった。それは梨沙にも分かっていることだ。

穰の愛撫は、直ぐに梨沙を別人にしてしまうのだった。別の梨沙……本能のままに官能に溺れて行くもう一人の自分が居る。

「じゃシャワーするから」

立ち上がると、梨沙はシャワーをしに浴室に入る。上等なコロンやシャンプー剤が置いてある、清潔なシティホテルだ。

けれども梨沙は予期していなかった。まだ半分ほどしかシャワーをしていないのに、穰はドアを開け入って来るなり、突然梨沙を乱暴に抱き締めたのだった。穰は既に何もかも脱ぎ捨てていた。

「濡れちゃうじゃない！」

「いいよ、濡れても。早く、梨沙が欲しいんだからさ」

半濡れ状態の梨沙はベッドに押し倒され、そしてのしかかってくる穰の瞳が直ぐ側にあった。

その時急に、梨沙は何かを感じた。罪……罪の意識だ。それでも

つと決定的なことを確信したのだ。いまや、穰を全然愛していないと……。

「穰……だめ……」

「だめ？　なんだよお、今更。何言っただよ。こんな姿になってるのにさあ」

「でも、だめなの！　わたし……」

「何だよ、バカなこと言っただよ！　梨沙のハダカ、綺麗だよ」

穰は否応無く梨沙の口を奪った。息が出来ないほど強く長く。これは愛の営みなのか？　それとも……？

心はここには無いと言うのに。そして求めている相手は、穰ではなくここには居ない誰かなのだと、梨沙は強烈に感じ、そしてつぶやく。

「せ・ん・せ・い……」

「なんだ、梨沙。いい人、いるのかあ」

梨沙の瞳から涙がこぼれ落ちた。快樂の中だと言うのに、心は冷え切っていた。そして心底求めている人を、梨沙はやはり今こそ知ったのだ。

― 先生……わたし、ニセでもいい。先生の為なら、洗礼しても何をしてでもいいんです。先生が好きなの。先生にだけ、抱かれない、それだけなんです……。どんな犠牲でも払いたい。だから……もう一度、わたしの方を向いて！　何かを信じさせて！

梨沙は今、マグダラのマリアだった。

穰より先にシティホテルから出た梨沙は、まるで何かから逃げるように通りに出た。

事が終わった後、穰は汗ばんだ身体で、「梨沙は相変わらずいいよな」と言ってくれたのだ。けれどもその誉め言葉は、梨沙の心に棘の様に突き刺さる。歓びなど、もう何も無かった。

既に梨沙は現実に戻り、いそいそと自分の脱ぎ捨てられた服を着ていた。

「もう帰るの？ 何か夕飯でも食べない？」

と穰はまだ裸のまま、そう言ったが、梨沙はトートバッグの中身から何か落ちていないか、そのことばかり気になっていた。

「なに？」

「夕飯でも」

「いいいいの、わたしもう帰るから」

「何だか余韻が無いよな」

「余韻なんて！ そんなもの、あるわけ無いでしょ。それに、穰の今のカノジョに何だか悪い気がするし」

「ねえ、梨沙」と穰は甘えたように擦り寄ってきた。「又、いつか会えないかな」

「なにバカなことやってんのよ！」と叫んだ梨沙は、初めて穰を軽蔑した。

「婚約したカノジョが居るって言うのに。それにわたし、バカだった。こんなことして……何だか恥ずかしい」

梨沙はやっとバッグを持った。今までの梨沙は、どこかで穰に未

練を抱いていたのかも知れない。穰は理想的なカレシだったし、理想的な夫にもなれる男だと思ってたのだが、けれども一番大切な何かを失っていた男でもあったと言うことに、今気付いたのだ。

「ねえ、穰」と梨沙は扉の前で振り返りながら言った。

「何だよ」

「もうわたし達、二度と会うのやめましょ。もうわたしを誘わないで。わたしも、穰のこと忘れようと努力する」

「離れられやしないよ、梨沙」

と穰は自信たっぷりで、鼻で嗤った。

「いいえ、離れられる!」

梨沙はキッパリ言った。それは穰との決別の言葉だった。

「そうか、梨沙にはいい人が居るんだな。ま、そうだよな。梨沙のカラダって綺麗だし、スタイルもいいし、男なら惹かれて当然かもしれないけど」

その言葉はどこか投げやりで、どこか蔑視しているような口振りで。

「わたし、まだその人とは身体の関係なんて何も無いもの」

梨沙はそう言い捨てた。

「じゃ、穰、元気でね。お幸せに。祈っているわ」

思わず出た“祈り”……。けれどもそれはどこか偽善っぽい。

「梨沙……」

何か言いかけた穰を無視し、梨沙は重い扉を開けて、一切振り向かず足早に出て行った。途中のコーナーでホテルマンとぶつかりかけたが、梨沙は一言の詫びすら言えず、エレベーター・ホールの方に小走りに向った。

外は小雨。失意にある女優が、雨の中とぼとぼと歩くシーンが何かの映画にあったが、そんなことは虚構だと思っていた。

けれども今、梨沙は小雨の中、傘も差さず闇雲に歩いている。

自分が穢れている気がした。昔の人は、穢れを落とす為に、護摩を焚いたり滝にうたれたり、或いは冷たい井戸水を被ったりした。そうして我が身の穢れを、そのような禊みそぎによって振り払おうと念じたのだ。

今梨沙は、古いにしえの人のように、自分の穢れを祓はらいたいと、そのことばかりを祈っていたのだ。

ふと、以前教会のCSで見たある光景が浮かぶ……。

それは遙か遠くのヨルダン川。そのせせらぎの音が聞こえそうな澄んだ水面に、古代の洗礼と同じように、人々が水面下に沈み、そして再び顔を出すシーンだ。

洗礼を終えた人々は皆びしょ濡れで、衣装が身体に張り付いていたが、その清らかな水によって、今までの罪が洗い流されたように、みんな穏やかな面おもてだった。

― わたしもああいう洗礼ならやりたいな。

その時、梨沙は素朴にそう感じたのだ。けれども気恥ずかしくて誰にも告げずにいた。

プロテスタントの儀式では、洗礼とは言っても、一部の派を除いては、牧師が頭の上に数滴水を垂らすだけだ。確かに水は冷たいかもしれないが、全身から罪が清められたという感覚は余り無いかもしれない。

洗礼とは、罪の悔い改めであり、今までの罪や穢れを落とすこと

……。梨沙はその瞬間、まるで稲妻のようにそれを理解した。そして自分の弱さを知ること、知った上でけれども新しく生きること。自分よりも遥かに上の誰かが、自分の運命を司っていると言う感覚。それは目には見えないが、霊によって気付かされるのかもしれない。そして最後には、自分の努力ではなく、素直に誰かに委ねるのだ。そう思うと、肩の力がふっと抜けて行くような感覚がやって来て、それが今まで肩肘張って精一杯生きてきた梨沙の心を和ませる。そしてその側には、牧人が居て……。

ああ、そんな至福が来たら……。でも、無理なのね。永遠に失ってしまったものなんだ……。自ら捨ててしまったんだから！

——◇・・◇——

家に戻った梨沙は、ほぼ無意識に近い状態でパソコンの前に座り、六角牧師に出す長いメールを書き、そして送った。

誰かに頼りたい、誰かに言いたい。そしてすがりたい。それは田中牧師ではなく、ここから遠くの六角牧師しか居なかった。

《六角牧師からのメール》

宮本梨沙様

貴方の長い、又正直な気持ちを吐露されたメール、拝見致しました。それは又、悔い改めのお心とも言えるのでしょうか。

私の返答が、貴方の気持ちを幾らかでも慰めて頂けるのならば、と思い、ここに書いています次第です。

昨今はメールなどと言う、昔では考えられなかった速さの伝達力を持ったツールがあり、直ぐにご返事できるのをありがたいと思います。が一方では、少しの間があつた方がいいのかな、と古い私などはそう思うこともあります。

早速書きますが、宮本さん、貴方は橋爪君を誤解しておられます。橋爪君の本心を知ったなら、貴方はもっと早く苦悩から解放されたでしょう。

又、橋爪君からのメールを削除したと書いておられましたが、その内容はどうであつたにせよ、橋爪君が貴方のことをどう思っていたか、それは彼自身から直接伺いました。

率直に言えば、彼は貴方を心底愛しておられました。そしてメールの返事が無いことで、貴方から嫌われた、愛されていないのだ、と彼もまた誤解し、その嘆きと後悔を私のような者に述べたのです。この間関西に出張してきた時、彼はわたしの元に寄り、自分が犯してしまった浅はかな言動をいたく反省しておりました。

「洗礼を受けなければ、伴侶として値しない」と言う趣旨を、彼は貴方に述べたそうですね。けれどもその直後、彼はその言葉の持つ残酷さ、軽薄さを恥じ、貴方に謝るつもりだったのです。

「例え洗礼を受けようが受けまいが、そんなことはどうでもよかったです」と彼は言いました。私もまた、

「洗礼を受ける受けないは、君達が結ばれた後に熟慮すればいいことで、それは人間ではなく神そのものが決めて下さるのだよ」と言いました。

彼は黙り込み、それから「その通りですね。僕は臆病者でした」と告白したのです。

「もう二度も失敗した苦い愛の経験から、すっかり腰が引けていたのです。再び苦しみたくはないと、目を背けようとした。けれどもやはり、彼女（貴方のことですよ、宮本さん）を愛している自分が居て、彼女が自分の側に添ってくれないかなという儂い望みを抱いていたのに、結局自分で潰してしまったのだ」と。

そして又、

「彼女を深く傷つけてしまった。その罪は重い」とも。そして結局彼は貴方に、自分の本当の気持ちを伝えたくてメールしたのです。けれども何の返事も無く、貴方も二度と教会には姿を見せず、それは無駄だった、と。

「僕は牧師としても、恋人としても失格なのかも知れません」と彼は言いました。「彼女以上の人は、もう二度と出てこないでしょうね」

けれども先ほどの貴方からのメールを拝見しまして、お互いがお互いを誤解していたのだ、と分かり、私自身もホッとしているのです。

貴方は彼をかくも深く愛し、そして彼もまた貴方を愛している。その事が明白になって、私もこんなに嬉しいことはありません。

又その前に、一度貴方に知らせておきたい事があるのです。それは貴方も又知りたいだろうし、知らなければならぬ出来事です。以前貴方が聞いたがっていた、二度目の恋愛事件。今の人は、それをコイバナと言うらしいですが。

今の教会の前、橋爪君はさる別の教会で、伝道師をしていました。その時、オルガンを弾いていた見目麗しい乙女（この表現も陳腐ですが、お許し下さい）と、いい仲になりました。それは他の信者から見ても微笑ましい、お似合いのカップルに見えたのです。

けれども彼女は信者ではなく、求道者（＊洗礼する前の段階の人）でした。彼を愛していたらしい彼女は、彼の為に洗礼を受けようとしたのです。

けれども、そこには両親という巨大な壁が立ちはだかつていました。彼女は深窓の令嬢で、両親は大企業の常務という立場、そして伝統的な仏教徒でした。そして彼女は、その壁には逆らえなかったのです。そして又、“牧師の妻”という難しい立場の人生を送ることを、最終的に拒否したのです。

彼らには、キリスト教、いやもっと広義に言うと、宗教に対する大いなる誤解があったと見えます。彼らは、十把一絡げに“キリスト教”は一つのものとしてしか認めませんでした。彼らにとって、プロテスタントもカトリックも聖公会もエホバさんも、全てがゴチャゴチャになり、“いかがわしい宗教”としか見えなかった。

彼らは、一般の人達の様に、「天使と悪魔」という単純な構図しか、宗教に見出せなかったのです。

ですから、牧師は彼らの敵でした。実際は、仏教のお坊さんと同じ職種であるにも係らず、無知が彼らを支配し、そのお嬢さんとの仲を裂きました。その彼女も又、先ほども書きましたが、親達には

逆らえず、極めて希薄な宗教心しかもって居なかったことが暴露されたのです。

娘を誘惑した言うことで糾弾された橋爪君は、失意の内に今の教会に逃げた、と言っているいかも知れません。世の中には、数々の誤解や誤認の類が横行しておりますが、その犠牲になったと言ってもいいでしょう。

ただムードだけで信者になることは出来ません。その覚悟が要ると言うことを、彼は身をもって知ったわけです。妙な話ですが、今でも偏見や差別はあるのです。それは見えない差別ですが、確実にあるのですよ。

ミッシェン系の学校に行っておきながら、その中身は知ろうとはしないし、その精神を学ぶ気も無く、又学校の方もそれについては諦めてきっている。今の日本人の宗教心の希薄さ、軽薄さを表していると言っているのかもしれない。

彼が、貴方の洗礼にこだわっていたのは、そういう背景もあるのでしょう。彼はやはり勇気がなかったし、彼のやり方は良くなかったかもしれない。けれども人間は完璧では無い。そして愛というものは、そのような弱さ脆さをも超えるものであります。

そのような愛は、男女の愛と同じように、崇高なものであると私は信じます。

さあ、貴方がこれからどう進んで行くか、それは私には分かりません。けれども、本当に愛しているのなら、彼を赦すことはできないでしょうか？ それとも、このまま貴方達は別れたほうがいいのでしょうか？

宮本さん、それを決めるのは今度は神様ではなく、貴方なのです。そして受け入れるのは、橋爪君なのです。

どうか、あなた達の上に、真の平安と和解があるように、私は遠くから祈っております。

章

六角

梨沙は泣いた。今までにこれほど涙を流したことがあっただろうか、という程の涙を流した。組んだ両腕の上で梨沙は顔を伏せ、泣きじゃくった。それは牧人が自分を愛していたという喜びの涙でもあり、彼を拒んでしまったという後悔の涙でもあり、その他に言いがたい“何か”の涙でもあった。

六角牧師は、まだ遅くは無いというメッセージをくれたが、けれどももう手遅れなのでは無いだろうか、と梨沙は思う。そう感じた梨沙は思わず身震いした。

その反面、六角牧師が同じような文面を、牧人にも送っているかもしれない、という儚い望みもあった。そのどちらか分からないながら、梨沙にはそれを確かめるのが怖くなり、ガバツと顔を上げたのだった。

外は又しても雨……そして、母香里は今晚も遅い。

梨沙はふと、『ホストクラブ シャレード』の須賀リユージという名前を思い出していた。50歳近い香里だが、まだ女なのだと梨沙は痛烈に感じた。恋人豊岡という中年男を亡くして以来、もう恋はしないと断っていたのに、それは嘘だったのだろうか？ それとも、若いホストに、寄る辺無い身を任せてしまったのだろうか……。

まだ女の残り香がある内に、男に身体をゆるしてしまったのかも知れない。けれども今の梨沙には、香里の行動が半分は理解できる反面、残り半分はどうしても不潔な気がした。もういい年なのにも係らず、多分騙されているのを知っているのに、どうして、という疑問は払拭できない。

けれども又、もうどうでもいいような気がした。それよりも、これから自分がどうしたらいいのか、それが分からなかったのだ。どの道を選んでいいのか、どの方向に進んでいいのか、それが見えてこない。

明後日は日曜日。教会なのだが、出席する勇氣はまだ無かった。限りなく牧人が愛しく、そして逢いたいののに、でも今すぐ逢ってはいけないような気がしたし、再会するのが怖かった。どうしていいのか分からない。

六角牧師は、それを選ぶのは君だ、とメールで言っていた。そしてそれは確かにその通りなのだ。けれども、それを実行するのは、又違った勇氣が要る。

梨紗はパタンとノート・パソコンを閉じた。そして遅く帰宅する香里を待たずに、床に入った。自分のベッドが欲しい。急にそんな気がする。けれども疲れた身体は、直ぐに眠りを欲しかったのだった。

・・・◇――◇・・・

自分では処しきれなかった解決策は、向こうからやってきた。疲れた身を家に運んだある晩、梨紗は郵便受けに、艶かしいピンクの封筒を見つけた。田中愛からの、結婚招待状だった。11月末の土曜日午後から、自らの教会で例の人と結婚式を挙げるという。連名の幸せそうな招待状の横に、自筆で愛の金釘流の文字があった。

『絶対に出席してね。待っています』

田中愛』

司式は牧人だった。この日は、田中牧師はあくまでも花嫁の父に

甘んじるのだろう。相手は、ノン・クリスチャンだが、もう父として田中牧師はそのことに対しては諦めているらしい。

出席と欠席の欄があり、梨紗は知らず内に微笑みながら、出席に丸をつけようとする。ふと躊躇いが、その手を止めたが、これもまた“神のお導き”のような気がした。牧人に会えるようにと、人知を超えた何かが働いているのかも知れない……と、ふと思うのは今までには無かった感覚だ。

梨紗が出席に丸をした時、カタンという音で香里が帰宅したのが分かった。けれどもドサツという別の音もしたので、梨紗は立ち上がって玄関に向った。

玄関で、香里がいぎた無く倒れこんでいた。酔っているのか意識が少し朦朧とし、片手を勝手口に突いて、何とか立とうとしているのだ。

「どうしたのよ、一体!？」

そう叫ぶと、梨紗は香里に近寄って、立ち上がらせようとした。アルコールの臭いと共に、気に入らない男性用の香水がプンプン臭う。梨紗の職場では、絶対に嗅げないような匂いだ。

「あっ、り・さ〜。いいじゃん、明日は休み出し〜」

香里はフラフラと立ち上がった。化粧が崩れ、アイラインがぼやけている。横に投げ捨てられたブランドのバッグの口が外れ、そこから万札が何枚かはみ出していた。

「そんなことじゃないよ! 最近、お母さんって変だよ。いつつも遅いし」

「いいじゃないの、あたし、大人でしょ」

「そのお金は?」

「ああ、これ? ちよっと今日かなり使っちゃってね……だから、さっきコンビニのATMから現金下ろしちゃった。あはははは」

「リ्यूジって人の為に、なの？」

途端に沈黙が香里を包んだようだった。

「なんで知ってんのよ、あんた」

その声はもう酔ってはいない。

「やっぱり！」と梨紗は吐き捨てた。「ホストなのねっ」

「ふん」と香里は鼻で嗤った。「あんた、あたしを軽蔑してるんだ」

「軽蔑とかじゃない、なんか……情けないのよ」

「あたしが情けないって!？」

「ええ、そうよ」と梨紗も怒鳴り返す。「わたし、ホストに貢いでいるような中年女……お母さんとは思いたくないっ!! お金だつて、うちはそんなに無いんだよ」

「お金が無いことぐらい知ってるわよ」と香里はわめいた。

「でも、人間っていつ死ぬか分からないじゃない!？ その時にお金なんか持つてはいけないわよ! あんたの信じる宗教なんて、あたしを救ってくれるの? あたしの淋しさとか、埋めてくれるの!？」

違うでしょ? なら、リ्यूジの方がまし」

「騙されてるじゃんか!」

「騙されててもいいの! 偽りの愛でもいいの! 身体だけ貪られててもいいの! あたしは、あたしはね、ただ、ただ……」

「ただ? なによ?」

「誰かを愛していたかったの。お金だけの偽りの愛でもよかった。何かを信じたかったのよ!!」

まるで絶叫のような母親の叫びに、梨紗は引いた。それだけ香里は孤独の中に居たのだということに気付いたのだ。けれども……。

「あのね、お母さんっ! わたしだって、誰かを愛したいわよ!」

それに愛されたいわよ！ わたしだって……」

急に溢れ出た嗚咽で、梨紗は息が詰まりそうになった。そして梨紗は香里を突き飛ばすと、自室に戻り畳を両手で激しく打ち続けていたのだった……。

鐘が鳴り、美麗なステンドグラスに白亜のチャペルでの永遠の誓い……。けれどもそのような結婚式が著しい商業主義に彩られているということは、今や梨紗には分かっていた。そんな、絵に描いたような教会など、この世には存在しない。

けれども一方では、花嫁達は結婚に対して、かくあれかし、という夢想を抱きつつ結婚するものだ。それは永遠の愛、というものに対する、“憧れの象徴”なのかも知れないが。“永遠の愛”がこの世に存在し辛いほど、人間はそのような形に執着してしまうのだろう。

梨紗は早めに家を出て、結婚式に向った。

この間の醜い大喧嘩以来、梨紗と母香里との仲は決定的に悪くなっていた。けれども、日々は過ぎ、現実的には母子は食わねばならない。二人は共に仕事に逃げ込み、テストとも重なって、梨紗は生徒達の対応に追われていた。

この二学期にも、何人かの生徒達は授業料を滞納していたのだ。それについても、話し合わなければならぬこの土曜日だったが、梨紗はかなり無理を言って、わざわざ出向いた。

それは田中愛の為ではなく、自分の為でもあった。そして、抑えられない牧人への思いからでもある。

今梨紗は、牧人に会いたいという切なる思いをもう隠すことが出来なかった。けれども教会に近づくにつれ、だんだんと足が重くなる。しまいには、もう戻ろうかとさえ思ったほど、息が苦しくなつて……。

「宮本さんっ」と背後から呼びかけられて、梨紗は振り返った。ハッとする。それはリカコだったのだ。

「あ……」と言ったまま、そのあと声が出てこない。

「どうしたの？ わたしも呼ばれてるのよ。愛さんの結婚式でしょ？」

「お久し振りで、吉田さん」

やっとのことでそう言うと、梨紗はかるく会釈した。

「シャチホコばらないでよお」とリカコは軽く笑い、手を口に持っていく。今日のリカコは上から下まで、キンキラキンの晴れ姿だった様相だ。手には大粒のダイヤ、胸には何重もの真珠のネックレス、襟には仰々しい造花……。それは一見してグロテスクにも見える。

リカコは未だに、皆を騙し続けているのだろうか、と梨紗はふと思った。嫌悪感が知らずに湧き上がってくるのに気付く。

「変な目付きね」とリカコは何かを察したのか、そう意地悪く言った。「わたしが愛さんと仲が悪かったから、かしら？」

「い、いえ、別に」と梨紗は誤魔化した。

「あなた、まだお一人？ だよね、教師になったんだってね」

「あ、はい」

「橋爪先生ったら、まだ独身なんだって！ 知ってる？」

「ええ……」

「好きな人が居るらしいって」

梨紗の心臓が震える。

「わたしのことかしら」と、リカコはしゃあしゃあと述べ立てた。

この人はオカシイ……と梨紗はやはり感じた。多分リカコという人格は、夢想の中でしか生きられないのだろう。自ら夫と子供が居りながら、自分は独身で自由だと、そう偽っていることが、いつの

間にか“現実”になっていったのだろうか……？ 本当の今の自分を直視できない、哀れな人間なのだ。

腹が立ち、そして悲しくなる。梨紗は最近、人間の中の醜惡な部分ばかりを見てきたからかも知れないが。

――橋爪先生が愛しているのは、わたしのよ！ わたしのよ、リカコさん。しかもそれは、現実なの。もう少しで届くの、わたし自身がそれを拒んでいるだけなのよ！ でも分かっている。それは偽りの愛では無いってことが。

梨紗が無言で歩いていると、いつの間にか教会の入口に来ていた。中から晴れやかな声が聞こえ、練習しているのか、オルガニストが弾くワグナーの結婚行進曲が微かにもれ聞こえてくる。

「あらあ、宮本さくん！」と中からさやか of 朗らかな顔がヒョイと覗いた。隣のリカコを見て、思わず顔をしかめたものの、それをさつと隠すときやかはトントんと階段を降りて来て、梨紗の手を取った。

「本当に来たのね！ 愛さんも喜ぶわよ！」
さやかはリカコを完全に無視だ。

「花嫁さん、綺麗？」

「うん、とっても。いつものツンデレとは大違いでさ」

それからさやかは梨紗をしげしげと眺めて言った。

「あなたも、今日は綺麗ね」

「あら」と梨紗は答えると、なぜかほにかんだ。「そうお？」

「その紺色のスーツ、何気ないけど清楚であなたによく似合ってる」

「あ、これ？ これしかなかったのよ。何だか就活の服みたいでしょ？ でも違うの。これしかなくて……つまり、こういう晴れの日

に着るのは。学校での卒業式とか、そういう時の為に買ったけど」

「あなたはスタイルいいから、何でも似合うのよ」とさやかは言っ

た。

「もう直ぐよ。さ、中に入ろ？」

二人はリカコを無視したまま、チャペルに入って行った。

最初に梨紗の目に飛び込んできたのは、黒い服と首に巻いた牧師カラー（襟）の牧人の横顔だった。牧人は誰か初老の夫人と話している。

「あの人ね、愛さんの婚約者のお母さん。田舎から来たんだってさ」
「え？ あ、そう」

そう受け答えしながらも、心は上の空だった。梨紗はじつと魅入られたように、牧人を見つめていた。

――先生……わたし、愛しています。愛してるの、こんなにも！

「それじゃ」と言って、お礼しつつその婦人は向こうに去った。

そして、牧人はゆっくりと振り向いた。まるでもう以前から気付いていたかのように、その視線は真っ直ぐに梨紗を射抜く。鋭く、暖かく、恥じらい、そして全てを赦して欲しいと、その瞳は告げていた。

「あ、宮本さん？」

懐かしい声がした。誰も居なければ、恐らく梨紗は牧人の胸に間違いなく飛び込んでいたに違いない。

「はい、先生。わたし、来ました」と梨紗が答えると、牧人は口元にほのかな微笑を浮かべた。それは二人だけが知っている、愛と受容の承諾の言葉だったのだ。

結婚式に出席していたのは、極めて少人数だった。けれども、父である田中牧師に手を取られて祭壇に進む愛の姿は、元々綺麗な女性だった愛をもっと楚々と輝かせていた。

バツハの『主よ、人の望みの喜びよ（Jesus, Joy of man's desiring）』の伴奏につれて、自分の直ぐ近くをゆっくりと通り過ぎる純白のレースのウェディングドレス姿の愛と、硬直した田中牧師を見つめていた梨紗は、愛の花嫁姿を自分に置き換えているのに気付いて、心の中で苦笑した。そういうものには懂れて居ないと今まで信じていたが、やはりウェディングドレスという物は、若い独身の女性達には、格別な思いを抱かせるものなのだろうか。

それよりも梨紗は、微かにはにかむ愛の姿に、羨望に近いものを覚えていた。

愛は何よりも今添い遂げようとする相手を文字通り愛し、様々な困難と葛藤を抱いていただろう。けれどもそれらを全て払拭するほど、相手が愛を受け止めたという事なのだろう。それは、何よりも貴いものに違いないと思うのだ。

やがて愛は田中牧師の腕からスルリと離れ、自分の選択した道へと向った。その先には、愛する人が微かに紅潮させて待っている。

そして彼らの傍らには、梨紗にとって最もかけがえの無い人、牧人が司式者としてにこやかに立っている。梨紗はぼーっとして、牧人の姿を見つめていた。牧人は自らのやるべき仕事に今は没頭し、神の前で永遠の愛を誓う二人を静かに見つめていた。

「病める時も 健やかなる時も 死が二人を別^{わか}つまで……」

その言葉は、美しい響きを持つ。けれどもそれは一方では残酷な言葉なのだ。その喜びと痛みを、梨紗は今だからこそ、理解できた。

― 先生が病める時も、そしていつまでも、一緒に居たい……そう、死が訪れる時まで、いつも側に居たい！ もしも、神様、許されるならば。

梨紗はいつの間にか、自分が何者かに祈っていることに気付かなかった。それは人間や、人間の運命を超えた存在だということに、気付いていなかった。

やがて指輪を渡され、誓いの言葉に「はい」と応えた二人は、照れながらもキスをし、全てが滞りなく終わった。その間の時間は、本当は短かったのだが、永遠に忘れない……それ程、強烈な時間なのだった。



披露宴はホテルでやると言う。その前に、ちよつとした御菓子とお茶が用意されてあった。田中牧師は、ぼんやりとし又ホッとした顔付きで、珍しく出席していた牧師夫人と共に端に立ち尽くしていた。

牧人は初々しい二人の近寄って何か話しかけていたし、他の出席者達も牧人に話しかけたり談笑したりして、なかなか梨紗の元には寄って来れないように見えた。

けれども遂に、牧人は隅に立ち尽くす梨紗の方に近付いて来ると、

誰にも分からない愛しげな笑みを見せた。

「宮本さん、いらっしゃったんですね」

この言葉には2つの意味があることに梨紗は気付いていたが、他の人々の手前何事も無い風を装わなければならなかった。

「はい、先生。愛さん、本当に綺麗でした」

「愛が成就するのは、わたしも嬉しいものです。ましてその仲立ちが出来たとあれば」

「ごめんなさい、先生」

「え？」

「あれ……消してしまつて」

牧人の表情が少しだけ、緊張したように感じた。触れれば直ぐ触れるほど近く、けれどもそれは果てしなく遠い距離のように感じる、牧人との距離。

二人は今同じことを考えていた。触れたい、抱き締めたい、そして愛し合いたい。けれども、今はまだ出来ない……。

「消した？」

「削除して」と梨紗は早口かつ小声で言う。「見もせずに……済みません」

「そうでしたか」と牧人は穏やかに言った。

「ではもう一度送ります、同じものを今晚」

「今度こそ、ちゃんと見ます」

「見てから、返事下さい、宜しければ」

「ええ」

そう答えると、牧人は次の人へと移って行った。

内容は分かっている様で分からない。けれども今の梨紗は、結婚した愛にも負けず劣らず、甘酸っぱい幸福に包まれていた。なぜか知らずに涙が浮かぶ。その先には、涙で霞んだ牧人の姿があった。

「あら？ 宮本さん、泣いてんのお？」

と葉麗の声がした。

「えっ！？ うん、そうね。やっぱり、愛し合う二人、結ばれた二人を見るのって、感激だよ」と梨紗はうまく誤魔化した。

「先生！」

その時鋭い声が響いた。振り向くと、リカコが牧人に詰め寄っていたのだった。

「わたしですよ、先生、わたしよね、先生が結婚するのはわたしなんですよ！」

その場に居る全員が凍りついた。

「先生ったら、わたしと結婚してくれるって言ったのに！！」

「あの人、精神を病んでるんだわ」と誰かが言った。

「そうよね、あの方、ご結婚して息子さんが居るって言うのにな」

その囁き声の一瞬後、リカコは牧人に飛び掛り、慌てた長老達が一斉にリカコを押し留めた。リカコは意味不明の言葉を喚き散らし、ぶざまに泣き騒いでいた。

「わたしも先生と結婚するのっ！！」とリカコは尚も叫ぶ。ちょうど愛とカレシは別室に居たときで良かった、と誰もがそう思った。

そしてその時、リカコの手にはキラリと光る刃物があった。

きゃあああああ！という誰かの叫びと共に、もう一人の誰かが携帯電話をしている大声が響いた。

「警察ですか！ 今、おかしい人が居て……直ぐ来て下さい！！」
梨紗は思わず身を乗り出すと、猛然とリカコに飛び掛り、その手からナイフをもぎ取った。それは一瞬の出来事だった。

その背中を庇うように、牧人の腕が巻かれ、しっかりと梨紗を抱

き締めていた。

「宮本さんっ！！！！ 君は、君は大丈夫！？」

狂った女リカコは、その場に崩折れ、梨紗は傷ついた腕から血が流れているのを知った。愛とは、やはり残酷なのだ……。

土曜日のせいか、病院の午後はかなりひっそりとしていた。先ほどまでここに居て事情聴取していた刑事達も去り、今は白く冷たい廊下に、右腕を白い包帯で吊った梨紗と黙り込んだままの牧人だけが居残っている。

牧人が携帯電話で香里に電話した為、香里は仕事を止めて急遽病院に来ると言うのだ。それまでの間、二人はどちらも黙して、ひっそりと廊下の隅にある長椅子に座り込んでいた。

運び込まれた病院の外科の医師によると、梨紗の怪我は大したところではないということだったが、かなり出血していたので直ぐに何針が縫い、その後とりあえず梨紗は点滴などを受けていた。

「本当は一晩入院された方が良いのですがね……けれど、最近ベッドが足りなくてね」

と医師はどっちにするか決めかねたような言い方をしたので、梨紗は迷いなく、

「それじゃ家に帰ります」と告げたのだ。

「しかし、危なかったね。ああいう精神に異常のある人は、バカ力を出すものだからね」

「ええ」とだけ梨紗は答える。急に先ほどのシーンがフラッシュバックして、やっと落ち着きかかった梨紗の精神を再びかき乱すのだった。

「とにかく、彼女が無事で良かったです」
 そう言い添えた牧人の言葉は、語尾が震えていた。

「わたしが油断していましたから、これは全てわたしのせいです」

「ええ、はい……」

そう言うと、今度は梨紗の方を向いた。

「分かりました」と梨紗は、はつきりとした口調で答えたものだった。

けれども医師もナースも居なくなった今の方が、梨紗はじっとした恐怖に襲われてしまう。リカコの狂気を含んだ瞳が狂おしく何かを求め、そして彼女の憎悪のほとばしりが、梨紗を呪う様に覆い隠していくのだ。

けれども、誰も居なくなると初めて牧人は真実の瞳を梨紗に向けた。

直ぐ横に座っていた梨紗は、牧人の方に顔を向けた。

「いや、さっきの出来事だよ。いやいや、事件と言った方がいいのかな。どちらにせよ、君が僕の元にや々と来てくれたと、そう歓喜している最中だったから」

った。人間は、本能的に瞬間の傷の痛みは感知しないという。痛みは恐怖と共に、後になってじわじわと襲って来るもののようなのだ。

リカコはすぐさま近くに居た信者達に捕まえられたが、刃物を取り上げられた後も、リカコはしゃがみ込んで狂ったように喚き続けた。

誰かが控え室に駆け込み、何とかして愛と新郎にことの醜態を見せまいと右往左往している内に、パトカーが一台教会の側に横付けされ、あつという間にリカコは傷害犯として連行されたのだった。

「このままだと、皆にばれてしまいますわよ！ 田中先生っ、これは内密に処理した方がよかったのでは……？ 警察を呼んでしまうなんて」と、初老の信者の婦人が蒼白な田中牧師に詰め寄った。

けれども、思いもかけない強い態度でその婦人に立ちはだかったのは、何と牧人だったのだ。

「織田さん、では宮本さんがこのままでいいと仰るのですか！？」

宮本さんは、彼女は……傷を負ったんですよ！ そんな時に、教会の体面とかメンツとか、そんなことはどうでもいいんです！！」

「あら、そう」とその信者は著しく気分を害して言い返した。

「それでは橋爪先生は、この教会での不祥事が表沙汰になり、新聞とかに載ってもいいんですか！？ そして、先生自身のこれからの牧会に支障をきたしてもいいと言うんですか？」

「ええ、構いません」と牧人はキッパリと言った。

「僕自身の将来よりも、宮本さんの方が大事です。宮本さんは、僕の身代わりになったんですから」

その牧人の声音が何かを告げ、皆が瞬間的にそれを察して黙り込んでいると、やっと救急車が到着した。

「そうよ！ 宮本さんの方が、メンツなんかよりもよっぽど大切だよよ！」

そう叫んだのは、梨紗を介抱していたさやかだった。彼女は梨紗を抱えながら、急いで救急車に運んでいたのだ。

「僕が乗ります！」と牧人は言うのと、「ありがとう」とさやかに囁き、さっと梨紗の側に座り込んだ。

「宮本さんを頼みます、先生」と震える声で言いかけたのは、白い花嫁姿の愛だった。

「ごめんね、しっかりしてね、宮本さん！」

と愛は直ぐ近くまで来ると、梨紗に向って叫んだ。その白いウェディングドレス姿の愛の姿は、この修羅場には似つかわしくないものの、なぜかいつもよりもっと美しく見える。

「愛さん……あなたのせいじゃない……」と梨紗が言うと、

「横になって」と救急隊員がそつと言った。もう一人は電話を掛け、受け入れ先の病院を探し回っている。

「土曜日だから、あんまり開いてないんだな」

「どこでもいいんです、どこでも！　少しぐらい離れていたって」
牧人の声は必死で、そして牧人は思わず梨紗の手を握っていた。

「宮本さん、しっかりして！　大丈夫？」

その声は半分は涙声だと梨紗は知った。

「ええ、なんとか」

「大丈夫ですよ、牧師さん」と隊員が言いかけた。「傷は浅いし、血圧も下がってないし。それに誰かがした止血が上手でね」

「けど、教会で刃物沙汰とは！　そっちの方が驚きだよ」ともう一人の電話中の中年の隊員がつぶやくと、

「や！　病院が決まったよ。少し遠いけどいいですね」とテキパキと二人に言った。

救急車はやっと動き出した。

・ ・ ・ ・ ・
・ ・ ・ ・ ・
・ ・ ・ ・ ・
・ ・ ・ ・ ・
・ ・ ・ ・ ・

「あの時……」と牧人は今は静かに言う。「神に祈っていた。自分の命よりも、君を救いたくて、真剣に祈って……。あんなに祈ったことは、僕のような職業でもあまりないことなんだけど」と牧人は苦笑した。

「わたしもです、先生」と梨紗もポツリと言う。「あのまま、命を失いたくなかった。だって……先生に初めて手を握ってもらったんだもの」

梨紗が強張った顔で、けれども必死で微笑むと、再び牧人はそつと梨紗の傷ついていない方の左手を握った。

「幾度でも、握り締めたい、君を……これからも」

時折点滴を持った患者が通り過ぎ、ナース達がそそくさと歩き、そして白い上っ張りの医師達が行き交うだけの静かな病院の廊下で、梨紗と牧人二人だけの世界が現れていた。少々場違いなのだが、けれどもその場こそ紛れも無い“場所”。ロマンは全く感じられないが、現実的な二人の愛の場所なのだ。

「お母さん、遅いですね」とふと牧人が言った。

「先生、遅くなりますからお帰りになってもいいんですよ」

「それは出来ない」と牧人は毅然と言う。「お母さんに謝らなければ……僕のせいで、君がこうなったことを、ちゃんと言う必要があります」

それから牧人は梨紗をチラリと見つめて、下を向いた。

「あの……先生のお母さんって、どんな人なんですか？ 一度お会いしたんですけど」

「ああ、僕が関西に行っているときね」

そう答えると、牧人はくすりと笑った。

「母は、いつまで経っても母なんだな。いつまでも子供だと思ってる。来て欲しくないのに、やっぱり来てしまう。本当はありがたいし嬉しいんだけど、でもこの歳で来られると、何か照れくさいし恥ずかしい」

「そんなものなのかしら？」

「ああ、そうだよ」

そう言うと、牧人は納得するように梨紗を見つめた。

「今度はちゃんと会って欲しいな。いい？」

梨紗は深く頷いた。

「信仰を持ったのは、母のせいかも知れない。どんなに否定しても、やっぱりそうなのかな？」

「お母様、上品な方でした。お話はしていないんですけど」

「というより……僕が言うのもおかしいんだけど、とても聡明なんだな。そして人間に上下を付けない。尊敬している。あ、マザコンじゃないよ！」

「そんなこと、思いません」と梨紗は微かに笑った。「いい方のようですね」

ここがもしも病院でなかったら、梨紗は牧人の肩に自分の頭をそっと載っけていただろう。そして牧人は梨紗の肩を抱いたのかも知れない。

けれどもそのような夢想は、突然破られた。

「梨紗く！」と言う絶叫のような叫び声がしたからだ。そちらを向くと、厚化粧をし、きちんとしたスーツ姿の香里が亡霊のように立っている。

香里の顔は蒼白で、そして悲痛な憤怒があった。香里は持っていたハンドバッグごと、梨紗に抱きついた。

「梨紗……あんた……無事なの……？」

「あ、お母様でしたか」と慌てて牧人は自らの職業に戻り、立ち上がった。

「申し訳ありません。わたしが付いていながら」

「あなた、誰なのっ!？」と香里がキツと顔を上げて、牧人を上から下まで凝視した。それは香里の職業のせいかもしれないが、それよりももっとリアルで真剣なものだった。

「お母さん、この人は……」と梨紗が言うより早く、

「あなたなのね！」と香里が叫んだ。

「あなたが梨紗をこんな危険な目に合わせたのよ！ 牧師さんでしよ。だったらなぜこんなことになるの？ 教会の中だと言うのに……それって聖なる場所じゃないの！？ それなのに、なぜなのよお」「お母さん」と梨紗は使える左で必死で迫り来る香里を遮ろうとしたが、香里の表情は既に人間よりも夜叉に近くなっていた。

「教会って清らかだと信じていたから、行くことを許してたのに！ だのになんであんな凶暴な人が居るのよお！」

「お母さん、その人、精神的におかしかったのよ」

「じゃあ、ちゃんとこの子を守ってよ！ 牧師さん、この子はね、あたしのたった一人の子供なの！ あたしの命なの！！ あたしは、あたしはこの子の為に生きてきたのよ、必死に生きてきたのよ！」
「分かったわよ、分かったから叫ばないで！ 落ち着いてよ！」

通り行く患者達、又その家族達がチラチラと三人を見ていた。突然香里はしゃがみ込んでワーツと泣き出した。

「牧師さん……あなたには分からないのよ。この子が居なくなったら、居なくなったらあたしどうしたらいいのか……」と香里はしゃくりあげた。

「お母さん」と梨紗は香里にしがみついた。

「もう止めて！」

「申し訳ありません。済みません」と牧人は微かに声を震わせながら謝り続ける。

「梨紗さんをお守り出来なくて、本当に申し訳……」

「黙ってよ！」と怒りを含んだ香里の声がした。

「結局宗教って何なのよ！ カルトと一緒にじゃない。だからあたしは宗教とか大嫌いなもの！ 梨紗が傷ついたのは、あんたのせいよ！」

「先生には関係ない！ 先生は……」

香里はふっと黙り込んだ。そして乱れた髪を掻き揚げながら、今度は牧人を見上げた。

「あなたね……あなたが梨紗を教会に引きずり込んだ。そして怪我させた。そして……」

とそこまで言うのと、香里はハッと何かに気付いたようだった。

「まさか？」

梨紗は香里の勘が鋭いことを知っていた。それは香里の職業柄なのかも知れないが。そして梨紗はハッとして手を引くと、無意識に手を牧人にやった。牧人は梨紗の手を握り返す。

「あんた達！ そうだったの……そうだったのね、梨紗。あんたさあ、このなよなよした男が好きなんだ！ そうか、あたし騙されてたわ！」

「騙してなんかいないわよ、お母さん！」

「済みません……僕達は……」

「僕達？ あなたね、あたしから梨紗まで盗って行くのは……」

牧人の脳裏に、過去の忌まわしい恋の破滅が蘇った。梨紗の手を握るその腕が震え、冷や汗が出てきた。そして全身から血が引いて行くような、どうしようもない破滅感に襲われていった。

牧人は梨紗の手を離した。梨紗は、牧人が遠くへ行ってしまうような幻影を覚えた。

「済みません、お母さん。お嬢さんを……こんな目に合わせて……」

この恋も終わりだと牧人は思った。もう二度と誰かを愛することなど出来ないのだという悪魔の囁きが、牧人には聞こえる。そして梨紗もまた、牧人の絶望感を感じ取って慄然としたのだった。

二人の母親……それもまた、愛するゆえの重荷であり、そして棘なのだ。

ネオン瞬く大都会を、一台のクルマが走る……。運転するのは、香里。そしてその隣の助手席には梨紗が黙りこくって座っていた。長い間二人とも無言だった。

梨紗には香里に対する不条理な怒りが渦を巻いていた。そして香里は、幾分落ち着いたものの、慄きと憤怒が溢れていた。母子の間には、超えられそうも無い溝があることに、二人はやっと気づいていた。

梨紗は呆然として自分から身を離れた牧人が、病院から出て行く自分を見つめる眼鏡越しの瞳に、飛び越せない“何か”があることにも、そして自分にも又、香里に逆らえないどうしようもない“何か”があることにも気付いた。

運命だとか宿命だとかに負けたくない思いがふつふつと湧き出るものの、けれども逆らえない“何か”は、梨紗と牧人の間に、厳然として存在しているようだった。

ふいにケータイが鳴り、梨紗は救われる思いでそれを開けた。

「はい」

「あ、宮本さん？ 今病院？」

と心配そうなさやかの声がする。

「ううん……帰るところ」

「良かった！ 入院は無しね」

「ええっと……明後日、又来いって、お医者様が。でもケガは大丈夫よ」

ケータイの向こうから、ふうという吐息が聞こえる。

「誰なの」と香里のキツい声がした。香里は真正面を向いて運転したままで、振り向きもしない。

「あ……友達」

香里が舌打ちしたような気がした。

「え？ お母様と？ 先生と一緒にじゃなかったの」

「先生とは……」

梨紗の声が途切れ、急に今まで心の奥に押し込めていた哀しみがどっと襲う。

「ごめん、ごめん。でも、……なのよね？」とそっと静かにさやかの声。

「え？ なに？」

「先生が好きだったのは、貴女だったのよね」

梨紗は黙り込んだ。確かにそうだったのかも知れない。そしてつい先ほどまで、歓びが梨紗と牧人を包んでいた。けれどもそれは、今通り過ぎて行くネオンの瞬きのように、いつかは消えるのかも……。

「ごめんなさい。ケガしてショックだったのでしょうか？ それなのにわたして……」

「愛さんはもう出立した？」と話題を変えようと、梨紗はわざと明るく尋ねた。

「ああ……彼女ものすごくあなたのこと心配してたんだけど、でもケガが浅いと知って少し安心して、ハネムーンに行ったわよ」

「確かサイパン島だったよね」

「そう。あああゝ、羨ましい」とさやかは小声で言った。

「良かった！」

梨紗は心からそう思う自分に、我ながらびっくりする。自分達は

かくも悲惨だというのに、他人の幸福を寿ぐとは！

「あのう……吉田^{リカコ}さんは、今日はまだ警察で、だから戻れないみたい。ご主人が教会に来てペコペコ謝っていたから、わたし、それじや宮本さんのところに行きなさいよっ、てきつく言っちゃった」

「あら」

「悪かったかしら？　でもあんな目に合ったんだもの。あなたが、トラウマにならないか、心配なの」

「わたしなら大丈夫」　と梨紗が答えた途端、

「何が大丈夫よっ！」　と隣の香里が叫んだ。　「とんでもない人達じゃないの！」

「あ、ごめん。その声、お母さんよね？」

とおどおどした調子のさやかの声がそつとする。

「怒ってらっしゃるの？　当たり前かあ、娘が刺されたとなっちゃあ、親なら誰でも驚くよね。ごめんね、じゃああたし切るわ」

「あ……ありがとう」

梨紗の言葉を聞くか聞かないかの内に、すっかり怖気づいたさやかはケータイを切った。

パチンとケータイを閉ざす梨紗は、急に胸が締め付けられ、どこか暗い通りに取り残されたような暗澹たる気分に落ちて行く……。

「全く、ああいう人達って、何考えてんのよ！　もう少しで殺されたかも知れないのに、他人事みたいに。ほんと、宗教って怖いわ。あんなね、もうあんな所には行かないんでしょね。それにね……あの牧師って言う若い男……もう会わないのよねっ」

「そんな事まで指示しないで」と梨紗は押し殺した声で言った。

「何て勝手なの、あんた達って！　梨紗、あんなね、どうせ騙されてんのに！　なぜそれが分からないの」

「騙されてなんかいない」と梨紗は強張った声で言った。

「じゃあ何よ。あんたには、わたしと同じ道には進んで欲しくない

の。せっかく教師といういい仕事があるんだから、それにしがみつかなくちゃだめよ。男を当てにするなんて、サイテイよ」

「当てになんかしてない。けど、誰を愛するか、それはわたしが決める」

途端に狭い車中に、香里の甲高い声が響いた。

「あんたのような娘に何が分かるの！？ 愛だの恋だの……そんなの幻想よ。牧師みたいな茶番を打つような職業、それに低収入……あんたが幸せになるわけないわ！」

「じゃあ、お母さんは豊岡さんのこと、愛していなかったの！？」

「きいた口利かないですよ！！」と香里は激昂した。それは香里にとつては鬼門だったようだ。けれども、梨紗も負けてはいなかった。

「愛だの恋だの、そんなの茶番だと言いたい！？ でもそれは理屈じゃないでしょ。それがないと、幸せにはならないでしょ！」

「幸せなんて……」と香里は慌てて慎重に運転しながらつぶやいた。

「そんなの、幻想よ」

「そんなこと無いわよ！」

「どこかにあると信じているのなら、それを探し出さない、梨紗。でも、あの男はダメ」

香里の声は冷酷そのものだった。

ふいに悲しみが襲い、梨紗はこのクルマから飛び降りたいとまで思った。

無言のまま家に到着した後、自室に見向きもせずに入り、ピシャリと閉じた襖越しに、母香里の気配がする。

もう耐えられない……。梨紗は思った。母親という存在がこうまで重荷になって行くとは！ もうこれ以上一緒に住めない……。

「家出」という文字が脳裏に浮かんた。今までは例え浮かんでも直ぐに消えていったはずの「家出」の文字。けれども今は直ぐそこに在る。けれども勇気が無い。牧人の胸に飛び込んで行く勇気が、まだ無いのだ。

へたへたと自室のソファに座り込んで、ふとケータイを開けるとメールの着信記録があった。「牧師 橋爪」とある。なんと他人行儀な名前なのだろう。「牧人」と書いて欲しかった。けれども梨紗はさすがのように、メールを開けた。

『もう着きましたか？ 大丈夫？ 月曜日には、病院で待ちます 牧人』
『ありがとうございます。でも月曜日は一人で行きます。大丈夫です。梨紗』

そう不自由な手で打って、梨紗は気が変わらない内にさっと返信した。それからどーっと疲れが出て来たのを覚えて、ソファに横になった。

――勇気が無いんだわ……。母を捨てられないんだ、わたし。でも先生との愛は本物だし、先生もわたしのことを……。それなのになぜ一緒になれないの？ なぜ神様はわたし達の邪魔をするの！？
そして他のカップル達は、なぜ教会で結婚式を挙げちゃうの？

神様の存在なんか、てんで信じては居ないのに、なぜ!? その時はみんなニコニコしているのに……普段は宗教なんか毛嫌いして。それって欺瞞じゃない!? 矛盾してるじゃないの?

もう何もかも、嫌になった……。

ケータイが鳴り、校長の声がしたので梨紗は誰も居ないのに居住まいを正した。

「何があったんですか、先生? 今警察が来て事の次第を話してきましたよ。ちゃんとご連絡くれなくちゃあ。変な人に刺されたとか」
「あ、はい、済みません。少しショックを受けたので連絡が遅れてしまっ

て」
「月曜日には来られるの?」

「午前中に病院に寄ってから、午後から参ります」

「大丈夫? 授業に支障は無い?」

「はい、幸い軽症でしたから」
ケータイの向こうで、長い吐息が聞こえた。それは梨紗を心配しているというよりも、授業について困惑している溜息のようだった。

「大丈夫です。期末テストの前ですし、休めませんから」

「分かりました。お大事にね」

「あ、はいっ。ありがとうございます、済みませんでした」

ケータイが切れた。事務的な会話ほど虚しいものは無いのだと、今梨紗は痛烈に感じる。

「ねえ……梨紗……梨紗」と襖の向こう側から、どこか恥じているような虚ろな香里の声がした。

「なによ!」

「何か食べなくちゃだめよ。何がいい? 明日わたし休むから……美味しいもの、作ってあげるから。最近わたし、食事もうろくろく作ってなかったし」

香里のその声は、どこか躊躇いがちだった。

「いらない」と梨紗は突っぱねた。「わたし、お腹すいて無いから。それから明日の日曜日も、休まなくていいから。稼ぎ時なんでしょ」しばらくして、香里の少し弱々しい声が聞こえた。「そう……」それから遠くからテレビの音が微かにしてきただけで、夜は更けて行く。

梨紗が自分の部屋で何か食べようと、ぼんやりとお菓子の袋を持って立ち上がると、机の上のケータイがマナーモードを示した。ブルブルっと震えるケータイが、何かを訴えてでもいるようだ。梨紗はそっとそれを持ち上げる。

「あ、もしもし」

「宮本さん!？」

その切羽詰った声は牧人だった。梨紗の胸がギュツと痛む。けれども、牧人を慕う気持ちには偽りは無いと、改めて梨紗は感じた。本当なら、声だけではなく、牧人の側に居たいのに。

「もう寝たかと……」

「いいえ、まだ」

「痛むの？」

「少し」

「メール見たよ」

「そうですか」

「お母さん、怒ってたね。けどそれが普通だよね。僕がもしもそうなら、僕も同じ事を言うかも知れない」

梨紗は黙って、お菓子の袋を握っていた。

「月曜日は、僕は休みだから、必ず病院に行くけどいいかな？」

「大丈夫です」

「怒っているの？」

「別に……」

「宮本さん、僕の気持ちは変わらないよ。色々考えたけど、恐れずに行かなくちゃ何事もならないと……そしてどうしてもダメなら、それは神の思し召しだと感じて」

「何でそう言うんです!？」

微かな怒りを持って、梨紗は問いかけた。

「そんな……無理しなくてもいいんです」

「無理じゃない。進まなくちゃ。何があっても僕は君が好きだよ」
と牧人は誰にも遮ることが出来ないほど強い口調で、そう言った。

「君が好きだ」

「障害が多過ぎて、わたしにはもうどうしていいか」

「障害を作り出すのは、自分なのだと僕は信じる。今まで色々あったけど、それはもう終わったことだ。それらが終わったという事は、君と出会える為だったんだとそう信じたい」

「前向きなんですネ、先生は」

「牧人、と呼んで欲しい」

「……………」

「運命を切り開くのは、僕達だよ。もう逃げるのは止めた。自分を哀れむのも止めた」

牧人はもう“草食男子”ではなかった。

「一緒に切り開いてくれる？」

「ええ……牧人……」

今日初めて喜びの涙が梨紗の瞳に浮かんだ。

「こんなことでめげちゃダメだよ」

「そうですね」

「愛している」

「わたしも」

泣き笑いが梨紗の顔を覆い、そして勇気がわき出でた。
「わたしももう逃げない」

ゝ49ゝ(後書き)

いよいよ、あと一話で完結します。ただし、番外編、書くつもりです。

く50く(前書き)

最終回です。今まで、ありがとうございました。
ただし、番外編がありますので、。又宜しくお願いいたします。

香里はもう寝たらしい。静かな静かな夜だった。

梨紗は、そっとパソコンを開け、メールソフトを開けた。様々なメールの中に、牧人が言ったように、メールが来ていた。それからさやかや、愛からのメールもあった。

梨紗は少しだけ躊躇った後、牧人のメールをクリックした。長い文が目飛び込む。けれどもそれは無機質な文字列ではなく、既に愛のベールに包まれた文字のように見えた。本来なら、ずっと前に送られてきていたメール。けれども、それを削除したのは、梨紗自身なのだ。

けれども先程の牧人との、甘い、そして切ない会話の余韻を抱いたまま、梨紗はその面影に浸っていたかった。メールを開けるのが怖かった。

けれども、やはり読まなくてはならないのだ。それが牧人への、^{あかし}真実の愛の証なのだから……。

『宮本さんへ』

最初に言いたい。

本当に済まないと思います。反省しました。自分の愚かしさに、あれほど気付かされたことはありません。去って行く宮本さんのあとを追いたいとまで思った。けれどもいつもの私の悪い癖で、結局前に出る事が出来なかった。

闇の中を舞う、あなたからのチョコの包装紙の切れ端、それだけが私の手元にあるだけです。あなたからの告白は、信じられず、けれどもそれが事実だと知ったときの歓喜は、あなたには想像でき

ないでしょう。

私はもう諦めていました。二度と女性を愛すまいと。主イエス・キリストだけの愛に生きようと……けれどもそれは、不可能な事だったのです。

あの日、一昨年のクリスマスの夜、道にさ迷う子羊のような宮本さんを教会に誘い入れて以来、忘れようとしていた“何か”が、再び私の心の奥に巣食ったのです。

けれども年の差、あなたが大学生である事、あなたが未信者であること、そして何よりも魅力的で芯の強いあなたに自分が釣り合うのか、それが不安でした。

と言うのも、私は過去二度の出会いに失敗し、そして絶望し、苦悩していたので、再び起るかも知れない失恋をこれ以上味わいたくは無かったのです。けれども、あなたはいつも孤独な私の側に居ました。現実には居ないのに、居てくれるような気がした。それは幻影だったのでしょうか？

私は臆病だったし卑怯だったと思います。あなたを愛しながら、そうではない振りをずっと続けていた。けれども、何事も限度は起るものです。あなたを見る度に苦しかった。今までのどの愛よりも、これは重症だと思いました。

そして、手が届くその時になって、サタンが私に囁いたのでしょうか。『洗礼を受けていなければダメだ』と言ってしまったのは。言った瞬間、わたしは目が覚めたのです。今まで如何に様々な呪縛に縛られていたのかを。

過去去って行った女性達にも、そのような呪縛を与えていたのかも知れないと悟ったのです。もう元カノ達を恨むのはやめました。一番愚かしいのは、自分だったのだから。そしてだからこそ、今再びあなたを失おうとしているのだと。

宮本さん、いや梨紗と呼ばせて欲しい。今のあなたが洗礼を受けていようがいまいが、そんなことはもうどうでもいい。将来的に、あなたは洗礼を受けるかも知れないし、受けないかも知れない。けれども、わたしは今この瞬間のあなたが好きだと言う事を告げたいのです。あなたは有りのままでもいいのですから。

将来がどうなろうと、私はあなたを失いたくない。もしも失ってしまったら、あなた以上に愛する人が出てくるとはもう思わないからです。

神様は憎しみの中には存在しない。神様が存在するのは、愛の中だけです。

『いつまでも存続するものは、信仰と希望と愛と、この三つである。このうちでもっとも大いなるものは、愛である。コリント第一13：13』

その通りなのです！ 信仰も希望も大切ですが、今の私にとって一番大切なのは、やはり使徒パウロが述べたように、愛なのです。それこそ、早く私が悟るべきものなのでした。

私はチョコの紙切れを拾い上げ、いつまでも待っていました。あなたが又戻って来るのを。そしていつまでも待っています。

言葉足らずの私をお許し下さい。牧師なのに、語る言葉を知らず、聖書の本当の奥義を悟らなかった。けれども今は違います。

宮本さん、どうかこれを見たら返事を下さい。そして愚かな私を赦して下さい。あなたが私のような者を愛して下さいたことを知って、けれどもその前から、私こそあなたを愛していたことを知って欲しい。

どうか私の愚言など忘れて、私の元に来て欲しい。それだけが、今の私の希望であり切なる願いであります。

私は先程まで夜空を見上げ、星に祈りを捧げていました。愚かし

い人間を見下ろし、そして運命の名の元に支配して下さる神よ。けれども、どうか私の愛をあの人に届けて欲しいと。そしてもしもそれが叶わない時には、全てを諦めて生きて行くつもりだと祈り続けました。

あなたからの返事を待っています。

あなたを愛する 牧人より 』

読み終えた梨紗は、呆然と、そのメールの前で佇んでいた。これ程の愛の告白だったとは、梨紗自身一年近くも露知らずにいたのだ。牧人の真実の気持ちを知らずに……。

どんな時にも、牧人が自分を思い祈っていたというのに、自分は得て勝手に振る舞い、半ばやけくそで元カレと関係まで持ってしまった。

確かに強制された洗礼は嫌だが、美帆の言うように、信仰は愛した者の後から付いて来るかも知れないではないか。そしてその時には、梨紗も喜んでそれを受け入れるだろう。いや、受け入れるに違いない。

愛は自己主張ではなく、ある時は捨てるものなのだからだ。リカコが自分を傷つけたのは、それはもしかすると何かの所以なのかも知れない……。もしかすると、神様のいたずら？

今梨紗は、リカコを恨んではいなかった。恐怖の体験だったが、けれどもそれは次の瞬間には、喜びに変わる前の試練だったのかも知れないと、ふと梨紗は夜空を見上げた。

星に祈りを捧げていた、と牧人は書いていた。そして今梨紗も又、同じ事をしようとしている。

梨紗は襖を開けた。香里は炬燵の中で居眠りしていた。時計は10時半を示している。

「お母さん、わたし行ってきます」と梨紗はそつと香里に囁くと、約30分ほどの距離の牧人のマンションに向った。

梨紗が出た後、香里はそつと目を開けた。その瞳には、涙が浮かんでいる。

「子供はいつかは出て行くのよ、馬鹿ね、わたしって」

—— ☆・・◇◆◇・・☆ ——

クリスマス前の大気は澄んで冷たいが、上気している梨紗の頬には心地良かった。そう言えば、大分前、ファミレスでアルバイトしていた後も、こんな夜だったような気がする。

牧人は起きていた。一階の窓から明かりが漏れていたのも、そう分かる。

梨紗がベルを押すと、ややあってドアが開き、牧人のびっくりした、それでいて分かっていたかのような、安らぎに満ちた顔が覗いた。

「ああ、宮本さん……」

「梨紗と呼んで」

「梨紗……」

牧人は梨紗を玄関に導くと、ゆっくりとドアを閉めた。その途端、梨紗はしっかりと牧人の胴に手を廻し、無言で抱きついた。最初はおずおずと、けれども次の瞬間、強く牧人は梨紗を抱き返した。そして顎を、梨紗の髪に置いた。

「読んでくれたの」

「ええ。だから来ました」

「そうか……」

「もうわたしを離さないで！ 離さないで下さい」

「うん、いいよ。だけど君に見せたいものがあるんだ」

「なにかしら？」と梨紗は顔を上げて、愛する人を見上げた。

牧人は少しだけ身体を動かすと、机の上に置いてあった小さな紙切れをそっと取り上げて見せた。

「バレンタインのチョコの包み紙。君がくれるはずだったチョコの香りが今もする」

「まあっ、今でも持っていたのね」

「いや今こそ捨てるよ。本物の君を得たんだからね」

チョコの包み紙の切れ端が、はらはらと床に落ちた。それと同時に、梨紗は牧人からの始めての口づけを受け入れていた。長い間待ち焦がれていた口付けを。

牧人は邪魔な眼鏡を外すと、梨紗の右腕を気遣いながらも、その深い抱擁を離そうとはしなかった。そして梨紗も又、やっと掴んだ幸せを決して離すまいと、星に、そして神に誓ったのだった。

終わり

番外編 【早春の誓い】 Ⅰ

番外編『早春の誓い』

Ⅰ

午後8時近く、どうやら人影もまばらになった職員室の一角で、梨紗は旅もの雑誌を開いていた。入学試験と初めての卒業式もようやく終わり、どこかホッとした中にも、未だ行き先の決まらない数人の生徒達の行く末に討論を重ねて疲れ果て、今やっと一息ついたところだった。

明日は日曜日だが、牧人は一週間で一番忙しい日なのだ。けれどもその晩、牧人と横浜でデートの予定だった。いいお店を探しておいて、と牧人に言われていたのだ。そして、両方が幾らか時間が取れた頃合を見計らって、早春の伊豆に出かけようと、どちらとも無く言い出していた。

梨紗はこのうえなく幸せだった。

あの日以来、二人の愛は揺るがなくなっていたし、それが本物であることを悟ったのだから。やっと辿り着いた一つの終着地……けれどもそれは新たな障害多き門出でもあったが、今の二人には幸福の衣がふんわりと掛かっているような気さえしていた。

もちろんここまで来るまでには様々な事柄が起こった。

牧人の教会内では、公然と牧人と梨紗の間が囁かれていたが、もう牧人は否定はしなかった。けれども、はっきりと断言するのも避け、なるべく周囲を刺激しないようににはしていたものの、このような噂はあつという間に信徒達に広がって行くものだ。

日曜礼拝に梨紗が出席すると、皆の視線が自然とかわざとか、梨

紗に注がれた。その雰囲気がつとうしくて、梨紗はなるべく出席を避けようとしていたが、けれども牧人は梨紗に「逃げないように」と頼んでいた。又梨紗の方も、何も疾やましい事はしていないという意識が梨紗を奮い立たせている。

そうであっても、やはりどうも気詰まりなのだ……。

「宮本さん……他人の噂は気にしないことよ」

とある日さやかが梨紗の耳元で囁いた。

「クリスマスも新年礼拝もあなたちゃんと来ていたでしょ。でもそれで良かったの。本当に好きだったら、何も隠す事無いわよ！わたしは先生とあなたは、物凄くいいカップルだと思っているもの。でも……」

「でも？」

「分かっていると思うけど、もうすぐ先生は関西の方の教会に赴任されるのよね。もうそれは決まっているんですもの。今更変えられない。なのに、あなたは直ぐには先生に付いて行けないでしょ？仕事とかお母さんのこととかあるし……」

「うん」と梨紗は正直に頷いた。「それが問題なの」

「焦る事無いわ」とさやかはいつものように、朗らかな笑みを浮かべながら言った。

「今はメールとか電話とか、新幹線とか色々あるんですもの」

「そうね」

そう答えつつも、梨紗の心には一抹の不安と吹き抜ける冷たい風を背筋に感じずにはいられなかった。

けれども、梨紗と牧人は共に多忙ながら、いつもどこかで会うようにしていた。さすがに牧人のマンションは教会の近くにあるのでそこで会う事はもう無かったが、お互いに少しでも時間のあるときには、駅、映画、レストラン、公園、ただの通りを歩くだけでも、二人の仲はもう揺ぎ無いものになっていた。

ただし二人はまだ、最後まで行っただけには、出会って直ぐに身を捧げていたのに、未だに二人はそのことに就いてだけは慎重なだった。

梨紗の母香里は、つっけんどんな態度を取り続けたが、内心では既に諦めていた。愛する二人が、自分が働いている結婚斡旋所に来る若者達よりも打算的ではないのが妙に嬉しくもあるが、けれども親としてはやはり心配だったのだ。

何よりも、牧人の職業が気に入らなかったが、さりとてどんな仕事が良いとは香里は言えない。どんなに金持ちでも、医師や弁護士や大学教授と言った憧れの職業であっても、その中にはやはり“愛”がなければ成り立たない事を知っていたからだ。

香里はもう内心許していたのだ。けれども梨紗が自分の側を離れて行くのを想像する事は辛かった。ふと、梨紗が幼い頃の写真のフレームをぼーっと眺めている自分が居たりする……。

「諦めなきゃ……梨紗はもう大人なのよ」



「宮本先生、何見てんですか？」

と隣の二年D組の中年男性の若林先生が、梨紗の見ていた雑誌をチラッと覗き込んだ。

「『春の伊豆の旅』か、ははあ」

「友達と行くこうと思って。忙しいから近場しか行けないけど」

「若い人はいいですなあ」と若林先生は唸った。「ま、春休みは少しは取れるでしょう。あたしらの職業には、あんまり休みと言うものは無いですけどね」

「でも今年の生徒達は優秀で、結構いい大学に入りましたよね」と巧みに梨紗は話題を避けた。

「そうですね。宮本先生も、一年生先生ながら頑張りましたね」

「ありがとうございます」

「さ、僕はもう帰りますよ。……あの、送って行きましょうか？」

「え？」と梨紗は目を見張ったが即座に断った。「いいえ、結構です。わたしもう少ししてから帰りますから」

「そうですかあゝ？」と言う若林先生の目つきは、どこか卑しい。けれども梨紗は無視して、パソコンに向った。

「やな奴、あいつ」

と梨紗の前に座っていた30過ぎと思われる国語の女性教師須賀先生が、若林先生が職員室から居なくなつて直ぐ、そつと言いかけた。「あいつって、スケベなの。気を付けるのよ、宮本先生」

「い、いいえ。わたし、大丈夫ですから」

「そうよね。宮本先生なら、あんな煤けたような中年男じゃなく、もつと若いイケメンから声掛けられそうだもんね」

「いや……まあ……」と梨紗はお茶を濁した。そしてパツと牧人の顔を浮かべた。

今開いているページには、安価だがステキなペンションが載っていた。薔薇の浮かぶ貸しきり風呂に、部屋にはロマンチックな紗の天蓋が掛かっているベッドがある。思わず頬が赤らみ、まるで何も知らない処女のように梨紗は恥らった。

― ここにしようかなあゝ。伊豆高原、か……。

JR桜木町からは、みなとみらいの夜景がよく見渡せ、その煌きは暗闇の中のまさにランドマーク。その雑踏の中、いつもの待ち合わせ場所に立ち、梨紗は愛する人を待っていた。

いつも抱く微かな不安……。それは牧人が来ないのではないか、という在る意味馬鹿げた不安だった。けれども本当に牧人の姿を見るまでは、それは消えないのだ。

デートの待ち合わせ場所はあちこちで、牧人が早い時であれば自分が先に来ている時もある。けれどもどちらにせよ、彼の存在を確かめなければ梨紗は安心できないのだった。

今はトートバッグの中に、例の旅もの雑誌が入っている。少し早く来たかな、と感じながら梨紗は日曜日のまだ早い宵を楽しんでいた。

今朝もまた教会には出席できなかった。行きたく無いと言うよりも、私立学校に勤めている梨紗にとっては唯一の休日が日曜日なのだ。日曜日の礼拝は、仕事をしている者にとっては結構辛い。

梨紗も又、日曜日はゆっくり起きるのが常だった。反対に牧人は日曜日が一番忙しく、月曜日が休日となっている。このすれ違いもまた、二人の障害になっていた。そして将来もなっていくだろう。今はそう逼迫してはいないが、その内にその問題は二人に重く圧し掛かってくるに違いない。

けれどもふと、梨紗は少し離れたところから急ぎ足で近寄ってくる牧人の姿を認めて、微笑んだ。中肉中背の牧人は、人ごみをかき分けるように、いつもの黒っぽいコートにベージュの襟巻き姿でス

タスタと、まるで目的の獲物を見つけた狩人のような足取りでやって来た。

それから梨紗の直ぐ近くまで来ると、ニッコリと笑う。その笑みが見たくて、梨紗は牧人を求めているような気がした。先ほどの不安は、一気に吹き飛んだ。

「ごめん、待った？」

「うん、少くし」と言いざま、梨紗は今にも牧人の胸に飛び込みそうになる。けれどもここが雑踏なのをわきまえて、控えめに牧人の手を握り締めた。

「でも、待ち遠しかった」

「遠くから見てみると、梨紗の横顔は何だか淋しげだな」
と牧人は意外なことを言った。「けれど、こっちを見た時には別人になっていて」

二つの顔を持つ梨紗の姿。けれどもそれはあながち間違っているとは言えないのかも知れないのだ。

「今日はどこへ行こうか？ 行きたいところ、ある？」

「ううん、どこでもいい。ただ歩いているだけでも。でも……ちょっとはお腹がすいたかな？ あのね牧人、今日も出席しなくてごめんなさい」

「なんだ、そんなことはどうでもいいのに。きつと梨紗、今頃疲れて寝ているんだろうなって思ってたから……可愛い寝顔しててとかって。ふふふ」

「嫌だ」と梨紗は猫の様に身を摺り寄せながら甘え声を出した。

「本当に……いつか梨紗の寝顔、眺めていたいよ」

その言葉は梨紗の胸にドキリと艶かしく響く。それは梨紗も又求めていたものだったのだから。

「わたしも。だから、ほら、今度どこかへ行こうって約束してたで

しょ？ 旅の雑誌持って来ちゃった」

「いいところ見つけた？」と牧人はぎゅっと強く梨紗の手を握り返しながら耳元に唇を寄せる。

「伊豆……いいかしら？」

「うん、いいよ」

「レストランで見せてあげる。結構乙女っぽくって、牧人は思ううかなうて考えてた。気に入るかな、とか」

「梨紗が居れば、どんなところもベルサイユ宮殿だね、あははは」と牧人は朗らかに言った。「ねえ、赤レンガの中に、いい店あるんだけど、行く？」

「行く行く」

「じゃ」

二人はなるべくゆっくりと、歩き始めた。クルマだとあつという間の距離を、ひたすら歩きながらこの宵を楽しんで……。

☆ ♪ ☆ ♪ ☆ ♪

星はいつも梨紗の味方だったように思う。どんな時にも、何がしかの奇跡を与えてくれた。けれどもそれが奇跡なのか、自分がそう思いこんだのか、それはもうどうでもいいこと……。大事なのは、それが奇跡だと信じる自分が居るという事なのだ。

その星々の望む窓辺に座って、梨紗と牧人はイタリアンを楽しんでいた。梨紗しいつも、牧人の側に居るとホッとする自分が居る事に、いつも驚いてしまう。

穰の時には感じなかった安寧を感じ、男と女の感情と同時に、ジエンダーを越えた何か不思議な因縁をこの身に覚える。昔から知っていたような、この不思議な感覚は、一体なに？

「なに考えてるの？」と牧人がフォークを止めて、言いかけた。今

晩の牧人いつもの堅苦しい背広と牧師カラーではなく、若々しいベージュのセーター姿だ。牧人が聖職者であると言うしるしは、他者には全く分らない。

「何だか……変な気分なの。デジャブみたい。ずっと前から、牧人を知っていたような気がするんだもの」

牧人は静かに微笑んだ。

「神様がお決めになっていたのかも」

「かもね」と梨紗も微笑む。

「その髪型、元に戻したんだね」と牧人は、以前気に入っていたガリーヘアの梨紗を眩しそうに見つめた。

「ああ、これ？ そう！ 卒業式の前に、この髪型にした。牧人もこの髪型気に入っていたし。でしょ？」

「うん、いいね」と牧人は満足そうにうなずいた。

「あゝあ、美味しかった、ここ」とデザートを突きながら、梨紗は言うどさつと例の雑誌を差し出した。ポストイットを挟んであるペー지를そつとめくる。

「ここなんだけど……どうかな？」

牧人はその雑誌をじつと覗き込んだ。如何にも若いカップル向けのロマンチックなペンションで、梨紗がその点は案外平凡なのに、少し安堵した自分が居た。

本当はどこでもいいのだ、梨紗を抱ければ。けれども牧人は、これらのシティ・ホテルで、慌しくことを済ますのは気に入らなかった。最初の絆は、やはりどこか特別の所で迎えたい……。

「いいんじゃない、綺麗な部屋で」

「それに、わたし達向けに、値段もとってもリーズナブルでしょ」

「それじゃそこにしようか」

「いつ？」

「そうだな」

そう言いつつ牧人は思考をめぐらせた。本当はもうそんなに時間は残っては居ないのだ。3月末には、牧人は大阪府堺市にある教会に赴任しなくてはならない。そして梨紗も又、この春はそれほど暇ではなかった。けれども絶対に行きたいのだ、そこへ。

日程を何とか決めると、牧人はコートのポケットから可愛い小箱を差し出した。

「はい、これ」

「え？ 何かしら」

「やだな。忘れてんの？ 今日はホワイトデーだよ、梨紗」

「ああ、そうか」

梨紗はそのピンクの包みを手に取った。きっとキャンデーか何かだろう。

「ありがと。わたしったら、すっかり忘れてて」

「それだけ忙しいってことだよな」

「お互いにね」

ふと、不安が二人を包む。本当に結ばれるには、まだまだ数々の障害を乗り越えなければならない。

「開けていい？」

「もちろん！」

「ふん、なにかなあ」

包みを開けると直ぐに、それはキャンデーなどではないという事が分かった。紫色の小箱をそっと開けると、そこにはキラキラと輝く物が……。

「あ」

梨紗はそのペンダントを手にとると、じつとかざして見た。

「ごめんね、ダイヤじゃなくて。スワロフスキーで」

「ううん、そんなこと。ステキだわ、本当に」

「牧師の給料ではそれが精一杯」

「お金じゃないわよ。ていうか……身分相応でいいのよ、わたし達
って」

梨紗は紺色のセーターに、そのペンダントを付けた。

「是非行こうね、そこへ」

男としての欲求が疼き、牧人は一人薄暗い照明の中で頬を赤らめていた。その掌の上に、梨紗はそっと自分の手を重ねた。既に牧人を浮け入れている自分の姿を想像しながら梨紗は答えた。

「ええ、待ち遠しい！」

ほとんどの卒業生の将来が決まり、梨紗が担当していた『英語研究部』の部活も今年度最後の日の夕方、梨紗は明日からの牧人との一泊旅行を想像しつつ思わずニンマリと笑みを浮かべながら、学校からののだらだら続く坂道を下っていた。三月末の夕暮れは、もうかなり遅くまで明るくなっている。

背後から来た車が直ぐ側に止まって初めて、梨紗は我に返った。

「やあ、宮本先生ですか。ちょうど僕も帰るところでね、どうです？　僕が駅まで、いや良ければ先生の家まで送って行ってもいいですよ。」

あ……もし宜しければ、どこかでお茶でも飲みませんか」

梨紗はジロリと、その卑しい気持ちを抱きつつ抜け抜けと誘った、中年の若林先生を見つめた。若林先生の魂胆はみえみえだ。

「残念ですけど、わたしこんな気持ちいい日には、ぶらぶらと歩いて帰るのが好きなので。では失礼します」

と梨紗は目を逸らすと、一礼した。

「宮本先生みたいな人が、お一人で帰るのは危険じゃないですかね」

「いいえ」

そう言うと、梨紗は振り返り、若林先生を侮蔑を込めて見つめた。

「わたし、大丈夫ですから」

「先生……独身でしょ」

「そうですね……わたしの好みは、ブッキーとかキムタクとかかなんで……」

「へへえ、そうですか。ま、僕のようなオジサンはお呼びじゃない

ってわけですよな」

「何言ってるのよ、この勘違い中年男は！ 奥さんもお子さんもいらっしやると言うのに！」

睨み付けるように見つめる梨紗の目に、明らかな侮蔑があると若林先生は見て取ったのだろう。「ふん」という声にならない嫌味な鼻息が聞こえた。

「あの若林先生って、敵に廻すと怖いものよ。女好きだからあなたに近寄るかも知れないけど、適当にあしらっておくのよ。後が大変だから」

と国語教師の須賀先生が忠告していたのを思い出したが、もう遅い。

「それじゃ」

梨紗は一礼すると、一人坂道を下り出した。若林先生のプリウスは、梨紗ストレスにすれ違っていると、爆音を轟かせて走り去った。嫌な思いが唾と共に胃の腑から上がってきたが、梨紗はキッと唇を噛み、又歩き出した。

「人生、いい事ばかりじゃないわね、きっと……。」

けれども明日牧人と一緒に旅行することを想像し、気持ちが少しずつ和んで行く。

—— ☆・・・ ◆ ・・・ ☆ ——

梨紗が明日の支度をしていると、母の香里が帰宅した。そして小さなソファにポーンとブランド物のハンドバッグを投げ捨てると、いそいそと旅行の支度をしている梨紗の横顔を見つめながら言った。「明日、行くのね、あのへば牧師と」

梨紗は振り向いた。

「うん、行くわ。へぼでも何でも、関係ない」

「あゝあ、梨紗には金持ちと付き合っただけで欲しかった。なのに、あんな貧乏人と付き合っただけ、それも牧師となんか付き合っただけすんのよ」

香里の嫌味は慣れているはずだが、今の梨紗にはカチンと来た。

「あたし、いつまでも子供じゃないわよ。ちゃんと責任は取ります」

「あ、そう」と香里は冷たく言い捨てる。「まさかあんた……結婚とか考えては居ないわよね。ただの遊びでしょ」

「さあ」と梨紗は顔を背けた。香里の言い掛かりはいつもの事だったが、心が荒んで行くような気がするのだ。

「行くのなら、ちゃんと避妊ぐらいしなさいよ。あたし、もう寝るわ。今日は疲れちゃった」

「お母さん」と梨紗は言葉をかけた。

「なによ」

「きちんと定期健診には行ってるの？ さぼってない？」

「余計なお世話よ。でも今は少し忙しいんだから」

「ちゃんと行かなくちゃダメじゃない」

「はいはい、分かりました。でもあたしだって、子供じゃないんだから」

香里の言葉の棘は、梨紗の心をズタズタにする。実の親ながら、いや、実の親だからこそ、余計に傷つくのだ。それを香里は知っているのだろうか？

ボタンと襖を閉じた音が、虚しく部屋に響く。この貧しい暮らしを何とかしたいのは山々だが、けれどもお金持ちの男がそうそう転がっているわけではない。又愛している人が、必ずしも金持ちとは

限らない。

梨紗は香里が情けなく、哀しくなった。

― いけない。どうもわたしって、最近ネガティブだわ。あの若林先生といい、母といい、なんであんな捻くれた根性なんだろう？

そしてだからこそ、少し押しが弱いが純粋な牧人に惹かれるのだと、そう梨紗は悟った。牧人の側に居ると、ホッとし気が休まり、戦々恐々とした現実を忘れる事ができるのだ。牧人が例えお金持ちではなくとも。

布団に入ってしまったら、明日持つて行くガイドブックに載っている『ブルーロマンス』というペンションの写真を見ていた。ルルと小さな声がする。メールを開けると、案の定牧人からだった。

『明日の準備はいい？朝9時に例の場所で。とても楽しみ（ハートマーク）。愛してる』

梨紗は思わずニッコリして、直ぐに打ち返した。

『準備バッチリ！私も楽しみ。そして私も愛してる（ハートマーク二つ）』

― いいのよ。わたしには、左手に嫌なこと、そして右手には愛する人が居るもの！ 人生って、両方あるのね。

牧人の運転するスズキ・セルボは、梨紗を乗せて快適に走っていた。若林先生のプリウスとは大違いの小型車だが、梨紗にとってはそんなことはどうでも良かった。若林先生の世代は、「クルマ オンナ カネ」という物質主義の名残を色濃く持っている世代らしい。高価なクルマなら、だれでも付いて来ると勘違いも甚だしい世代なのだろう。けれども何と哀しい世代なのだろうか？

お天気は良く、伊豆に行く西湘バイパスから熱海ビーチラインに来ると、果てしない海が見える。

「わたし、晴れ女なの？ 牧人は？」

「僕はどちらかと言うと雨男。けど、君には負けるね」

セルボは車高が低く、小型だがどこかスポーツカーから見えるような景色が、背後へと飛んで行くようだ。

「ねえ、牧人」と梨紗は言いかけた。

「ん？」

「大阪の教会って、どんな感じなのかしら？」

「僕の赴任先？ ああ、どうかな。総信者数は40人位だから、給料は大した事無いね」

「わたしの友達で美帆って子が居るけど、彼女、お寺に嫁いだの。田舎だけど、結構名利だからテレビにも出た。それに檀家さんが多いから、結構裕福なの。お一人お子さんが生まれたし、幸せそうだった。あ、宗派が違うね」

「うん」と牧人は短く答える。「僕達は……色々困難な事が多過ぎるよな」

「だけど、わたし、牧人から離れたくない」

「君はいつも率直だから好きだよ。うん、僕も左に同じ！ 梨紗とは離れたくないし、もう離さないよ、決して」

運転中の牧人は前方ばかりを見ていたが、本当は梨紗を眺めていたかったのだ。

「梨紗は最初会った時から綺麗だなあ、可愛いなあ、と思ったけど、今日の君は一段と……」

「それ以上、ご機嫌取らないですよ」

「違う違う！ 本当だよ、梨紗。僕の目に狂いは無かったってこと……本当だよ」

「うん、信じる」

「信じる者は救われる、だよ。うふふふ」

確かに今日の梨紗は、スラリとした脚をストーンウォッシュのスキニージーンズに包み、学校では着たことが無かった、レースに縁取られた白くふんわりした綿のチュニックブラウス姿だった。その上に、紫色のパーカーを羽織っている。これはいつも古着を着ている梨紗にしては、奮発して買ったものだ。いわゆる、“勝負服”というやつなのだ。

けれども、もっと勝負していたのは、実は下着。ネットで買ったもので、結構際どい下着を身に付けていたのだった。それを今朝素肌の上に着た時、何だかドキリとして胸がときめいた。そんな気分は、穢には感じなかったものだ。

今まで、牧人とはほとんど肉体関係すら無かったので、尚更そう感じてしまうのだろうか？ 牧人が何と言うか、それを想像するだけでドキドキしてしまう。

「なにもじもじしてるの？ トイレ？」

「ううん、違うよっ。牧人ったらあ」

教室では考えられない甘えた声が漏れる。我慢できずに、牧人はチラッと梨紗を一瞥した。牧人の胸も高鳴って行く。その白い妖精のような服の下の肢体を想像するだけで、どうしても頬が火照るのだ。

「今日の梨紗……色っぽいよ」

言われた梨紗は、静かに牧人の眼鏡の横顔を見つめた。ブッキーともキムタクとも違うが、そのすっとした形のいい鼻筋の顔立ちはやはり女心をくすぐる。今すぐにでも抱かれない、という狂熱的な思いを梨紗は隠しきれない。

そのくせ、牧人が以前付き合っていたという二人の女性とはどこまで行ったのか、聞いてみたくもなる。聞いたところで、どうなるものでもないのに。

けれども梨紗は賢明にも、そのことには触れなかった。お互いに過去は過去。過ぎ去った日々をあれこれ詮索するのはやめよう。

それよりも、これからの睦み合いを想像した方が、より建設的だ。



伊豆高原に入る直前に、二人は海岸沿いの瀟洒なレストランで食事を取った。

「ステキね」と梨紗は呟いた。目の前に広がる海もそうだが、手を伸ばせば届きそうな所に座っている牧人に対しても素直にそう思う。今はとても牧師とは思えない、リラックスした薄いセーター姿の牧人もまた、目の前の愛しい人を見つめていた。

「何が？ 海が？」

「ううん、今のこの瞬間のこと。今までの嫌なこと、ぜんぶ忘れてしまうの」

「僕もだ。そして先の将来の不安も吹き飛んで行くような気がする

な」

「風いだ海もいいけど……何だか、こんなに幸せでいいのかなあ……って思う」

「たまには、神様も幸せをくれるさ」

と牧人は茶化した。「だって、今までどれだけ待ちぼうけをくらったか」

「んまあっ、牧人ったら！」

牧人はそっとテーブル上の梨紗の手の上に自分の手を重ねた。

「いまだに、君が側に居る事が信じられないんだ。不思議な気がして」

「わたしも……」

恐らくこの店の誰かが、二人を見ていたのかもしれない。けれどももう二人には何も見えなかった。お互いのことしか見えない。そして全世界には、二人だけしか居ない……そんな気分だったのだ。

「神様に感謝したいわ」

梨紗はそっとつぶやいていた。

少し肌寒かったが、伊豆高原の途中には桜が咲きほころんでいた。梨紗と牧人は、美しい場所に来るとしばし車を止めて、その桜に見入っていた。予約していたペンションへ直行する前に、二人は一碧湖で乗り物に乗り、足で必死になって漕ぐと少し汗ばんだ。無邪気な子供に返ったかのように、笑いさざめきお喋りし、そして湖の中央まで来るとふと二人とも足を止めてそのボートの上から、静まり返った深遠な湖の廻りをぐるりと見回した。

この湖上には、まるで二人しか居ないかのように、音がしない。時に鳥の羽ばたく音が微かにするぐらいなのだ。

「何だか、静かね……ちょっと怖いかな」

「梨紗は泳げないの？」

「ううん、わたし、子供の頃はスイミングスクールに通ってた。結構巧かったのよ。でも……」

なぜか哀しみが押し寄せる。

「どうしたの？」と牧人が心配そうな顔を寄せて来る。

「でもね、父が家を出て行った頃、わたしスイミング、やめちゃった」

「そうか……。僕は両親揃っているからなあ。それに弟も居るし、恵まれているのかも知れない」

「弟さんは、クリスチャン？」

「いや、違う」とすぐさま答えた牧人の顔が曇った。「残念だけさ」

「お互いに、家のこととか家族とか話さなかったね」

「いや、その内でいいよ、梨紗」

二人は黙り込んだ。

「ね、戻ろうか、岸に」

「うん、夕方になるとまだ少し冷えちゃうね」

「さあてつと、梨紗が決めたそのペンションとやらに行くかな」

「やだ〜！ ペンション、初めて？」

「男はペンションには行かないよ。男友達ともね」

「女友達とは？」

言ってから、梨紗はしまったと感じたが、牧人は静かに答えた。

「女性とも、一度も行ったことはないさ」

梨紗はその言葉を信じようと思った。自分だって、以前は何をしていたか……他人のことをあげつらう事などできるはずがない。

「それじゃ行きましょう、いざ『ブルーロマンス』へ！」

「何だかロマンチックな名前だね〜」

「へへへへ」と梨紗は、我ながらにやけた笑いを浮かべた。これが生徒にでも見つかったら大ごとだが、今はその現実を忘れる“時”なのだ。

・ ・ ☆ ◇ ☆ ・ ・ ○ ＊ ・ ・ ＊ ○ ・ ・ ☆ ◇ ☆ ・ ・

「へええ、ここが『ブルーロマンス』か」

部屋中が淡いブルーの色調で整えられた一室に入った途端、牧人はキョロキョロ見回して感嘆の声を上げた。

部屋は比較的狭いが、ブリティッシュ調の調度品やブルーの薔薇の柄のラブチェア、白い紗の薄布に覆われた天蓋付きのダブルベッド、そして窓からは遙か下方に伊豆の海が見える。

「気に入ったかなあ」

「大いに気に入ったよ」と牧人は梨紗の方を向くと、ニッコリ微笑

んだ。

「ねえここに来てごらん」

と言う手招きで梨紗がベッドの端に座ると、牧人が待ちきれないかのように梨紗の胴に腕を回してぐっと引き寄せた。鼓動が直ぐ近くで響きあうかのように、二人の胸が間近に接近する。

「いいよね」

そう囁くと、牧人は梨紗の答えも聞かず、口付けをした。もちろん梨紗の答えは聞かずとも分かっていたのだが、そういう牧人の律儀さが梨紗には好ましく感じられるのだ。

牧人から口付けされた途端、梨紗の胸の奥の炎が燃え上がり、もうそれを制御する事は出来なくなっていく。二人はいつまでも口付けをし続け、それからどっとベッドに倒れた。そこから窓越しに夕暮れが見え、茜色の光が部屋に差し込んで行く。

「ねえ……ダメよ、今は……」

と梨紗は喘いだ。

「7時にはお食事だもの。ペンションでは決まっているの。時間は選べないわ」

「あ、そうか……ごめんごめん。けど、何だか……」

牧人は言いつつ、左手で梨紗のふわふわのブラウスの下に手を伸ばした。こうやって愛する人に触られている悦楽の時間は、まるで永遠のように感じるが、けれども規則は規則なのだ。

「牧人……食後、薔薇風呂に入った後で……ね？」

「うん」と牧人は残念そうに、又名残惜しげにやっと梨紗の柔らかい肌から手を離した。

「梨紗がまるで天使みたいな服を着てるからさあ……もう待てなくて。けど食事も美味しいんだよね。それにお楽しみは後で、かな？」

牧人は照れ笑いを浮かべた。

「そう。取っときましようよ。そのあとなら……わたし、牧人の言うなりになるから。何でもするから……」

「何でもするって……その言葉、益々男に火を付けちゃうんだよな。けど今はお預け」

勝負下着までは牧人は見なかった。梨紗でさえ、この夕暮れの間が惜しいと思う。けれどもお腹もすいたし、食事もしみだ。このペンションの売りは、ロマンチックな部屋だけではなく、見事な山海のご馳走もなのだから。

梨紗は牧人が化粧室に入っている間、素早くジーンズを脱ぎ、スカートに着替えてから手を牧人に差し出した。

「じゃ、エスコートして」

牧人はそのスカートを脱がせたいという衝動を何とか抑えながらも、優しく梨紗の手を取ったのだった。

評判どおり、食事は美味だった。けれどもダイニングに行くと、既に他のカップルが三組居り、改めて自分達だけではないということを知らされてしまう。

梨紗と牧人よりも更に若い二組と、もう初老に差し掛かっている一組。このようなロマンチックで安価なペンションに、梨紗達の親のような世代が泊まっているという事に、まず梨紗は幾分カルチャー・ショックを受けた。

そして更に衝撃だったのは、その初老のカップルが本当に楽しそうにお喋りしながらディナーを食べていた事だ。片親で育った梨紗にとって、両親というのは別々の存在で仲はよくても黙って食べているか、それとももう冷たい空気の中で白け切っている存在としか在り得なかったのに、かくも親しげな、多分夫婦と思われるカップルが居るとするのは、新鮮な驚きだった。

彼らに比べると、若い方のカップル達は、明らかに食事よりも、その後の“お楽しみ”の為に来ているといった雰囲気がありありでシーンと黙々と食事をし、梨紗達がちょうど半ばといった感じだった。

ペンションは中年夫婦が二人だけで経営しているらしく、旦那の方が厨房に居り、奥さんの方が給仕をしていて、どのカップルにも「どうですか？ 美味しいですか？」と愛想よく尋ねているのだ。梨紗にはその様子が、何だか気恥ずかしい。初老夫婦を除いては、あとは全て未婚の男女だというのに、ここに居る事が何だか厚かましく感じるのだ。

それが世代間のギャップと言うものかも知れない……。

「ここ、本当に美味しいよね、梨紗」と呼びかける牧人の声で、梨紗はハッと我に返った。

「うん」

「こういうの、何て言うのかなあ、フレンチでもなくイタリアンでもなく、創作料理とでも言うのか、今流行の和洋折衷だね」

「ええ。お刺身があって、そしてシチューも在るって言う、何だか少しへんてこな。でも、料理ありすぎて、わたし、デブツちゃう」と梨紗が初めて言葉を交わすと、スーッとペンションの女主人が近寄って来た。

「ここ、伊豆は初めてですか？」

「あ……ええっと、子供の頃来たかな？ 確か、どこか動物が居る所に行った記憶があるんです。でも伊豆高原は初めてで」

梨紗の脳裏に、チラッとその頃はまだ仲の良い若々しい夫婦だった両親の姿が浮かんだ。

「そこでわたし、転んだんです。確か雨上がりの泥濘ぬかるみに。父がわたしを抱き上げ、母は“しょうがない子ねえ”って言ってた……ような……」

忘れ果てていた彼方の記憶が鮮明になってくるにつれ、梨紗は逆に悲しい気持ちになっていく。それを素早く察したのか、牧人が口を出した。

「彼女、今はお母さんだけで住んでて」

「あら、そうだったの！？ ごめんなさいね」と女主人はわざとらしく無く、優しく謝った。

「いえ、いいんです。もう昔の事だし」

「そうね。今はここで楽しんで下さいね」

「ええーっと……お風呂は、順番ですか？」と牧人が気をきかせて尋ねた。

「薔薇風呂のことですか？ 順番と言うよりも、早いもの順かしら？ もう、一組のお客さんはさっき入られたようだし、少し待っていれば大丈夫ですよ。夜中まで入れますから」

「ありがとうございます」と牧人は礼を言った。

「婚約なさっているの？」とその時突然言われた梨紗は、ちょっとびっくりして、少しだけ黙り込んだ。

「ごめんなさい。そんな雰囲気でしたものだから。それじゃ」

女主人はそう謝ると、次のテーブルに行った。

「ペンションって、親密だけどちょっとプライバシーがね……」と梨紗は慌てて言い繕ったが、牧人は黙ったまま微笑んでいる。

「いいじゃない。そんな風に見えたんなら、ね」

「牧人……わたし達、いつ一緒になれると思う？」

ズバリ聞いてきた梨紗に、牧人は困惑げな表情をした。

「本当はね、一瞬でも早く牧人と結婚したい。でも、無理なのよね。だって牧人……もう直ぐ大阪に行っちゃうし、わたしの仕事もあるし。それに母が一人になっちゃう……。嫌いだけど、でも母を放っておけないのよね」

牧人は黙ったまま、ワイングラスを傾けた。外は暗い闇。そして二人の前途も、それに近い気がする。

「僕だって」とワインを飲み干した牧人は答えた。「早く君を妻と呼びたい。教会ではね、“連れ合い”って言うんだよ、互いの相手のこと。正式ではない内縁のご夫婦だって居るんだから、結構言い方一つだって気を使うんだな」

「“連れ合い”っていい言葉ね」と梨紗は言った。「早く牧人の“連れ合い”になりたい」

「だから……もう二人だけで、婚約しちゃおうか、今夜」

「え？」と梨紗は身を寄せた。

「だめ？」

「いいけど……牧人ったら、自分で自分の司式をするつもりなんだ！ いやだあゝ」

牧人が言ったことは、冗談なのだろうか？ それとも、本気で？ けれども梨紗は悟った。それが、シャイな牧人の精一杯のプロポーズの言葉なのだ。

「今晚、誓いたいな。君を僕の“連れ合い”にするってことを。ずっとずっとずくずく」と

「やだゝ」

そう言いつつも、梨紗は自分がその言葉に完璧に同意している事を感じていた。そして心の底から幸福な気持ちに押し寄せた。

「いいよ、いつだって。わたし、牧人の側なら安心できるの。そして何か辛い事が起こっても、乗り越えられそうな気がする。だから！ そうだよ、牧人があっちに行く前に、わたし達誓わなくちゃ」

「ありがとう、梨紗」

「永遠なんてこの世には無いっていうけど、でも永遠に一緒に居たいの。あちらのご夫婦のように、歳を取っても、ね」

梨紗の瞳は今、宝石のように輝いていた。

このペンションが誇る“薔薇風呂”は、今ではそれほど珍しくないが、やはり一般の家庭では出来ない入浴だろう。お湯の表面一面に、薔薇が浮かんでいる様は、やはり壮観だ。

梨紗と牧人は、薔薇風呂の前で、前に入っているカップルが出てくるのを外階段で待っていた。風呂の扉の前に、『入浴中』の板切れが掛かっているのだ。三月末だが、やはり夜は寒い。

梨紗はふと夜空を見上げた。

「あつ、月に輪がかかっている。明日は曇りか雨だ。やっぱり牧人って、雨男なのね。やだ」

「そうかも」と牧人も天上を見上げながら言った。「星はあんまり見えないね、残念だけど」

「前の人達、遅いなあ」と梨紗が愚痴ると、

「そっちの方が楽しみでいいよ」と牧人。

「牧人って、何事も達観してんのね」

「違うよ。君と居ると、どこでも良いつてこと」

「まっ、お世辞が巧い。あのさ牧人、雨男ってね、韓国では無い言葉なんだって。ヒュンちゃんが以前そう言ってた。不思議そうにね」

「ヒュンジュン君か……」と牧人は遠くの暗い海を見つめた。「そう言えば、ヒュンジュン君、今頃どうしてるかな。彼は唯一の僕の“恋敵”だったんだけど」

「あら？」

「僕は気付いてたんだよ、梨紗。彼がね、君の事、好ましいと感じていたのを」

「ええっ、そうお？」と梨紗はとぼけた。

「それぐらい分かるさ、僕にも」

そう牧人が答えた時、やっと風呂の扉が開き、先ほど食堂に居た若いカップルが姿を現すや、梨紗と牧人が待ちくたびれて立っているらしいのを察したのか、バツが悪そうに互いに顔を見合わせた。

「お、お待たせしました」と、ほとんどまだ少女のような女の子がペコリと頭を下げると、

「いや、別に。お構いなく」と牧人が丁寧に応えた。

このカップルが消えると、牧人はボソリと呟いた。

「僕は、どうももうオジサンの部類に入っちゃうかも、だね。今年で30だから」

「牧人は、そうは見えないわよ」と梨紗は強引に牧人の腕を引っ張ると、風呂の扉を開けた。「まだまだ若いって!」



牧人は眼鏡を外すと、湯気と近視のせいで梨紗がよく見えなかった。けれども梨紗は紛れも無く、一子纏わぬ姿で湯船に浸かっている。色とりどりの薔薇が、梨紗の周りに浮かんでいた。絵のような綺麗さだ。梨紗の身体も美しい。

けれども、日本人と言うのは、どうやら風呂に入るとエロチックな気分は消し飛んでしまうという遺伝子を、古来から持っているらしい。事実、牧人は梨紗を鑑賞していたが、湯船の暖かさの方をより気持ちよく感じていた。

お楽しみは後でいいのだ……。

そう思いつつ、けれども梨紗の側に浸かると、思わず牧人は梨紗に口付けしていた。

「綺麗だね……」

「薔薇？」

「じゃなく……君だよお」

「牧人もイケメン。眼鏡外すと、余計そう感じる……」

「かな？」と牧人は照れる。

「俳優の誰かに似てるっ」

「誰？」

「うーん、誰かつ」

牧人はバシヤッとお湯を掛けた。

「きゃあっ、意地悪っ！」と梨紗は叫んだが、その声には悦びがあった。

「いい気持ちだっ」と牧人はゆっくりと呟き、その露天風呂から空を見上げた。

「何だか、永遠を感じるな。夜空を見上げると……」

「わたし達って、ちっぽけね」と梨紗も又相槌を打った。

ここで奪いたい、と牧人は思った。けれどももしかすると次のカップルが待っているかもしれないのだ。牧人は諦めて、少しだけ身を離れた。この時間が愛おしい。たまらなく愛おしい……。

外に出ると、湯上りの身体にはその冷たい大気が気持ちよかった。次に待っているカップルはもう居ない。みんな各々の部屋に籠っているのだろう。何だか雨が降りそうな湿った臭いがする中を、梨紗と牧人は半ば走って自分の部屋へと戻った。

ボタンと扉を閉めると同時に、二人の思いは一緒だった。

「梨紗……」と微かに喘ぎながら牧人が耳元で囁いたかと思うと、ぐっと梨紗を抱く腕に力が入る。梨紗は黙ったまま、その腕に抱かれていた。

「いい匂いがするね」とだけ牧人は言うと、梨紗を抱かかえるよう

にして、そのブルーのカバーの掛かった天蓋付きベッドに押し倒した。

梨紗は覆いかぶさる牧人の下になりながらも、幸福な笑みを浮かべるのを忘れなかった。

「もう直ぐ別々になってしまいうなんて……考えるだけで苦しくなる」

「でも今だけは、あなたの者なんだから」

「それじゃ僕の者になってくれる？ いい？」

「いいわよ。だから遠慮しないでいいって！ ねえ早く」

思わずそう甘く嘆願した梨紗は、己の厚かましさに顔を赤らめた。

「あなたを求めるなんて……こんなに求めるなんて……」

「求められて嬉しい。これが現実だとは！ こんな日が僕に訪れるとは思わなかった」

「ねえ……もういいのよ、牧人……」

言葉はそこまです。二人は朧ろな月の光にだけ照らされて、生まれたままの姿になり、一つになった。

辺りには梨紗と牧人の服や下着が散らかっていた。梨紗の“勝負下着”であった黒にピンクのフリルの付いたショーツやブラも、牧人の下着代わりのTシャツも、ベッドの脇に投げ捨てられていた。明かりも点けない、ほとんど月明かりだけの部屋の中だが、奇妙に明るく感じる。

梨紗は今、暖房の効いた部屋のベッドの上で、何も着ず牧人のむき出しの胴に腕を回し、肩には自分の頭を寄せて静かに横たわっていた。その長い黒髪がしどけなく梨紗の全裸の肌に纏わり付いており、牧人は黙ったままその髪を撫でていた。

事の終わりの静寂の中、時間は留まったままのように感じる。一体どれぐらいの時間が経ったのか……それすらも今はもうどうでもいい。肌と肌の触れ合いもつれ合い、そしてその甘い余韻に包まれて、今の二人は空間を浮遊しているような気分だったのだ。

けれども現実には直ぐに訪れてしまう。

「あと数日で、僕はここを離れなければならない」

と牧人がボソッと呟いた。「君を残して、一人だけで……」

そう言う、牧人は梨紗の額にそっと口付けし、そして梨紗はその形のいいスラリとした足を更に絡ませた。

「今その事は言わないで、牧人。今はただこうしていたいんだから」

「ああ、そうだったね」

そして又二人は暫く黙っていた。けれども、やがて牧人は半身を起こした。

「何か飲む？」

「あ……そうね……」

現実是否応無しに押し寄せて来るようだ。梨紗も又喉の渴きを覚えていた。部屋はロマンチックだが、けれども乾燥し過ぎているのだ。

梨紗は立ち上がると、ゆっくり窓辺に寄った。遮光カーテンは開け放してあり、ただレースのカーテン越しに遠くに暗い海が見える。月はまだ雲の中に隠れているというのに、部屋は薄ぼんやりとしている。冷蔵庫をゴソゴソ言わせている牧人の意外に締まった裸体もおぼろに見えている。

やがて牧人は何かの缶を持って、梨紗の側まで近寄った。そしてその冷たい缶を梨紗のお尻に当てた。

「きゃっ！ いやだあゝ、牧人ったらあ」

「冷たいだろ？」

欲望は果てたと思っていたのに、新たな欲望がフツフツと牧人の中から湧き上がって来るのはなぜ？ 突如牧人は背後から梨紗を抱き締めた。

「梨紗！ 梨紗。り・さ……僕の梨紗……又いい？」

梨紗はくるりと振り返った。

「離れたくない！ 離れるなんて、いやっ」

「それじゃ、一緒になる日を考えようよ。どうしたらいいか、どうやったら……？」

「あなたが好きなのに……でも仕事とか、母のこととか考えちゃうと、もうどうしたらいいか分かんない。付いて行きたいのに！ 付いて……」

牧人はそんな梨紗の唇をキスで蓋をした。

「今は……ただ君が欲しい……」

二人はもつれるようにして、窓際にしゃがみ込むと横になった。優しい愛撫が梨紗を悦楽に引き寄せ、現実の障害を忘れ果ててしまふ。ただし愛撫や快楽が永遠に続くというのは、嘘。けれども今はただそれだけでいい……。それに溺れていたい。だからここに来たのではなかったのだろうか？

梨紗は再び牧人に抱きついた。

「いいの……いいのよ、牧人……いつでもあなたの者なのだから」

☆ ――― ☆

二人は今はベッドに座り込んでいた。冷たいジュースで喉を潤し、それから黙ったまま並んで、遠くの暗闇と海を見つめているばかり。

「それじゃ新幹線で行くのね、30日に」

「うん。前の晩には、荷物を全部向こうに送るから……」

「今度いつ会えるの？」

「多分……五月の連休かな、休めるのは。牧師って年中無休じゃない？ でもポツカリ暇な時もあるけどね」

「連休、わたし、大阪に行こうかな。遊びがてら」

「もう婚約したんだよね、僕達。霊的にも……そして肉体的にも」

「お星様！ わたし達、婚約したんです！」と梨紗がわざと子供っぽく両手を広げて上げて見せると、

「こらっ」と牧人は小さくそして優しく叱り付けた。

「でもね、牧人。わたしのこと、婚約者として紹介はしないで」

「なぜ？」

「だって、怖いんだもの。何かが起こりそうで怖い」

ふいにリカコの狂った瞳が、フラッシュバックし、梨紗は牧人にしがみついた。

「怖いよ、わたし！」

「分かった、分かった。それじゃ大阪のどこかで会おうよ。でも梨

紗、決して僕から離れちゃ嫌だよ。僕の妻となる約束、今ここでして」

「ええ」と梨紗はまだ強くしがみつinaながら答えた。

「誓って」

「誓う」

「これから何が起こっても？」

「うん。だからわたしを守って」

「いいよ」

牧人は静かに梨紗の髪を撫でていた。梨紗はリカコのこと、そして母香里のこと、それから学校の先生達やその他色々考えていた。考えた所でどうしようもないというのに、それでもやはり考えてしまう。気になってしまう。そして……悲観的になるのだ。

「梨紗……結婚したら、子供欲しい？」

と牧人は安心させるように、微かに梨紗を揺らしながら聞いた。

「うん、欲しい」

「何人？」

「何人でも。でも、今は嫌よ」

「だからちゃんと避妊したじゃん」

「それは、正解！」とやっと梨紗は微笑んだ。

「星が消えたね。明日はやっぱり雨なんだな……」

「雨男っ！」と梨紗が揶揄する。「きっと6月生まれなんだ」

「いいや、12月生まれ。山羊座」

そう言うと、牧人は欠伸をした。

「寝ようか」

「うん」

夜のしじまの中、二人はやっと眠りについた。何が起こるか先のことは何も考えず、ただ誓いだけを信じて。

梨紗と牧人は、翌朝裸のままベッドに寝ていた。牧人は無意識に梨紗の長い髪を撫でていたらしい。ふと目覚めると、室内は暖かだがカーテンの陰から見える外はやはり雨のようだ。

牧人は梨紗の横向きの寝顔をじいっと覗き込んで、我知らず微笑んでいた。激しく愛し合った昨晚が嘘のようだ。けれども現実に愛する人は直ぐ側で寝息を立てている。

牧人は梨紗を起こさないように、自分はそっと起き上がった。

けれどもこの平和な静寂を破るものが……。それは梨紗のケータイから鳴り響く着メロ。

梨紗はハッとして目覚め、それから手探りでベッド脇のテーブルに無雑作に置いていたケータイを掴んだ。そして着信の相手を一瞥すると、一呼吸しケータイを耳に当てる。

「あ……はいはい。宮本でございますが」

「ああ、宮本先生？ 今どこに？ これから直ぐ学校に来られますか？」

「ええっ！？ 校長先生……今からですか？」

「無理ですかね」

「ええっと……午後からなら何とか行けそうですが、何か？」

「君の元の生徒、萩原^{かな}花菜が家出したそうですよ。今朝、お母さんから血相を変えた電話がありましたね」

「萩原……ですか」

梨紗は裸のまま、居住まいを正した。牧人は心配そうに梨紗を見

つめているばかりだ。

「どうやらカレシと失踪したらしいってね、そう仰っておられましたか」

「カレシと!?!? でも萩原はそんな感じの子ではなく……」

「先生っ、ご存じないんですか? お母さんのお話だと、萩原花菜は妊娠中絶したんだそうですよ、最近」

「中絶!?!?」と梨紗は絶句した。「そ、そのようなことは聞いておりませんでしたが」

「とにかく出来るだけ早く学校にいらして下さい。わたしも待機しておりますから」

「あ……はい、分かりました」

最後は尻すぼみになったが、梨紗の声が終わる前に、校長は電話を切っていた。

「どした?」と牧人は、呆然としている梨紗の肩を優しく抱き締めた。大体経緯は分かっていたのだが、そう尋ねざるを得ないほど、梨紗は悄然としていたのだ。

「わたし、早くここを出なくちゃ」

「教師も大変だね、最近は」

「ごめんね、牧人。もっとゆっくりしたかったのに」

「いいよ。昨晚のことだけで充分……と言いたところだけど、やっぱり少しは残念かな。けれど、僕の仕事も似たようなもんだから」

梨紗は少し慌ててベッドから出ると、散らばった下着を着始めた。その赤と黒のレースの透けた下着を見ると、牧人は再び欲望の疼きを感じて強引に梨紗をベッドに引き倒した。そして形のいい梨紗の腰を撫で、覆いかぶさるように口づけする。

「ごめんなさい、牧人……」

「もう一時間でいいから! だって僕はもう直ぐ遠くに行くし、君とは暫く会えなくなるんだよ。だから……」

「ダメよ。ダメ……」

そう心では抗いながらも、梨紗は自然に牧人のされるままになっていく身体を制することなど、もはや出来なかった。

「牧人……もう一度……欲しい……」

梨紗の片手から、ケータイが床に落ちていった。

—— ☆ ◆ ・ ・ ◆ ☆ ——

朝食に食堂に降りた時は既に、梨紗は教師、牧人は牧師になっていた。二人はシャンと背を伸ばすと、慌てて朝食を食べた。

「昨晩は良く眠れましたか？」とオーナー夫人が腰を屈めて囁くと、「はい、よく」と梨紗は答えるのが精一杯。ちらっと見回すと、後のカップルはほとんど居ず、ただ窓際で初老のカップルだけがゆっくりした時間を愛しむように、窓から雨の降るたたずまいをじっと見つめていた。

時折微笑みながら会話する初老の夫婦が、梨紗には眩しく写る。

「ねえ牧人」

「ん？」

「あの窓際のご夫婦のように歳を取りたいわね、私達もまた」

牧人もチラとそちらを一瞥すると、「うん」と頷いた。

「ステキなご夫婦だね」

「そう思う？」

「思うよ」

「わたし達の理想の姿ね……そうなるかしら？」

「なるよ！ なる！ 努力しなくちゃダメだろうけどね。けど僕も又、ずうっと梨紗を愛して共に居たいから」

「何があっても、離れちゃ嫌よ、牧人」

牧人は梨紗の手を取ると、言った。

「昨晚、誓ったじゃないか！」

「ああ、そうだったわ」

ふいに梨紗は涙ぐんだ。本当にこんな幸せが、ずっとずっと続くのだろうか？ 梨紗は懐疑的な自分を呪った。

「信じたいの、わたし。でも……」

「信じて生きていかなくちや」

「そうよね」

「人間が愛し合えるのはね、梨紗、それは神様がまず僕達に愛を下さったからだよ」

一瞬の内に、梨紗をそれを確信した。

「いつかわたし……洗礼を受けるわ。牧人と共に歩きたいから」

「ああ、それまで待っていいようかな」

と牧人はふふつと含み笑いをした。

「雨男っ！ だから今日も雨じゃん」

梨紗の声に、オーナー夫人が振り返った。

「残念でしたわね、今日は雨で」

「いいえ、いいんです。わたし達、もう戻らなくちや。仕事が待っているのです」

梨紗はキッパリと答えた。

ざざざ、ざざざとワイパーが雨粒を刻む音がする車内で、梨紗と牧人は奇妙な静寂に陥っていた。それはもう直ぐ来る別れのせいなのか、将来に立ち塞がる数々の障害のせいなのか、はたまたこの陰鬱な気候のせいなのか二人とも分からない。

分かっているのは、立ちはだかっている現実を直視したくないと言う儚い望み。そして昨晚の激しい逢瀬の余韻だった。

もう直ぐ自分達の街が近くなった頃、やっと梨紗が言った。

「短かったわ……」

「もっと居たかったな」と牧人も相槌を打つ。

「でもいいの。昨日のこと、全部頭に叩き込んでいるから。その断片を思い出しながら、生きていけるもの」

「淋しい言い方はしないで、梨紗。まるで永遠の別れみたいじゃない?」

「うん。分かっているんだけど。それに大阪に赴くのって、牧人にとっては昇級するんだし、本当は喜ばなくちゃならないのに、わたしって未練がましいのね。今頃それに気付いちゃった」

ざざざ、ざざざ……その音は、まるで二人の心象風景のように響く。

「さあて、明日からは本格的に荷造りだあ」

「本とかすごくあるんですよ。でもわたしは手伝えないな。皆に見られちゃうし」

「見られてもいいじゃない?」

「そうかも知れないけど、でも牧人とのこと、あからさまにはした

くない」

「なぜ？」

「様々なことを片付けなくちゃならないでしょ」

「例えば」

「嫌だあ、なんか尋問されているみたいじゃない？」

「そっか、ごめん」

運転しながら、牧人は謝った。

「お袋にはまだ何も言って無い」と牧人がポツンと呟いた。「言うべきなのかなあゝ、ちよつと迷ってて」

「あたしは言った。てか、勘付かれちゃったよ、母に」

「お母さん、何て言ってた？」

「ええつとねえ」と梨紗はチラツと脳裏に、香里の顔を思い浮かべながら言いよどんだ。

「イエスもノーもなし。てか、それ以上何も話が進展していないし。でもあたしは何となく分かるの。母、反対だと思ってる」

「僕の職業の事とかかな」

「いや、それだけじゃないと思う。一人になるのが嫌なのよ、きっと。母って表向きはキャリアウーマンでバリバリ働いているみたいだけど、でもその実数年前ガンを患ってそれから恋人を失い、少しアル中っぽくなった。陰では淋しがり屋なんだと思う。」

それでね……言い難いんだけど……でも言う！ 母、なんかホストに入れあげてみたい……なの」

暫く沈黙が続いた。

「ホストって人、悪い職業は思わない。でもわたし達ってそんなにお金ないじゃない？ それに母って、なんか以前の恋人を振り切ろうとして、無理しているような気がすんのよ。身体も心配だし、それ以上に母の心が心配で、結局側に居てしまうんだと思う。」

わたし、本当は母からは離れたいのに、それなのにどこかで母の

ことが気がかりで」

「そうか」と牧人は溜息と共に呟いた。「梨紗は優しいんだな」

「いや、それだけじゃないの!」と梨紗は叫んだ。「今の仕事、辛い事が多いけど、でもせっかく得たこの仕事、続けたいのよ!」

「こんな不況時に、梨紗のような手堅い仕事はなかなか手放せないよな」

と、牧人は梨紗のうな垂れた横顔を見つめながら言った。

「そんなこんなで。色々あって。わたし、欲張りだよな」

「でも大切な何かを捨ててまで、次のステップに移るのはなかなかなんだよね」

「如何にも、牧師様的なお答えね」と梨紗は苦笑した。

「だけどわたし、絶対に牧人とは離れない! どこに居ても、何があってもそれは変わらないの」

梨紗は思い出していた。昨晚の甘い逢瀬を。牧人の締まった身体を、そして素肌を伝わる抱擁を。牧人の口からもれ出てきた熱い溜息を、それから牧人の全てを。その艶かしさを覚えている限り、牧人からは離れられっこない!

「牧人……それでも愛してくれるよね」

「何言ってるんだよ。僕こそ、これからも僕を愛してくれるかなって思ってたところなのに」

ざざざ、ざざざ……という雨音の響きが切ない。

「新幹線のホームには行かないよ、わたし」

「いいよ。未練が出て、梨紗を離さないかもしれない。それから映画のワンシーンみたいに、ギュッと抱き締めて、ベルが鳴るまで熱いキスをし続けるかもしれないからさ。あははは。僕も潔く一人で出発してくる」

「ごめんね、牧人」と梨紗は身を寄せた。その瞳が潤み、塩辛い涙が鼻をツンと刺す。

牧人は車を路肩に寄せて止まった。

「少しだけ」

そう言うと、梨紗を引き寄せその頬を掴んで口付けをした。短くて長い口付けを重ねたあと、牧人はサッと身を離れた。

「じゃあ、行くな。もう直ぐ市内だよ」

ざざざ、ざざざという音が再び車内を覆う中、その音は愛する二人を雨の中に運んで行った。

< 終わり >

〔10〕 最終話（後書き）

この恋愛小説は、これで終わりに致します。今までお読みくださいました方々、どうもありがとうございます。＊ご感想などありましたら、嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3199i/>

星に祈りを

2010年10月8日12時25分発行